

# 死の支配者とその影『六天将』達

暗愚丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初めまして。暗愚丸と申します。原作の一人で頑張るモモンガさんを見てやはり他のメンバーや自分の好きな種族であるエルフと一緒に活躍するところを見たくなり、又このサイトで出されている『ナザリック四天王』を自分のオリジナルで作ってみたくなり今回の投稿に踏み切りました。ちなみに至高の41人では式式炎雷とたちちみーが好きです。しかしたつちさんをだすと一人だけリアルに帰還しようとしてシナリオが大幅に狂うので現在は削除されてしまったお気に入りの『ナザリック六天将』ネタで行こうと思います。初めての投稿ですが小説家に憧れておりますので、読者の皆様の評価お待ちしております。おきます。(ちなみにこの物語は闇信刃と山明を主人公にそれぞれ視点から展開していきます)

## 目次

第0話	プロローグ〜最後の日の思い出に	1
第1話	ありがとう。そして・・・	14
そして舞台は異世界へ		
第2話	異世界転移	19
第3話	検証と答え 前編	26
第4話	検証と答え 後編	40
第5話	NPC達と平和な日常	49
異世界初の接触〜ドワーフの工匠編		
第6話	外の景色	56
第7話	ドワーフの工匠 ゴンドの意地	68
第8話	ドワーフの工匠 摂政会	79
第9話	クアゴア族とフロストドラゴン 前編	82
第10話	クアゴア族とフロストドラゴン 後編	91
第11話	幕間☒	101
王国の冒険者たち編		
第12話	現実の冒険者はゲーム程甘くない〜王国編	105
第13話	幕間☒	119
第14話	初依頼〜王国編	124
第15話	初依頼〜王国編☒	136
第16話	初依頼〜王国編③	145
第17話	初依頼〜王国編☒	154
第18話	初依頼〜王国編⑤	164

## 第0話 プロローグ〜最後の日の思い出に

Dive Massively Multiplayer Online Role Playing Game。通称DMMO―RPG。仮想世界で現実にいるかのように遊べる体験型ロールプレイングゲームのことである。

“ YGGDRASIL ” 西暦2126年に開発されたそのタイトルは数あるDMMO―RPGの中でも人間種(人、エルフ、ドワーフ等)や亜人種(ゴブリン、オーガ、リザードマン等)、そして異業種(モンスター)等の種族や職業を自由に選べるその自由度と広大なマップで世界中で大ヒットした。

しかし七年後の2133年ごろから別のDMMO―RPGがはやり始め八年目あたりから徐々にユーザーが離れ始め、2138年初旬に半年後にサービス終了するというメールが運営から届いた。

「やばいやばい」そう言つて一人の女性が夜道を走つていた。年齢は約30代で、スーツ姿だった。勤めている会社に今日だけは残業を許してもらい、睡眠時間確保のため明日少し遅れる旨を伝え急いで帰宅した。現在の日本は環境汚染が進み政治は大企業連合と呼ばれる複数の財閥が権力を握つていた。人々はアークロジと呼ばれる有害物質を遮断するバリアーのようなものが包んでいる都市で暮らしており、そのいくつかのアークロジで5000万人ほどの人間が大企業連合が所有する機関で働いて暮らしていた。本来下層域に住む人間は小学校を卒業後(この時代は義務教育は小学校までで中学は廃止されている)、大企業が運営する専門学校に入学し適性試験を受け自分に合った教育を半年〜一年間受け、各企業や役所に配属されるのが通例だった。そういう人たちは残業放棄など許されないのだがその女性は違った。上層域の人間で、所謂勝ち組だった。

私は白金真理華。30歳独身。高校を卒業後両親が勤める会社に就職し、現在総務課で働いている。家族は両親と結婚して現在家を出た兄の4人家族。過去のトラウマで恋愛コンプレックスになった私

の唯一の楽しみは、ゲームだった。ユグドラシルに出会ったのは20歳の時。今までやってきたDMMO-RPGで人間種は飽きていたので、心機一転異業種でやっていこうと思ったのが始まりだった。最初に選択した異業種は「天使」だ。始めて三日目に【天武】というギルドに出会い、友好的な人たちだったのでそのギルドに加入したが、そこでひどい目にあつた。当時異業種狩りという行為が流行しており、ギルド戦の時よく狙われた。異業種プレイヤーを狩ると経験値が多く手に入るだけでなく人間種プレイヤーが特殊な職業に就くために必要だつたからだ。その時【天武】が何故私を誘つたか分かつた。「イヤー、いつも助かるよ」「良い盾になると思ったんだ。」「あ、私もその職業に就きたいから悪いけどフレンドリーファイアしてくれない？」等非常に傷つくことを言われた。

『私にはゲームが唯一の癒しなんだ』『なぜ仲間こんなことができるとだ』『誰か助けてくれ』もうやめようかと思つたその時だった。

いきなり【天武】のメンバーの一人が吹き飛んだ。私を殺そうとしたのと別のギルドと戦つた後だったので、油断していたのだろう。次々と仲間―いや、元仲間がPKされていく。それを見た時の衝撃と興奮は忘れられない。

「大丈夫ですか？シャドウブレイドさん」半魔獣人と白銀の騎士のプレイヤーがそう言つて近づいてきた。私はその理想的な騎士の姿に少し安心していたら、エルダーリッチと思われるプレイヤーが話かけてきた。「たちちさん。やまいこさん。なんかこの人意識が無いっぽいです。」そしたら忍者の格好をした人が近づいてきて「まさかリアルでなにかあつたんですかねー。運営に連絡してみますか？」その台詞で私はあわてて「いえいえ！大丈夫です。ありがとうございます。でも何故知人でもない私を助けてくれたんですか？」と尋ねると、白銀の騎士が「愚問ですね。仲間裏切られ殺されそうになつてゐる。理由なんてそれだけで十分です。」すると多分エルダーリッチが「いえ、やまいこさんから事情を聴いて助けに来たんですよ。」と言われて以前盾にされたことを話した学生時代の先輩を思い出した。すると半魔獣人のプレイヤーが近づいてきて「てゆーか一番先に礼を

言う人間違えてない？」そう言われて驚いた。「・・・まさか山瀬先輩？」「ストップ！ここでリアルの名前はダメだぞ後輩。」

それが私が一生分の楽しい思い出を作れた大切な居場所。「アイズ・ウール・ゴウン」との出会いだった。

【アイズ・ウール・ゴウン】最盛期には2000〜2100とも言われたギルドの中でたった41人（私が加入した時は20人だった。）で第九位にランキングしたユグドラシル内では有名なギルドだ。そのギルドは他のギルドとは違い、『？アバターが異業種である事』『？プレイヤーが社会人である事』を加入条件としサービス開始当初から流行っていた『異業種狩り』と呼ばれるPK「プレイヤーキラー」に對抗することに燃えるギルドだった。

余談だが、結成当初は【ナインズ・オワン・ゴウン】（2126／10〜2127／11）という9人しかない弱小ギルドだった。【漆黒の牙】という6人しかないギルドを仕切っていたウルベルトさんが加入し、そこからリアルでの知人の紹介などでヘロヘロさんから5人が加わり現在に至る。（私が加入したのはこの翌月）

モモンガさんと式式炎雷さんの話を聞いて加入を頼んだ。幸い加入条件も満たしており問題はなかったが、“悪”を信念とするギルドで天使というのはあまりに浮いており、私自身このアバターでは昔を思い出してしまい心機一転したかったので、アバターを変更したいとギルドメンバー（以下ギルメン）に頼んだら喜んで承諾してくれた上、何人かがレベル上げに付き合うと言ってくれた。聞けばギルドマスターのモモンガさんも、前線指揮官のぶくぶく茶釜さんもPKされそうになっていた所を助けられて、今は自分たちもかつての自分を守れる存在になりたく、今のギルドに入ったと聞いてより一層このギルドが好きになった。

その時私は誓った。このギルドに忠誠を誓うと、カンストしたら、今度は自分がギルメンを守ろうと。

今まで私を狙ってきたプレイヤーは“異業種を狩る正義の味方”等を標榜する連中だった。

私だっってもう大人だ。リアルではそういう連中が国を支配しているのは知っている。綺麗ごとだけでは、政治は出来ないし食べていけないことも。上層域に住んでる人間として、生きてくためにはある程度の理不尽は受け入れるしかないことも知っている。でも貴様らのやっていることは許せない！。例えリアルでのストレスを解消したくても、嫌なプレイスタイルに他人を巻き込むな！。中二病プレイがしたけりやせめて同意を得ろ！。

そこで初めて自分のプレイスタイル。仮想世界での自分の生き方を見つけた。ならば私は正義に背を向ける。私は悪党でいい。しかし悪党とはただ無法に略奪し無辜の民を虐殺することを唯一の快楽とするものに非ず。それは外道と言うのだ。真の悪は、法を破ってでも信念を貫くために生きている者を言うのだ。現実ではアークロジー内で監視されて生きている人間にそんな生き方はできない。ならばせめて仮想世界では、そう生きたい。

そうなるとう度はアバターづくりはどうしようかと悩んだが、モモンガさんの「自分の好きな戦闘スタイルで決めたらいいよ。」という言葉に触発されて死霊（レイス）に決めた。理由は3つあり、？自分が求める戦闘スタイルに適したスキルがあったから。？運営の知り合いに話したら、趣味に合うスキルを追加してくれたから。？他のメンバーで死霊を選択した人がおらず、アバターが被らなかつたから。

そうして二カ月後、もう一人の私は完成した。種族は死霊（レイス）の上位種【英霊（サーヴァント）】。

更に、今までの自分と決別するという意味で、ユーザー名も「闇信刃Ⅱヤミシバ」に変更し、信念を貫く為に地獄から這い上がった亡霊騎士という設定で行くため、口調も変えた。（やまいこさんは爆笑していた。）ちなみに最初は盗賊か家臣らしく忍者もよかつたんだけど、自分の戦闘スタイルを求めた結果、聖騎士たち・みーの影の闇黒騎士という設定で行くことにし、職業も騎士関連と盗賊関連を選んだ。偵察兼物陰から打つというスタイルが式式炎雷さんしかおらず、自分のしたかった役割ができて更に敵の戦士タイプと闘う時剣で応戦し

味方が来たら霊体化ですり抜けてから（一度使うと30秒のクールタイムが発生するが）『ネガティブタッチ（負の接触⇨麻痺+ダメージ）』や『ドレインタッチ（略奪の接触⇨HPの吸収）』『ソウルタッチ（靈魂の接触）』などで敵のHPや経験値を削りつつ仲間と連携して応戦できたからだ。（とはいっても一撃の威力は式式炎雷さんには及ばない為、スキルを多用して勝負していた）

本当に・・・楽しかった。

そして月日は流れ、3年11カ月前にたちさんとウルベルトさん（ナザリック最強の二人が）がそろって引退してから、徐々にギルドメンバーが引退していった。

そして2138年6月。サービス終了のメールが送られてきたときアインズ・ウール・ゴウンは36名が引退。残り5名の弱小ギルドとなっていた。

そして現在：サービス終了当日PM18:00。私こと白金真理華は、合成食品（この時代はパックの中に味付けした流動食品が一般的で、アーコロジー内で飼育や栽培されている肉や野菜などは絶対数が少ない為高級品でレストラン等の施設も上層域の人間でも毎日の利用はできなかった。）と果物で夕食を済ませ、念の為トイレも済ませて、ユグドラシルにログインし、ナザリック地下大墳墓第9階層円卓の間に来ていた。現在PM18:15どうやら私が一番乗りだったらしい。果たして何人集まるのだろうか？

一カ月前に『来月が最後なので、最終日皆で過ごしませんか？』というメールがモモンガさんから届いたのでモモンガさんは確実に参加：というよりあの人がない状況が想像できない。私も大概だがあの人ほど、ユグドラシルとこのギルドを愛してる人はいないと何故か確信があったからだ。

待ってる間、自作のNPCとの会話（独り言）を楽しもうかなという時、式式炎雷さんが現れた。



式式「おお、闇信刃さん。お疲れ様です。やはりあなたが三番手でしたか。」

闇「お疲れ様です。盟友式式殿。式式殿も残業無かったのですか？」

式式「はい。前日に22時迄会社に残って、今日の分少しでも減らしましたから。打ち合わせを明日に変更してもらったり。おかげで17時45分に帰宅。18時ジャストにログインできました。ははっ。」

闇「ところでなぜ我が三番だど？一番乗りは誰ですが？」

式式「意外なことにへろへろさんです。実はへろへろさんの会社の上司がボロを出しましてね。自分の友人にその証拠が送られてきたらしいのでその人の働きかけで社長が変わったそうです。現在はグレイ企業と呼べる迄改善したらしく今日有給取れたらしいですね。後何番手か分かったのは、本名は後日まで内緒ですが、同じ会社ですよ。私たち」

闇「サプライズというやつですか？まあ最後ですしプライベートを根掘り葉掘り聞くのはやめましょう。それよりも一緒にナザリツクを見て回りませぬか？今日で見納めですし。」

式式「ええ。実は半年前にホワイトブリムさんに許可もらって設定いじったNPCを誰かに紹介したかったんですよ。」

闇「一番乗りのへろへろ氏は？」

式式「ミズガルズの『最終日記念バザー』に参加してますよ。そこに上司の命令した証拠を集めてくれた人がいるのでお礼を言ってくるそうです。後外装データとスクロールを買い漁るそうです。さあ行きましようか。」

式式さんはそう言うのと9階層のプレアデスが待つ廊下に私を招いた。

待機していたのはプレアデスの末妹であり指揮官であり第八階層【桜花聖域】守護者オーレオール・オメガ（ブループラネット作）とブルンド色に近い茶髪を後ろでまとめ眼鏡をかけたハルカという一般メイド（ホワイトブリム作）。そしてナーベラル・ガンマ（式式炎雷作）

だった。

式式「ふふつ、どうですか？私の（こんな女性に甘えたりツンデレされたり叱らりたい）3人です。」

闇「そういえば貴公はMであったな。しかしオーレオール・オメガは良かったのか？」

式式「いえ……。ブループラネットさんとは引退前にNPCのことで話したら「あの子の製作には式式さんとタブラさんにお世話になりました。彼女は私たちの義理の娘のような存在です。よろしくお願います。」と言われてますし、許可を取ろうにも肝心の本人は、半年以上前に亡くなってますから」

闇「なんですって!？」

式式「理由は教えてくれませんでした。が、実験中の事故だそうです。彼の勤め先の大学に確認を取りました。」

闇「そうでしたか……。それは残念であるな。できれば今日一緒に話したかった。」

正直シヨックだった。リアルでのブループラネット氏は大学で助教授をしていることしか知らなかったが、自然に対する愛情は深く良く夢を語り合った。私の設定を緑溢れる故郷を踏みにじられた故に復讐の刃と化し地獄から舞い戻ったにしてくれと頼まれたときは笑いながら返答に困っていたことを覚えている。実に楽しかった。

《モモンガさんがログインしました。》

そうこうしているうちにこの最終日の主役がやってきた。

モモンガ以下モモ「良かったー間に合った。あ、お久しぶりです。式式さん。闇信刃さんも忙しいのに来てくれてありがとうごさいます。」

そうやって現れたのは漆黒の魔術師のような両肩に大きな赤い水晶を付けたガウンを身に着けた骸骨だった。

ギルドマスター、モモンガ。種族は「オーバードード」死の支配者」で700種類の魔法を使いこなす後衛型魔法使いだ。

私は入団してから2年後まで知らなかったが、元々アインズ・ウー

ル・ゴウンのリーダーはたち・みーさんでした。しかし方針を決める時ウルベルトさんと喧嘩してそのせいでギルドの作戦が決まらず、結果いつも仲裁している盟主が選挙で新しいギルドマスターになった。最もナザリックという本拠地を得て、メンバーが41人になってから彼の仕事はナザリック地下大墳墓とギルドメンバーの指揮と調整に徹していた。

だからこそ『アインズ・ウール・ゴウン』はユグドラシル内で第9位にランクインし、恐怖の代名詞と呼ばれるほどに成長したのだろう。

私達は先程の式式さんと話していたことを語った。

モモ「設定変える前にひと言連絡してくださいよ。ほかのメンバーが知ったら絶対文句言われますよ。てゆうかよく設定変えられましたね？それは自分で作成した奴以外は俺の許可が必要なはずですが？」

そう。NPCは制作時製作者の名前を3名まで入力でき、その人以外での設定変更はモモンガさんが持つギルド武器を使う必要がある。

式式「はい。オメガは製作者の欄に自分の名前入ってますし、ハルカはホワイトブリムさんが引退直前に設定変更をして頂きました。最も人物設定だけでなく忍者的な職業ビルドを70、メイド3だけでなくコックを1、フアーマーを5、加えてみました。計79レベルです。」

闇「盟主はこれで良かったのですか？」

モモ「ええ。以前自分のわがままも聞いてもらえましたし。」

闇「そういえば宝物殿の守護者を作りたいと言ってたつちさんとウルベルトさんの引退記念に敵対ギルドを2つ潰してNPC作成LVを新たに1000手に入れたんですね。」

モモ「ええ。そして宝物殿守護者を3人も作成できましたしね。」

闇「私の娘もな」

そう。ナザリック地下大墳墓設立当時はNPC作成LVが500しかなく私は作成できなかったがこの時私に180LVが割り振られ第一階層守護者と二人目の桜花聖域守護者を作った。

一人は90LVの人間の女侍ともう一人は70LVの金髪エルフだ。理由は異業種ギルドで最初の守護者が人間だったら楽しいなと思っただのと90程度なら『弱い、攻略が楽』と思われれば3、4階層で他のNPCが大打撃を与えられると思っただから。

もう一人のエルフは単にオーレオール・オメガが一人だと可哀想と思っただことと金髪巨乳エルフを作りたかったから。(茶釜さんからは愚弟と話が合いそうだねと笑われた。)

《武人建御雷さんがログインしました。》

《へろへろさんがナザリック地下大墳墓に転移しました。》

《やまいこさんがログインしました。》

現在18:50。昔話に花を咲かせ始めた頃、メンバー到着の知らせが入った。

モモ「おおうっ、まさか本当に来てくれるとは。へろへろさんとはもかく武人武御雷さんはメールを貰ったとはいえ半信半疑でした。やまいこさんは確か妹を連れてくるから別の場所ですね。」

武人武御雷以下武人「久方ぶりですモモンガ殿。そして式式殿と闇信刃殿も。念のため聞きますが、たち殿は？」

モモ「いえ……。やはり無理だそうです。」

たちさんは今から4年前の1500人の大侵攻(ユグドラシル内においてもはや伝説の事件)の数日後に引退した。理由は奥さんの出産。これから仕事と子育ての両立でゲームは不可能だそう。

武人武御雷さんはギルド加入から『打倒たちさん』に燃えていたためシヨックだった。

その後も彼は半年程たちさんを超える神器と戦略コンボの開発に力を注いでいたが、仕事が忙しくなったのを期にユグドラシルは半引退状態だった。今回参加してくれたのは仲が良かった式式さんに是非にとお願いされたのと娘さんが高校を卒業し家を出て肩の荷が下りたからだそう。

ちなみにリアルの武御雷さんは俳優でマイナーだが時代劇業界ではそれなりに知られている。

式式「武御雷さんの出演した映画、無事クランクアップしたそうですね。おめでとうございます。」

武人「恐悦至極。放映は2週間後なので、是非見て頂きたい。」

二人とも日本や中国の時代劇が好きで、それ以外にもゲームなどの趣味が合うためとても仲が良い。

へロへロ「以下へロ」二人とも羨ましいですねー。私なんか一日平均14時間労働と休日が2週間に一日ですから。転職先もブラックなんで、半年前から時間の感覚がおかしいんですね。」

モモ「そういえばユグドラシルは一年10カ月ぶり位ですよ。お体は大丈夫ですか？」

へロ「体ですか？チョーボロボロですよ。まだ医者にかかるほどじゃありませんが…。三カ月前に経営者が変わって利益も上がったんでようやく週一で休めるようになりましたし今日有給休暇取れましたんで来れました。朝10:00位まで寝てたんで今日は最後までお付き合いしますよ。明日は4時半起きですけど。」

式式「やまいこさん間に合うといいですねー。」

へロへロさんはリアルではプログラマーで、ユグドラシル時代からブラック企業に勤めておりユグドラシルには週一、それも4時間位しか参加できなかった。

闇「各々方。リアルの話は一時忘れましょう。それより一月前に取引をしていた「闇の魔人衆」から『ユグドラシル終了記念バザー』に招待され世界級アイテムと、聖遺物（レリック）級の変装用アイテムが売られていた。小生が好きな外装だったので譲ってもらったので紹介したい。」

私はユグドラシル文字が読める眼鏡を着けるとワールドエネミーの弱点が解る処理が施された変装用具を人間の外装に憑りつき（スキルで）着用して皆に笑われたり驚かれたりで、話をリアルから逸らして楽しんだ。

余談だが、武人武御雷さんの装備を取るため宝物殿に行く時宝物殿守護者に一緒に会いに行こうと言ったらモモンガさんだけが遠慮した。理由は黒歴史を見たくないからだそうだ。

《やまいこさんがナザリック地下大墳墓に入りました。》

19:55、その台詞がコマンドスクリーンに映し出された時を同じくして侵入者を知らせる警報が鳴った

武人「むつ？これ侵入者を知らせるやつですな。どこぞの馬鹿が最終日記念に攻めてきたということですか？」

モモ「いい趣向じゃないですか。こうゆうサプライズ俺好きですよ。ドーです皆さん。最後ですし迎撃しませんか？」

式式「いいですねー。最後ですし目いっぱい楽しみ…」

やまいこ「以下やまーおーい。モモンガさん警報切って第一階層に来てくれない。あたしです。妹連れてきました。」

突如やまいこさんから「伝言(メッセージ)」の魔法で連絡が入った。

モモ「あー皆さん。これ敵対ギルドのサプライズじゃありませんでした。侵入者は山明さんらしいです。」

闇「そういえば妹を連れてくると我にも連絡がありましたな。」

大切な友人が時刻に間に合ったので喜ぶべきなのだが期待していただけに全員二の足を踏んだ。

やまいこさん。本名は山瀬舞子。私の高校時代の先輩で、リアルでは小学校の教師である。ゴーレム種の『半魔巨人』という種族で帽子を取ると黄緑色の岩に眼球がついたような外見だ。ギルド内のあだ名は『脳筋ヒーラー』。職業レベルが格闘系と信仰系魔法に特化しているためだ。また、私とモモンガさんの為に最後までギルドに残り週に一度ログインしていざという時の為に大金とアイテムを稼いでくれた恩人でもある。ついでに私がアインズ・ウール・ゴウンと出会うきっかけをくれた人でもある。

次にやまいこさんの妹の「山明さんみょう」さん。本名が山瀬明美なので、山と明を取ってつけたらしい。やまいこさんも山瀬舞子だから流石姉妹だ。実は山明さんはダークエルフなので、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーではないのだが、私とやまいこさんが皆に頼んで、ナザリックに客人として招待したことがある。山明さんは生

産職を取得しており、その縁でアイテムの取引をしていた。その彼女から一カ月前メールが届いた。「うちのギルド解散したので、最終日其方にお邪魔できませんか？」モモンガさんに確認したらOKだったので、楽しみにしていた。

しかし彼女はギルドのゲストメンバーを示すアイテムを所持していたはずだが：何があった？。

20:00ジャスト。最短ルートで第9階層まで来たやまいこさんは何と客人を二人連れていた。

一人は言うまでもなく妹の山明さん。外装は本人曰く身長155cm、体重45kgとやや小さい。アウラやマーレと違い金髪ではなく胸元まで届く長い銀髪だ。やや細いがブルーサファイアのような瞳は右側だけ眼帯型の眼鏡をしてるがれっきとした聖遺物(レツリツク)級のそうびである。文句なく美人と言える整った顔立ち、本人も女性であるはずなのに比べると腰はくびれている。(本人曰くギルドの女性陣の9割がエルフ巨乳派らしい)しかも装備は胸から腰まで守る白銀色の軽鎧で某アニメのアンドロメダの聖衣に似ている、左肩にドラゴンのインゴットが付いている。魔術師らしくその上に藍色のフードと袖付のローブをはおり肩口にドラゴンのインゴットが付いている。ギルド内での立場は生産だが戦闘時はエルフらしく魔法を使った後衛型らしい。(モモンガさんと同じ)敵めがけて先頭で突進する姉のやまいこさんとは違い盗賊系スキルで隠れた所から魔法をお見舞いし、接近されたらナイトブレードの罫魔法で距離を取り魔法で仕留める戦闘スタイルらしい。そのためタンク役の手助けが必須らしい。

もう一人は人間の騎士だ。赤髪の端正な顔立ちで背は高めで、白銀の騎士と言う単語がピッタリの装備をしている。彼はNPCのアシエリートだと紹介してくれた。

山明さんが所属していたギルドは実は一年以上前に解散してしまった。本拠地には、彼女に最後までこのゲームを楽しみたいと言った友人二人と拠点NPC12人とプレイヤーに付き添う傭兵NPC

3人とワールドアイテム一つに金貨100億枚。

友人の一人は解散する一年前に始めたばかりで今だにはまっっているらしくリアルで仲良くしてくれたのもう少し続けることにしたんだとか。

山明「驚かせてすみません。モモンガさんゲストメンバーの指輪、ありがとうございます。」

モモ「やまいこさん。次からはナザリックに入る前に連絡してください。最も次なんてないんですけどね。(笑)」

闇「メンバーは3人残っていると聞いたが他の方々は？」

山明「一人はどうしても外せない用事があった。もう一人の娘はここで知り合った彼氏と一緒に本拠地(ホーム)で終了までいるそうです。」

式式「イヤー、やっぱ山明さんの外装いいですねー。アウラやマーレと同じダークエルフでも切れ長で水色に近い青の目、銀髪、やや背が低いがボン・キュツ・ボンの体型。ビキニアーマーを見たときよく運営からクレームが来なかったと思っちゃったよ。」

山明「一度着てみたくなって。でもその時お姉ちゃんに怒られたから今日は着てきませんでした。」

やまいこ「姉としては少々複雑なの。それに今日はユグドラシル最終日でしょう！かっこがつかないよ。」

山明「私もそう思って最強かつお気に入り着てきました。」

へろへろ「あのー。後4時間も無いんで、第一階層に転移してゆっくり見学しながら玉座に行きませんか？武御雷さんは装備取ってきただんですよね？」

武人「うむ、抜かりは無い。モモンガ殿とへろへろ殿は一応1〜7階層までのトラップ装置を切つただけですか？」

モモ「はい。OKです。では皆さんで転移しますか？」

こうして私達は第一階層から思い出に浸りながら玉座に向かった。



## 第1話 ありがとう。そして・・・

山明「どうでしたか？世界級アイテムの力。」

現在第六階層円形闘技場。此処で、世界級アイテム『神核』を使って『森の管理者』ハイエルフ』という種族になった山明VS武人武御雷とモモンガの試合の感想を語っていた。

モモ「イヤー、強かったですね。ステータス見たらビックリしました。総合レベル110になってましたからねー」

式式「まさか『ワールドチャンピオン』と『ワールドデザイナー』がセットで職業レベルに加算されるとは」

武人「うむ、山明殿は生産職で魔力系魔法は護身用程度身に着けていないからワールドアイテムの効果で、種族が変わっても楽勝と踏んでいたがな」

モモンガと武御雷とで、二戦行いかなり苦戦しながらも対モモンガ戦は山明の勝利だった。山明は彼女が所属するギルドでは武器や防具やポーション等の消費アイテムの生産が主な仕事だったので現在のアインズ・ウール・ゴウンのメンバーには勝てないと誰もが思っていた。次に闘った武人武御雷もHPが20%以下になったら負けと言うルールで武人武御雷をかなり追い詰めていた。

山明が使用したワールドアイテム『神核』は人間種でも種族を上位種に変えて(種族レベルは無い)職業レベルに『ワールドチャンピオン+ワールドデザイナー』という年に一度9つの世界でそれぞれ開催されるイベント(○○〇〇土地の名前)世界大会に出場して優勝しなければ取得できない職業が加算される。

さらにエルフならエルフ上位種にしか使えないスキルを取得し更にステータスを上下させる魔法又は、スキル以外の全状態異常無効+全ステータスを30%UPさせる。(運営曰くこれ以上ステータスを上げるとゲームバランスが崩れるとか)

其の事を話しながら第9階層に着いたとき時刻は23:30を過ぎた所だった。

へロ「おっと、そろそろ玉座の間に移動しましょう。最後のイベント逃しますよ」

闇「そうですね。おっと、盟主。『スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』を持っていくのを忘れずにお願ひしますぞ」

モモ「了解です闇信刃（やみしば）さん。最後の最後まで活躍の場が無いなんて悲しいですからね」

武人「懐かしいですな。拙者もこれを作るために無茶をして女房に怒られた」

モモ「それに関しては頭を下げる他ありません」

やま「大丈夫。皆真剣に望んで遊んだ結果なんですから」

へロ「皆さん椅子と盃は持ちましたね。そんじゃあ行きましょう」  
全員がギルド武器を制作した時の苦労を語りながら、そして、深まつていく絆を感じながら第10階層の玉座の間に向かった。

途中セバス・チャンと戦闘メイド「六姉妹Ⅱプレアデス」を連れて行った。モモンガさんの「最後位働かせてあげないとね」と言う意見には全員が賛同した。

天使と悪魔の彫刻が彫られた大扉を開けるとそこには荘厳な玉座の間だった。闇信刃も我ながら見事なものだと自画自賛し41の旗が掲げられた赤絨毯の道を歩きセバス達を道の真ん中に待機させ席順を決めて全員が座った。

席順は式式炎雷と自分こと闇信刃が玉座の両隣に席を取り、他のメンバー十山明が階段のすぐ下に腰を下ろした。

これは余談だが、最後の号令の前に一つ余興があった。

モモ「あれっ、見てください。アルベドの持つてるのって『真なる無Ⅱギンヌンガガフ』じゃありませんか？」

やま「本当だ。誰が持たせたのこれ」

へロ「そういえばタブラさんが引退前にアルベドで遊ぶって言うってたなあ」

武人「それが世界級アイテムを持たせることでござるか？」

闇「そういえば設定ってどんなん・・・どうでしたかな？作った当初は凄い人に仕上がりましたので皆浮足立って騒ぎましたが」

山明「私も初めて見た時は驚いたなあ。美人でスタイル抜群であたしのアバタータブラさんに作ってもらいたかったと本気で思ったなー」

モモンガさんがギルド武器を使い設定を調べると設定欄が一杯だった。

やま「長つ、流石設定魔のタブラさん」

山明「うわっ見て最後の方《ちなみにビッチである》って」

式式「タブラさんを非難するつもりはないがこれは変更すべきでは？何て言うか締まらないですよね」

へ口「ギャツプ萌えだったからなー、あの人」

全員が3年前にギルドを去った仲間を思い出し、笑いながら、設定を考えモモンガさんの『ギルメンを愛している』が採用、変更された。山明さんも入れようと思ったが「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーではない以上それはおかしいと思われ記載しなかった。

モモ「さて…。そろそろ時間です。本当に名残惜しいですが、最後の乾杯といたしましょう」

モモンガさんがそう言って全員で考えた最後の号令にジュースをコップに次いで全員に配った。ちなみにこのオレンジ色の液体のアイテムは只の守備力アップの消費アイテムである。

時刻は23：55。私もコップを受け取り立ち上がった。

モモ「では最後の締めにあインズ・ウール・ゴウンを代表して音頭をとらせていただきます。」

やま「よっ待ってました」

モモ「皆さん…。お忙しい中来てくれて本当にありがとうございしました。ユグドラシルが無くなってしまうことは悲しみに耐えませんが私は最後に皆さんに合えたことは幸せであり誇りです。」

闇「盟主、それは此処に居るものも去ってしまったものも同じ気持ちですよ」

武人「この期に及んで女々しい話はよそうモモンガ殿。我らはユグドラシルが好きで、そしてここで出会った仲間が好きだからこそ集った。感謝などひつようあるまい。全員の気持ちだ」

モモ「それでもです」

山明「私はアインズ・ウール・ゴウンのメンバーじゃないけどこのゲームで出会った仲間と学んだことは一生の宝です。もちろん【黄昏の妖精】も【アインズ・ウール・ゴウン】もどっちも大好きです。」  
へロ「次に会う時はユグドラシルⅡとかだといいですねー」

山明「あつそれ私も賛成です。次は私も異業種を選択しますのでギルドに加えてくださいね」

モモ「もちろんです。どうか皆さん。此処で出会った仲間と思い出を忘れないください。そして今までありがとうございました。」

モモンガ以外全員「ありがとうございました。」

モモ「では皆さん、最後はビシツと決めましょう」

全員が立ち上がり、手を上に伸ばしコップを掲げた。私も気分は嬉しさと悲しみで最高潮だ。リアルの私もきつと涙でひどい顔だろう。残り30秒。さあ最後の締めだ。

モモ「アインズ・ウール・ゴウン万歳」

モモンガ以外の6人「[[[[アインズ・ウール・ゴウン万歳]]]]」

ただの真似だがステータスUPアイテムをグイッと飲み干した。

全員が目を閉じた。そして強制ログアウトしたらすぐに寝てそして…。

闇「あれっ…?」

ゆつくり目を開けるとそこは自分の部屋ではなくナザリック地下大墳墓の玉座の間だった。よく見ると他の6人も一緒だ。皆困惑している様子だった。

モモ「ログアウト…してない」

開口一番はモモンガさんだった。

式式「時刻は…0時を過ぎてますね」

武人「ぬう…。最後だというのに絞まらんな」

へロ「ちよつと…おかしすぎますよこれ。サーバードアウンが延

期になったんですかね。でもそれなら通知がないわけがない。通知なしで延期なんて下手したら裁判沙汰ですよ。」

その時、驚嘆の声が上がった。

山明「どうなってるんですかこれ…。コンソールが開きません」

やま「ちよつと…。これどうなってるの？誰か、コンソール開く人いる？後強制ログアウトも試して」

式式「だめだ。チャットもGMコールも受け付けない」

全員の混乱が頂点に達した時急に感情が沈静化し焦っているのを自覚しているのに何故か心が落ち着いているという奇妙な感覚が私を襲った。

闇+モモ+へロ「あれっ…。なんか落ち着いた」

取り敢えず皆を落ち着かせようとした時、突如聞き覚えのない声が出た。

「落ち着いてくださいますか、どうかなさいましたか？至高の御方々」

比較的落ち着いていた私とモモンガさんと式式炎雷さんがその声の方向を向いた。

そこには困惑の表情をしたアルベドが鎮座したまま話していた。

## そして舞台は異世界へ 第2話 異世界転移

玉座の間に集まったギルメンは絶句していた。ギルメン全員の意識が一人：いや一体のNPCに視線が集中しているからだ。

さもありません。会話などできないNPCが喋っているのだ。

基本的にNPCに会話などする機能はない。もちろん現代の技術ならプログラムを設定すれば特定の仕草や言葉や効果音を出すことは設定可能だ。しかし目の前のアルベドは明らかに設定にない会話をしている。しかも目を凝らせば唇が複雑に動いている。これはプログラムのプロであるヘロヘロさんにも不可能な設定だ。

モモンガと闇信刃とヘロヘロは何故か他のギルメンより冷静になっっている為、アルベドをなるべく刺激しないように話しかけた。

モモ「大丈夫だアルベド……。どうやらGMコールが効かないように、少し困っているだけだ」

私はモモンガさんグツジョブと内心思いながら、もしアルベドが今の異常事態の事を理解しているのなら教えてもらおうとお願いしようとした時返事は来た。

アルベド「申し訳ございません。私はGMコールなるものが何を意味するかも存じ上げません」

期待している答えではないが、NPCにも現状が解ってないようだ。

ともかく現状把握が最優先だ。とにかく皆を落ち着かせて話し合わなければならない。私は盟主に小声で提案した。

ヘロ「モモンガさん、闇信刃さん。皆の様子を見る限り冷静なのは我々3人だけのようですね。原因は不明ですがまずは現状把握を急ぎませんと」

闇「盟主殿、先ずは皆を落ち着かせてるにはどうしたら」

モモ「いい考えがあります」

そう言うのと頭に妙な電子音が響いた。何だと思った瞬間何故か頭

に指をあてて意識を集中した。すると電子音が鳴りやみ頭に直接声が響いてきた。ナニコレ、長年やつてるように自然に体が動いた。

モモ「皆さん落ち着いてください。俺です。モモンガです」

やま「ウワツ、モ、モモンガさん？まさかこれ「伝言」メッセージ？」

山明「魔法が…使えてる？」

私も驚いてますよやまいこさん。しかも誰に習ったわけでもないのに「伝言」の魔法が来たらどうやって意識を繋げるか、忙しかつたらいったん切る方法とかハッキリ解る。

式式「ありがとうございますモモンガさん。私もようやく落ち着きました。「伝言」の効果といい、NPCといい、色々と検証が必要のようですね。」

武人「拙者も同意する。魔法やスキルに剣技等各個人の實力。現在の状況確認、やることが山積みですな」

アル「あの、モモンガ様。何か問題でもございましたか？先程から様子がおかしいのですが」

モモ「何でもない。それよりもアルベド、セバス、お前たちに頼みたいことがある」

アル「至高の御方々のご命令ならば何なりとお申し付けくださいませ。」

セバス「はっ、何なりとご命令を」

私はNPCたちの返答に若干の驚きと不安を感じながら話を聞いていた。

モモ「セバス、お前は「伝言」を使えるプレアデスを一名連れてナザリックの外周を見て回ってこい。範囲はナザリックを中心に半径一キロ。制限時間は2時間だ。もし人間などの知的生物を発見したら、なるべく穏便に話して連れて来い。もし何か要求されたらプレアデスに頼んで「伝言」を繋げてもらえ。要求を呑んでいいか検討する。」

セバス「承知致しました。モモンガ様」

セバスが立ち上がった時、ヘロヘロさんから声が掛かった。

ヘロ「私からも一ついいですか？セバス。もし外で知的生命体と出会う話を通じず交戦となった場合、闘うのはあなただけですセバス。ナーベラルは「伝言」で現状を伝えつつ撤退を優先してください。いいですか、もし外の生物と戦闘になったら絶対に撤退なさい。約束ですよ」

セバス+ナーベ「承知致しました。ヘロヘロ様」

そう言うときセバス達は玉座の間から去った。

モモ「残りのプレアデスたちは第9階層の入り口で侵入者が来ないが警戒に当たれ」

プレアデス（以下プレ）「畏まりました、モモンガ様」

プレアデスも退出した。

闇「さて、あと何が必要ですか」

私は皆の方を向いて尋ねた。私としては自分のNPCと式式さんと一緒に色々と話したいな。実際初恋の人をモデルに作ったナーベラルが動き出したんだからあのひとどう考えてるのか気になるし。

やま「ねえ、私思っただけで他のNPCはどうなんだろう」

ヘロ「私もソリユシャンと一度じっくり話したいと思ってます。皆さん、私は一度NPC全てを一ヶ所に集め話し合いたいと考えてます」

その台詞に全員は頷き同意の色を見せた。

式式「私も賛成です。正直ナーベラルたちが自動的に動いていた時はかなり動揺しましたが、NPCとの会話は現状把握に必要なことかと。私もナーベラルの事が気になります」

やま「ねえ明美、あなたのNPCのアシエリート君はいる？」

私も山明さんのNPCに視線を向けた。前に一度聞いたがたしか明美というのは山明さんの本名だったと思う。

聞いた山明さんは頷き跪いてる自分のNPCを見た。

山「ねえ、アシエリート：君？ちよつと立ってもらっていいかな」

アシエリート（以下アシエ）「OK。マイプリンセス」

アルベドやセバスと違いやや軽い口調で彼？は立ち上がった。

その様子は一見女性を口説こうとしている優男に見えるが、自分の



創造主を見ている時の瞳には敬愛の念が込められているように見受けられた。

山明さんは早速質問をした。

山「ねえ、アシエリート君は私をどう思ってる？」

アシエ「愚問だな、マイプリンセス。君は俺の創造主の一人であり守るべき主人であり全てだ」

闇「随分軽い口調ですな。セバス達と何が違うんでしょうか」

山「すいません。思い当たる節があるのですが…。多分私の友人が書いた『設定』のせいだと思います」

話を聞くとアシエリートは彼女の友人数人で作ったNPCらしく、そのうちの一人がこっちの方が面白いと設定欄に「キルドマスターと山明には忠誠を尽くしており騎士としての誇りも持っているが性格は育った環境のせいか公の場以外では顔に似合わずフランクな英国紳士だ」と書き込んでしまったらしい。

ヘロ「なるほど…。その設定がNPCの性格に影響を及ぼしている可能性は高いですね。もちろん断言はできませんが」

式式「どうでしょうか。一度第6階層に集合しませんか？あそこならスキルや戦闘技術の確認も出来ますし」

武人「しかし、第4階層のゴレムや第8階層のあれは動かして大丈夫か？特にヴィクティムは戦闘になったらあのスキルが」

全員がヴィクティムのスキルを思い出し絶句する。皆表情の変化が読み取れない外見をしているが私と同じひきつった表情をしているだろう。

咄嗟に提案してみた。

闇「盟友諸君。それでは第4と第8の守護者はそのままでは集めてみてはどうだろうか。今はとにかく情報が欲しいし時間を無駄にしている時でもありません」

モモ「名案ですね。よし、アルベド。お前に頼みたいことがある」

アル「何でございましょう。モモンガ様」

モモ「第4第8を除く各階層守護者を第6階層の『円形闘技場Ⅱアンフィテアトルム』に集合するように伝えろ。時間は今から2時間

後だ」

アルベドが畏まりましたという前にへろへろさんからストップがかかった。

へろ「待つて下さい。その前に確認したいことがあるのですが」

闇「へろへろ殿、確認したいことは第6階層に移動してからでも」

へろ「いえっNPC皆の前ではできませんことです」

やま「なーにそれ？」

NPCの事も含め確認したいことが沢山あるから第6階層の闘技場でまとめてやるという流れになっていたはずなのになぜ今ここでの無理なのか。

へろ「お願いします。どうしてもNPCが集まる前にここで確認したい作業があるんです。そしてそれにはアルベドが必要なんです」

へろへろさんの声からは真剣さが伝わっていた。アルベドが必要？そしてここでしかできない作業とは何なのだろうか？皆は話の腰を折られたが興味をそらされたようでへろへろさんに注視していた。

へろ「ここがまだゲームの中なのかそれともゲームが現実になったのかそれが解りませんのでそれを確認するのに一番手っ取り早い方法があります。しかしそれは大勢の前ではできませんことです」

大勢の前ではできないことと言われても私には理解できなかったがモモンガさんは何かピーンときたようで、少し慌てた様子で話し出した。

モモ「そうか。解りましたよへろへろさん。たしかにそれをNPCの前でやったら混乱を生むかもしれません。山明さん。すみませんがアシェリートと玉座の間から出してもらえますか」

山「ちよつちよつと、その前に説明してもらえませんか？」

へろ「すみません山明さん。アルベドは必要なので仕方ありませんが詳しくは後で説明します。今はモモンガさんを信じてくれませんか？」

山「わ、解りました」

真剣な声に押されアシェリートに頼み、玉座の間の門の前で待機してもらった。

やま「さてお二人さん。説明はあるんですよね」

闇「私も気になります。盟主」

へろ「もちろん説明します。ただ、今からすごく変な事を言いますが決してふざけてはおりませんので心して聞いてください」

皆は固唾を飲んでへろへろさんの次の台詞を待った。

へろ「どなたかアルベドの胸を触ってくれませんか？」

その瞬間全員が固まり部屋の空気の気温が一気に下がった気がした。女性陣から非常に冷めた視線がへろへろさんに向けられていた。かくゆう私もリアルでは女なので正直今の発言には嫌悪感を覚えてしまう。仕方無いでしょ、私だってリアルじゃアラサーで恋愛コンプレックスのごく普通の女の子だよ。

式式「…。たしかに事前に説明されてなければふざけると取られますね」

やま「へろへろさん、眠いの、寝かしましょうか？」

やまいこさんの台詞には殺気が込められていた。

モモ「落ち着いてくださいやまいこさん。時間が惜しいので簡単に説明します。要するにアカBANが来るか調べたいだけですよ」

全てのDMMO-RPGに共通していることの一つに18禁行為禁止というものがある。これは通称『6秒ルール』と呼ばれており18禁行為を初めて6秒を超えるとわざとやっているものとみなされ運営から違反者のメールボックスに警告文が送られてくる。それを無視してさらに12秒が経過すると強制ログアウトされ、一ヶ月間ログインできなくなる。さらに悪質なわいせつプレイヤーとしてSNSに投稿され侮蔑の対象とされる。

闇「確かに…。それは確認する必要があるな」

やま「たしかにここがまだゲームの中じゃないという保証は無いけど：そもそもあんな複雑な思考ができるNPCって製作可能なの、プログラマーさん」

へろ「ウーン、どうでしょう？。複合企業の技術開発部門には私以上のプログラマーは沢山いますけど、あんな如何にも自分で考え行動するようなプログラムは私の知る限り現在の高度AI技術でも不可

能だと思えます」

モモ「とにかく今はしらみつぶしに調べるしかないでしょう」

モモンガさんはそう言うのとアルベドを呼んで向き合う。おい盟主。まさか行くのか？

モモ「アルベドよ…、胸を触つてよいきや」

あつ噛んだ。アンデットの精神鎮静スキルでも焦りを完全に消すのは無理か。それよりもアルベドはどんな反応を見せるんだ？。

アル「もちろんですどうぞ」

あつさり言ったな。盟主よ、6秒ルール忘れてないよね。

詳しい描写は省くが端的に言えば8秒揉んで（やまいこさんが測つた）離れたが運営からの連絡は来なかった。まあこれはたぶん全員が予測していたので驚く人はいなかった。

やはりもう皆薄々気づいてるんだ。ここはもうゲームの中じやないって。そしてそれは18禁行為（あくまで運営が定める禁止された行為）が可能なことで確信に変わった。

その後アルベドが「私は此処で初めてを迎えるのですね」と言つてモモンガさんを襲つたが、私を含めたギルドメンバーは丁寧に無視してヘロヘロさんを除くギルメンは予定どうり第6階層の円形闘技場に向かうことになった。

ヘロヘロさん、言い出しつぺはあんたと盟主なんだから暴走したアルベドはあんた達が責任もって止めなよ。

### 第3話 検証と答え 前編

私『闇信刃』は現在第6階層の円形闘技場に来ている。

第9階層の『円卓の間』から転移の指輪を着けて第6階層に行きたいと念じたら（アイテムの設定欄にはそう書いてあった）ひんやりとした雰囲気のある灰色の壁に「魔法の光」のランタンが等間隔で付いている廊下に転移した。そこを近くの出口に向かうとそこは予想どうり第6階層の円形闘技場だった。

どうやら指輪やマジックアイテムは問題なく起動するようだ。

先ず観客席が並ぶ階段を下りて闘技場の中央に向かう。

下りた其処は直径100m位の砂が敷き詰められた丸形のグラウンドだった。その場所は文字道理の円の形をした闘技場で中央のグラウンドを中心に外側に観客席が広がり客席中央部には東京ドームにあるようなVIP席が設けられている。

私は5人の仲間と共に闘技場に立っている。早速実力テストをする前に先程話し合っていたNPCを探す。（いきなり敵対行為を取られたら大ダメージだから）

闇「皆、スキルの確認の前に茶釜さんが作ったNPCと話してみませぬか？」

式式「私も賛成です。私は急襲による近接戦特化型なのでもし他のNPCが味方かどうか確認しなければ安心できません。そうですね武御雷さん」

武人「うむ、式式殿のステータスは把握しているからわかるが例えばシャルティアやマーレなどがいきなり後ろから襲ってきたら、式式殿では瞬殺される可能性がある」

やま「まあアウラとマーレには久しぶりに会いたいしね。僕はいいですよー」

山「私もOKです」

皆さんの意思を確認して呼んでみようかと思ったとき「とあっ」という声がコロシウムに響き、アリーナから一人の人型の何かが飛び降りた。

砂埃を起こしながら舞い降りたその人影はダークエルフだった。年齢は10〜13歳位、身長140cm、体重34kg(推定)。外見は非常に愛らしい子供で中性的な印象を受ける。髪は金髪、目は左右で紫+碧色のオッドアイ。服装は白を基調としたベストとズボン。内側の服は赤で蛇あるいは竜の鱗のようなもので出来た長袖のTシャツ。靴は茶色の革靴。其の全てが『聖遺物級IIレリック・クラス』以上のマジックアイテムだ。

彼女は全速力で走りながら近づき、丁度私の3メートル手前で止まった。しかも土埃が掛からないようにだ。恐ろしい技術力だ。

彼女の名はアウラ・ベラ・フィオーラ。ナザリック地下大墳墓第6階層の守護者の片割れで、レンジャー兼ビーストテイマーだ。制作者の趣味で男装している。

ちなみに製作者はぶくぶく茶釜さん。『アインズ・ウール・ゴウン』のタンク役で、たしかスライム種の一つである『ローパー』という種族だった。防御力とカウンタースキルに特化しており数多くのギルドに『最強の盾』と称されたプレイヤーだ。

かくゆう私もギルドVSギルド戦やワールドエネミー戦で世話になっておりタンク役の性格上前線リーダーになることが多く、何よりも指揮官としての腕が的確なため、モモンガさん不在のおりは彼女が集団戦の指揮官となることはざらにあった。

アウラ「いらっしやいませ、闇信刃様。やまいこ様。式式炎雷様。武人武御雷様。私たちの守護階層へようこそつてあれ？」

私たちに一通り挨拶を済ませると急に表情を硬くしたため私も挨拶の返しが出来なかった。

やま「ん?どうしたのかな、アウラ」

アウラ「…やまいこ様…。そちらのダークエルフは何者です。皆様と仲が良さそうですから侵入者ではなさそうですが…それに何故かやまいこ様と同じ気配がするのですが」

アウラが頭に疑問符を浮かべているような顔が少しおかしかったが、ここで笑うのは間違いだろう。

やま「いいことに気づいたねアウラ、この娘はね、僕の妹なんだ」

山「初めましてだねアウラちゃん。話は聞いているよ。私は山明「さんみょう」。種族が違うからわかりづらいけど君が感じた通り私はやまいこの妹だよ。以前このナザリック地下大墳墓にお邪魔したことがあったんだけど、あの時は別のギルドに所属していたから万が一各階層の情報が漏れることをウルベルトさんに懸念されてね…。9と10階層しか見せて貰えなかったんだ」

アウラに色々と事情を説明した後、もう一人を呼んだ。

やま「ねえアウラ、マーレはどこに行ったの」

アウラ「あーそれがアリーナの上に居まして…。マーレ、至高の御方々がいらつしやってるんだよ。とつとと飛び降りなさいよ」

マーレ「わ、分かったよう…。えいつ」

かわいい声と共に観客席北側のアリーナから人影が降り立った。

その人影はアウラと同じダークエルフだった。しかしアウラとは明らかに容姿が異なっていた。髪は同じ金色だが、長い耳はアウラが斜め上に尖っているのに対し斜め下に垂れていた。瞳はアウラと同じ紫＋碧眼だが左右対称だ。顔立ちも中性的だが、アウラより大人しくオドオドした印象だ。しかしこれは茶釜さんが「姉には逆らえない」「いつも弱気な顔をしているがナザリックに敵対する者には容赦しない」と設定したためであり、実際はカルマ値がマイナスなため強気でナザリックに所属しないものを見下している。服装に目をやると上はアウラと同じ白を基調としたベストと鱗の付いた長袖Tシャツなのだが、内着は青色だ。下は白を基調としたミニスカートと茶色を基調とした脛の半分を覆う長めのブーツだ。

彼の名はマーレ・ベロ・フィオーレ。アウラと同じ第6階層守護者で、基本は森司祭Ⅱドルイドだが様々な魔法に精通しているマジックキャスターだ。しかも範囲攻撃に関してはナザリック随一である。ちなみにれつきとした男だが茶釜さんの趣味で女装している。

彼はミニスカートを直した後、木製の杖（に見える神器級アイテム）女の子走りでこちらへやってきた。茶釜さん、こんな所まで細かく設定したのか…。

マーレ「お、お待たせしました。皆様」

オドオドしている所がとてもかわいい。少しだけBL好きな人の気持ち解ってしまった。

やま「久しぶりマール、あつ先に紹介しておくね。この人は私の妹山明」

マール「あつはい。初めまして。つてでもこの人僕たちと同じダークエルフですよ、し、姉妹なのに何故種族が違うのですか？」

答えずらい問いに戸惑っている山明さん。

私もこの質問に対して明確な答えは持ってない。実際は人間で、ユグドラシルというゲームが無くなりどういうわけかゲームのアドバイザーがそのまま自分の体になった。

何て説明できるはずがない。そう話したところで私が彼らの立場なら理解に苦しむだろうし、ただでさえナザリックには異業種が多い。もちろんアウラとマールは別にしても「アインズ・ウール・ゴウン」の加入条件が『アバターが異業種であること』である為だ。私たちが元人間と判明したら、どう反応するか分からない。下手をすると「人間を排除すべし」と襲ってくることも考えられる。

私がどうやって山明さんを助けるか考えていた所に式式炎雷さんが助け舟を出した。

式式「すまないがその問いに今答えることは出来ない。しかし時期が来れば必ず話す。そしてその時期とはお前たちが事実を受け止められるだけの成長を遂げた時だ。今はそれで納得してはくれぬか。これは私だけではないここに居る全員の頼みだ」

その瞬間全員の頭に「伝言メッセージ」が届いた。

やま「ごめん皆。僕も式式さんの提案に乗ることにした。悪いけど皆話合わせて」

式式炎雷さん流石と私も皆も他に代案が無い為式式遠雷さんの話に乗ることにした。

そして私はようやく本題に入ろうと皆に提案した。

闇「それでは皆、そろそろ本題に入りませぬと時間が勿体ないですよ。此処に来た意味をもう一度思い出して頂きたい」

山「それじゃあまず私からいいですか？私の提案はこうなる前に、



つまりログアウトができる時にここのメンバーでやったようなバトルをしたいです。もちろんいざという時の為にHPが50%以下になったら終了ということ・・・ってあれ？もう終わったの」

山明さんの素っ頓狂な声で、皆はその視線の先を追うと観客席の出口からモモンガさんとヘロヘロさんがこちらに向かっていた。

式式「おおっモモンガさん。ヘロヘロさん。お帰り」

やま「アルベドとの初夜は楽しめた？」

武人「武士としては初夜に3Pなどはどうかと思うがな」

モモ「こんの裏切り者！んなことするわけないでしょ！」

ヘロ「そうですよ。皆さん酷いですよ」

いやいや、あれは明らかにあなたたち二人がアルベドの設定を変えたことが原因でしょ。取れない責任は仕方ないけど自分一人で取る責任は自分で取りましようね。

しばらく言い合いが続き20分後に何度目かの「本題に移ろう」の話になった。

闇「さて、まずはスキルと魔法の確認ですよ。魔法が使えるかどうかは「伝言」が使える時点で解決してますが、攻撃魔法の威力はまだ未検証です」

モモ「私も賛成です。時間が勿体ないですしちやつちやと進めましよう。最初は誰が？」

山「トーゼン私ですよ。『錬金術師の妖精』で『世界災害者IIワールドディザスター』の魔法の威力、早く試してみたいです」

武人「それじゃあまた拙者がお相手いたそう」

こうして戦闘力測定が行われた。

ルールは。？現状蘇生アイテムの性質が変化している可能性を考慮し、HPが30%以下になったらその時点で試合終了とする。？試合はあくまでも闘技場内で行い客席に出ないこと？審判は「生命感知IIライフエッセンス」で常に対戦している二人のHPを把握し、HPが50%以下の状態でHPを25%以上削ると予想されるスキルまたは魔法（超位魔法含む）の使用が認められたら、即座に中断を宣言すること。

以上が決まり二人は闘技場中央で対峙した。

山明さんはいつもの最強装備で武器は先端に六角形に尖った水晶がはまった杖だ。対する武御雷さんはいつもどりの伝説級の鎧と神器級の靴(素早さでタッチ・ミーに対抗するため)。ただ武器はいつも使っている神器級アイテム『武御雷六式or八式』ではなく伝説級アイテムの『武御雷式』にした。理由は上記の武器では威力が強すぎてスキルと併用した場合一気に半分も削ってしまい最悪殺してしまう危険性があったからだ。蘇生アイテムが少なく正常作用するかが不明な段階でそのようなリスクは犯せない。

山「それじゃあ始めましょう」

武人「よろしく頼む」

開始と同時に山明さんが後方へ飛び素早く魔法を発動した。

山「光輝緑の身体Ⅱボディ・オブ・イファルジエントベリル」、(魔法詠唱者の祝福Ⅱブレス・オブ・マジックキャスター)、(無限障壁Ⅱインフィニティウォール)、(自由Ⅱフリーダム)、(上位身体強化Ⅱグレーター・フルポレンシヤル)、(生命力上昇Ⅱライフブースト)」

山明さんが素早く魔法を唱えて戦う準備を確認してから武御雷さんは高速で迫った。恐らく彼女が戦闘準備を終えた後でなければ検証にならないと思っただろう。

武御雷さんは前衛職を多く取得しており更に種族は『蟲王Ⅱヴァーミンロード』だ。素早さはマジックキャスターの山明さんを遥かに上回る。

勢いに任せた一撃をかうじて交わした。

武人「ほう…。以前は当たったんだが、学習しましたな」

山「それだけじゃありませんよ(上位転移Ⅱグレーター・テレポーション)」

一瞬で山明さんが武御雷さんの背後20m位まで移動した。

山「魔法最強化・星幽界の一撃Ⅱマキシマイズマジック・アストラルスマイト)」

山明さんの第8位階魔法が黒と白の電流が走らせて武御雷さんに直撃した。

武人「ぬうう、これが…」

武御雷さんは構えなおしながら少し考えていた。

山「マジツクキヤスター相手に距離を置いていいんですか？「魔法最強化・鮫竜巻Ⅱシャークスサイクロン」

今度は広範囲の第7位階魔法を放つ。二匹の鮫が竜巻を作って武御雷さんに襲い掛かる。

しかし武御雷さんは苦も無くかわしスキルを発動。

武人「スキル発動、阿修羅」

斬撃と魔法防御力強化のスキルを使い再び接近戦を仕掛ける。

最初は下段の横なぎの攻撃で体制をくずし、上段からの一撃、山明さんは思わず「上位転移」でかわす。しかしそれを読んでか直ぐに後方に飛び、周囲を警戒。すると10時の方角、丁度1mの所に山明さんが現れ、とつさに横なぎした。

刃は脇を臓器に達するまで切り裂き血しぶきが舞う。その時私は確かに見た。山明さんが苦悶の表情を浮かべているのを。

これが指し示すことはただ一つ。痛覚があるということ。何よりこれは魔法やスキル。そして戦闘感覚を試すテストだ。事態は急を要する為、演技をして皆をからかっている場合ではないことはここに居る全員が承知していることだ。

そう思った瞬間、「光輝緑の身体」が発動。ダメージを一度だけ無効化する。山明さんから苦悶の表情が消えた。

武人「山明殿、次は手の平で受け止めよ」

武御雷さんが伝説級アイテム『武御雷壺式』を刺突用に構えた。山明さんもそれに応じ、左手を前に出した。刀身がやや広くもあって刃は手を貫き手の平の指の付け根まで割った。

山「魔法最強化・現断Ⅱリアリテイスラッシュ」

第10位階魔法（山明さんの最強魔法）が武御雷さんの腹にもろに命中。例え鎧が伝説級であっても大ダメージは避けられない。

次の瞬間二人は示し合わせたように離れた。

山+武人「モモンガさん、残りHPは」

オイオイ二人ともハモってるよ。たったあれだけの戦闘で、兄弟同

然になったの？などといったジョークを心の中で言いながら審判役のモモンガさんの方に向いた。

モモ「武御雷さんが1500・・・いえ、すみません。後78%で山明さんが84%です」

武人「ふむ、やはり私の減り具合はユグドラシルと同じか」

山「私も同じですが左手の中指、薬指が動きません。やはりユグドラシルとは違う面もありますね。見た目と違ってダメージは少ないですから」

モモ「どうします？続けますか？」

武人十山「無論？」

再び距離を置いて試合は再開された。山明さんは今度は杖から小剣に変え、盗賊の素早さと魔法で対抗した。

武御雷さんは魔法をかわしながら距離を詰め正眼の構えからの上中下段で横なぎに切ったり沖田総司をまねた三段突きを繰り出したりした。

様々な魔法と斬撃を当てたり交わしたりして、山明さんのHPが34%になった時点で終了した。

その後も全員が模擬戦を終え現在の状況の結論が出た。しかしそれは薄々気が付いていたとはいえ衝撃的な内容だった。

1. この世界はユグドラシルIIといったゲームの空間ではない。痛覚や嗅覚が有りログアウトも運営との連絡も出来ない為。

2. 「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーは精神性がリアルの部分と違う感覚になつてゐる。|| 全員異業種の為。

3. NPC達が自分の意思で動いている。理由は不明だが設定に沿った性格や性能を持っている。

4. 魔法やスキルは問題なく発動できる。回数制限もゲームと同じだった。またHP、MP共に時間による回復量は20秒に1ポイントでユグドラシルと同じ。使用するときには声に出さなくても体の奥に意識を向けるだけで発動でき、HPMPの残量も解る。

以上だった。

やま「これは……。予想してたとはいえ……ショックですね」

式式「そうですね。私も精神性はリアルと比べてまだ解りませんが模擬戦で感じた感覚は明らかにリアル……というより人間だった頃に比べて格段に鋭くなっています。これだけでも今の状況がゲームの中ではない、自分たちの身体はアバター道理に成ってしまったわけだと確信できます」

武人「拙者も目が六つ有ったり口が昆虫の様にカチカチいって口の両端にある触角？も己の意思で動かせる。ユグドラシルの時には考えられぬ。」

山「私なんて生まれて初めて耳を自分の意思で動かせました。リアルじゃあり得ない感覚です。視力も聴力も明らかにリアルより鋭く……いえ進化しています。姉さん、眼鏡かけてないけど視力は大丈夫」

やま「大丈夫というより眼鏡をかけていた時より視力良くなってるよ。私もこの体に精神、或いは魂？まあ意識は明らかに人間ではないこの体に移り馴染んでる」

私は自室で一人になったらちよつと鎧を脱いで鏡で自分の身体を確かめようかと考えていた時に時間が来た。

モモ「草原……。解った。間もなく守護者が全員集まる。お前も第6階層の円形闘技場に来て見てきたことを守護者たちにも話せ」

モモンガさんの独り言が「伝言」によるものだとすぐにわかり私は尋ねた。

闇「盟主、セバスからですか」

モモ「ええ、貴重な情報を手に入れてくれました。間もなく守護者たちが揃いますのでそこで話します」

そうこうしている内に闘技場の中心地から恐らく「転移門Ⅱゲート」の魔法で出来た空間の穴のような所から一人の少女が出てきた。年齢は12〜14歳位。髪は銀、目はルビーを思わせる真紅、身長145cm、体重42kg。服装は黒一色のゴスロリファッションで確かボールガウンと呼ばれる球状の丸みを帯びたスカートだった。武器は無く黒い日傘を差していた。

第3階層守護者シャルティア・ブラッドフォールンだ。ペロロンチーノさんが自分の性癖を限界まで詰め込んだ容姿、戦闘力共にナザリック内指折りの実力者だ。

シャルティア（以下シャル）「おや、私が一番でありんすかえ」

そう言つて周りを見渡しモモンガさんを見つけると猛スピードで突っ込んできた。

シャル「ああつ我が君…」

シャルティアは盟主に抱き着いた後、首に腕を回しぶら下がりながら濡れた目で戯言をほざいていた。

チョット盟主。ナンカ嬉しそうに見えるのは気のせいかなー。シャルティアちゃんは私にとつてもお気に入りなんでありなりにイチャイチャしていると怒りが込み上げてくるんですけどー、…と沈静化したな。個人的には盟主…いえモモンガさんはたっちさんの次に恩人なんでドーニモ複雑な気持ちだ。

アウラ「あんたさあ、いい加減にしたら？モモンガ様を始め至高の御方々がいらつしやつてるんだよ」

アウラがシャルティアに突つかかる。

そういえば他にも『至高の存在』が4人もいるのに何故盟主にだけとち狂った少女の様に周囲を見ずに盟主に突撃したんだろ。あつそういうえばペロロンチーノさんがシャルティアは死体愛好家つて設定書いてたつけ。そしてアウラと仲が悪いとも。やはりNPC達の性格、性質は設定が深く関わっているのは間違いないと考えていいだろう。

シャル「おや、ちびすけ。いたでありんすか。」

シャルティアは嘲るような眼でアウラを一瞥し私たちに向かってひれ伏した。

シャル「お久しぶりでございます。至高の御方々。皆様が集まわれるのは実に1年10カ月ぶりでございます。ああつ今日は何と良き日でしょう。ペロロンチーノ様とぶくぶく茶釜様は戻られたのでしょうか」

この質問はすぐく答えにくい。ペロロンチーノさんもぶくぶく茶

釜さんもリアルが忙しく最終日にもログイン出来なかつたんですね。

どう答えるか悩み始めていた時式式炎雷さんが助け舟を出した。式式「詳しいことは話せないが彼らは決して君たちを見捨ててはいない。いつか必ず会える。この言葉を信じてほしい」

流星式式炎雷さん。私もNPC達に創造主の事を聞かれたらそう答えよーっと。

シャル「畏まりんした。少なくともそこのガキ二人よりは物分かりが良いと思っております。式式炎雷様のお言葉、しかと胸に刻んでおきまする」

アウラ「ニセ乳」

シャル「ああつ」

アウラ「凶星ね、だから「転移門」なんて使って来たんだ。急いで走ると盛りすぎた胸パットがどっかつちやうから」

シャル「なつなによ、あんたなんか全くないでしょう」

アウラ「私はまだ50歳だけど、あんたはアンデット。成長しないってつらいよねー」

シャル「オンドリヤー。はいたつば飲むんじゃねーぞー」

アウラ「走ると胸どっつかいっっちゃうよー」

微笑ましいのーと私を含めた何人かがNPC達のやり取りを見つめていると(一応NPC達の性格性質を見極める必要があることも忘れずに)闘技場の南の入り口から硬質的な声が響いてきた。

コキュートス(以下コキュ)「騒ガシイナ。御方々ノ前デハシヤギスギダ」

その声の主はひと言でいえば巨大で異様な色の昆虫だった。全身がライトブルーの外殻で覆われており、顔はアリとカマキリを足したような感じで昆虫特有の青い複眼が6つ並列にはまっております、果物のキウイフルーツを伸ばして棘をつけたような触手が両端についた口からは白い冷気が吐き出されている。胴体部は節足動物特有の関節に鎧をはめ込んだように見える。腕は4本生えておりかぎ爪と小手をはめたような下腕部、関節は節足動物そのもの。そしてその手に

は中世の時代に使われていたハルバードのような武器が握られている。足も昆虫らしいが二足歩行用に進化している。

第5階層守護者コキユートスだ。

製作者は武人武御雷さん。本人曰く性格もコンセプトデザインも武人という設定だ。

モモ「急に呼び出してすまないな、コキユートス」

コキユ「オヨビトアラバ即座ニ…ムウ、ア、アナタサマハ」

表情は読み取れないがその言葉には感動的な物が含まれていると感じ取れた。

武人「久しいなコキユートスよ。息災か」

コキユ「オオオ…ワガ創造主…。必ズゴ帰還下サルト信ジテオリマシタゾ」

感動的なシーンが出来ていた所に無遠慮な声が響く。

デミウルゴス（以下デミ）「皆さん、遅れて申し訳ありませんねえ」その声の主はひと言でいえば悪党顔したエルフの近親種だ。髪は黒のオールバックで解りにくい宝石が埋まっているような眼をしている。口は映画に出てくる妖怪の様にやや裂けているように見える。180cm強の細身の体には赤いスーツを纏っており、靴も革靴だ。そして人間ではない証拠として紫色の10以上の関節が付き末端には棘が6本付いたしっぽが生えており歩くたびにゆらゆら揺れる。

第7階層守護者デミウルゴスだ。

製作者はウルベルト・アレイン・オードルさん。種族は製作者と同じ『最上級悪魔IIアーチデビル』でコンセプトデザインも同じだ。制作者のウルベルトさんは「悪」のロールプレイに拘る人だったのでNPCにもそれを受け継がせているようだ。

神楽「私も遅れて申し訳ございません」

デミウルゴスの後ろから発せられた声の主はひと言でいえば侍の格好をした女性だ。

身長170cm、体重65kg。顔立ちはぱっちりした黒目と整った



鼻、唇はピンク色で太陽が照ると一層見栄えする其の全てが絶妙のバランスで構成されており文句なしの美人だ。髪は日本字らしい黒で風が吹くとさらさらとゆれて手入れが行き届いてるがごとき美しさ。その胸当たりまで伸びた髪をポニーテールでまとめている。ナーベラルが純日本人的な美しさなら彼女は英国紳士とのハーフと言ったほうがしっくりくる。体は武人武御雷さんと同じ日本製の甲冑を着こなしており、具足も同様足袋と草鞋だ。武装は腰に差した日本刀と手に持った槍で槍は古代中国の豪傑が使用していた「方天画劇」という武器らしい。

彼女こそ私こと闇信刃が制作したNPC、神楽である。

種族はナザリック地下大墳墓では珍しく人間。武人武御雷さんと同じで純粋な戦士職にした。LVは90。これは侵入者を油断させるためでもあるが、もう一人の自作NPCにLVを70まで振り分けたいためでもある。

私は精神鎮静化が2回も起こる程自作のNPCが動いていることに感激し今すぐ抱き着いて色々と話し合いたかったがそれを察したのか盟主から「伝言」で「時間がないから我慢してください」と言われ泣く泣く盟主の隣に立った。精神鎮静化が無ければ盟主の命令といえど振り切っていただろう。感激が半減してしまったのは残念だが今だけは感謝だちきしようめ。

それから5分程いくつかやり取りがあり、全階層守護者が揃った。  
(4、8階層は除く)

盟主は南東の客席の近くに立ち盟主を中心に私たちは私、やまいこさん、山明さんが左側に。式式炎雷さん、武人武御雷さん、ヘロヘロさんが右側に。守護者たちはその前に集まった。

先ず挨拶をと言っていたが私はここが正念場と考えている。守護者たちの性格もいくらかは把握したが完全とは言えない。他人の考えていることを完全に理解することは不可能だが対応を誤れば守護者たちを何人が敵に回しかねない。守護者たちはほぼ全員が100レベルだ。中でもシャルティア、マールを敵に回せば私では相性が悪い

為殺される可能性が高い。幸い一人ではないのでその時は潔く仲間に頼ろう。

そう考え始めた時、アルベドが口火を切った。

アル「では皆の者、至高の御方々に忠誠の儀を」

忠誠の儀？アルベドはなにをいつている？。

神楽「第1階層守護者神楽、御身の前に」

シャル「第3階層守護者シャルティア・ブラッドフォールン、御身の前に」

コキユ「第5階層守護者コキユートス、御身ノ前ニ」

アウラ「第6階層守護者アウラ・ベラ・フィオーラ、御身の前に」

マーレ「同じく第6階層守護者マーレ・ペロ・フィオーレ、御身の前に」

デミ「第7階層守護者デミウルゴス、御身の前に」

アル「守護者統括アルベド、御身の前に。第2階層守護者恐怖公、及び第4階層守護者ガルガンチュア、並びに第8階層守護者ビクティムを除き、各階層守護者御身の前に平伏し奉る。ご命令を」

ちなみにこの儀式で私と盟主とへロへロさんが2度精神鎮静化を起こしたのは内緒の話である。

## 第4話 検証と答え 後編

守護者全員の挨拶が終わった後、誰かが「どうなってんだ」と叫びたくなることを察したのか我々が盟主モモンガさんが口火を切った。

モモ「皆よく集まってくれた。感謝する」

打ち合わせ道理盟主は魔王ロールで行くようだ。さて、どうなるか…。

アル「感謝など勿体ない。我ら守護者及びナザリック地下大墳墓にて至高の御方々によって作られた者たちはその命尽きるまで主に尽くすことが望み。例え至高の御方々にとって取るに足らない存在だとしても全身全霊でお支えすることを誓います」

守護者全員「」「誓います」「」

今の心境をひと言でいえば「驚愕」以外にありません。

モモ「素晴らしいぞ、守護者たちよ。お前たちならば我らの意思を正しくくみ取り目的を果たしてくれると強く確信した」

おおつ盟主。いつになく魔王ロール乗ってますねー。確かにこの忠誠心を感じさせるNPCの態度にはその対応は正解かもしれない。

さて、次の一手はどうするおつもりですか？盟主。

モモ「さて、現在我らは原因不明の事態に巻き込まれている。ここに居る者たちで何か原因もしくは変わった兆候など、心当たりのある者はいるか？」

アル「申し訳ございません。私には特に思い当たることは」

モモ「他のものは」

他の守護者たちも首を横に振った。どうやら転移の原因は分からずか…ん、誰か来た？。

式式「モモンガさん。セバスが戻ってきたみたいだよ」

山明さんの声で皆が東の入り口を振り返ると、丁度セバスとナーベラルが入り口から姿を現した。流石式式炎雷さん、私は言われる一秒

前に気づいたけど式式炎雷さんは第6階層に来た時点で気づいたと思う。流石【アインズ・ウール・ゴウン】の特攻偵察隊長。外に行く時はこの人の力が必要だな。

それから私たちはセバスの話を黙って聞いていたが、内容はシンプルだがおどろくべきものだった。

モモ「森と山？」

セバス「はい、少なくとも私とナーベラルが調べた結果ナザリック地下大墳墓が置かれている場所、といつてよいのでしょうか。此処より半径1km圏内は以前ナザリック地下大墳墓が存在した毒の沼地とは全く異なり、緑にあふれた森と山脈に囲まれておりました」

ヘロ「遭遇した生命体や人工建築物などは」

セバス「いえ、ナザリック地下大墳墓の周囲50m程度はまるで予め刈り取られていたように小さな草が生えているだけです。それから先の森には小さな動物がいただけ。後は数匹の狼に襲われましたが苦も無く撃退できました」

式式「狼？それは知能のあるモンスターでしたか？」

セバス「いいえ、話しかけたらいきなり襲われたので仕方なく」

式式「他に何か気になることは」

セバス「はい、ナザリック地下大墳墓から900m程離れたところにゴブリンの足跡がありました」

闇「ゴブリン！それはユグドラシルと同じモンスターか？」

私は思わず聞き返してしまった。判断を誤るかもしれないから質問は最後まで聞いてからにしようと思っていたのに…。

セバス「はい、ゴブリンの外観は私の創造主たち・ミー様からうかがっておりますので間違いないかと」

闇「盟主：どうやら外もとんでもないことになっているようですね」

モモ「ええ闇信刃さん。後で其処も全員で話し合いますよ」

6人全員がモモンガさんの言葉に静かに頷いた。

さて、後は守護者たちが集まっているこの時点で、早急にやってお

かなきやならないことってあるかな。外に出るのは後で話し合っ  
て決めるとして：待てよ。考えたくないがもし外にイベント限定で開  
く洞窟に出てくるような80LVのモンスターが外にいてそいつら  
がこの墳墓を見つけたら…。

闇「盟主、早急にやつておくことがありますか？私は何らかの形  
でナザリック地下大墳墓を隠す必要があると思うのですが」

式式「私も賛成です。索敵も私の仕事だからわかるのですが外のモ  
ンスターがこの地下墳墓を見つけてら絶対入りますよ。私だって旅  
をしていてこんな建物見たら中を調べたいって思いますよ」

武人「拙者も同感だ」

というよりここにいる全員がそうするだろう。何しろ未知への冒  
険はユグドラシルというゲームの最大の魅力で皆それに憑りつかれ  
ていたんだ。

モモ「同感です。マーレ、幻術などの魔法でナザリック地下大墳墓  
を隠ぺいすることは可能か？」

マーレ「ま、魔法という手段では難しいです。ただ、壁に土をかけ  
てそれに植物をはやした場合とか：なら可能かと。幻術と違って触  
れても解りませんから」

その時モモンガさんの近くで殺気が漏れ出ているのを感知した。

アル「栄光あるナザリックの壁を土で汚すと…」

オイオイ落ち着けアルベド。

モモ「アルベドよ、少し黙れ。私はマーレと話しているのだ」

アル「はっ申し訳ございません。モモンガ様」

いきなりバトル始まらないで良かったー。アルベドもマーレも可  
愛いんだから。そんな娘の闘う姿なんて見たくないよ

モモ「壁に土をかけて隠すことは可能か？」

マーレ「はっはい、お許しいただけるのしたら」

式式「モモンガさん、それだと大地の盛り上がりが不自然なのは  
？。私自身見て来た訳ではありませんが外は森と山なんでしょう？。  
実際ののように隠すか等は直接外を見ないと意見がまとまらないと  
思います」

山「あの、でしたら周辺の土も盛り上げダミーを作れば。うちのギルドも森の探索の時そのやり方で仮の拠点を守りましたから」

説得力のある発言がありその後隠せない上空部分は後に幻術を展開しようという話でけりが付いた。

モモ「となると次に重要なのは情報の共有だな。守護者統括アルベド、並びに防衛戦の責任者デミウルゴス」

アルナデミ「はっ」

モモ「両社の責任の下、緊急時やトラブル発生時に使う情報共有システムを作り警護を厚くせよ」

守護者全員「はっ」

おおつ流石盟主。私も恐らく皆もそこには気づきませんでした。やはり実務と調整を主任務としていた人は違うな。

モモ「最後に質問したい。お前たちにとって私達7人はどのような人物：もとい存在だ？」

ありがとうございます盟主。正直私はそれ聞いてもいいかかなり不安でした。精神魔法無効スキルのおかげで精神的には大丈夫だが不安は拭えない。

神楽「ギルドマスターモモンガ様は英知に溢れ、至高の存在をまとめ上げてこられた偉大なる御方です。やまいこ様は先頭に立って戦いながら回復役としても活躍され「アインズ・ウール・ゴウン」の屋台骨を支えられました。式式炎雷様はナザリック内において「最強の一撃」と称された程の武を有するお方で常に先頭に立ち偵察任務と数々の敵将を打ち取り「アインズ・ウール・ゴウン」の名声を世界に轟かせました。武人武御雷様はワールドチャンピオンたち・みー様と互角の腕を持ち前線にてその武力と手腕を発揮し「アインズ・ウール・ゴウン」の剣となり盾となり武威を示す存在と相成られた伝説級の存在です。そして闇信刃様はギルドマスターを始め皆様の影となりその多様なスキルで「アインズ・ウール・ゴウン」の存在を影から支え続けた慈悲深く深い配慮に優れ「アインズ・ウール・ゴウン」も闇信刃様がいなければ崩壊していたかもしれぬと言われるほど至高の御方々を支え続けた偉大なる御方です。そして何より私が最も誇

り愛するわが創造主様であります。」

その台詞を聞き終わった後、私は精神安定化のスキルが有ったことに心から感謝した。そうでなければむせび泣きドン引きし過ぎてもその威厳を維持できなかったろう。ああっ私の神楽、お母さんは今日ほどお前を産んでよかったと感じたことはない。後でいっぱい話そうねー。正直ドン引きしてどう話していいか悩んでるけど。

その後シャルティアは「美の結晶」コキュートスは「絶対なる力と支配者と呼ぶに相応しい指導者」アウラ、マールは「慈悲深く深い配慮に優れたお方」デミウルゴスは「端倪すべからざる」という言葉が相応しい「アルベドは「ここに居るお方全てが私のいとしいお方です」という意見が出て終わった。

ぶつちやけどう答えたらいいか解りません。

私は盟主のローブの裾を引っ張り小声で話した。

闇「盟主、我は精神鎮静化が激しくて気分が悪いのですが…」

へ口「私も同様ですよ。でも今はなさなければならぬ案件がまだありますから…。それに山明さんの紹介も今しておかないと。せつかく守護者全員集まってるんですから」

やま「全員じゃないけど僕からも頼みます。さっきの私たちの評価で連中妹の事言っただけでしよう。妹の事しつかり説明しておかないと後で敵か味方かという話になってしまいますよ」

モモ「そうですね。コホン、最後に皆に話しておくことがある。実は今客人が来ていてな。紹介しておこう。やまいこさんの妹山明（さんみよう）さんだ」

紹介されて銀髪碧眼のダークエルフがまえに前が出る。動きが何故かぎこちない。無理もないな。私だって別のギルドでこんな異常事態で紹介されたらそうなる。山明さんのようにまだ二十歳そこそこなら尚のことだ。

山「えーと、初めまして皆さん、私は山明と申します。種族はダー

クエルフですがそちらに居る半魔巨人（ネフィリム）やまいこの妹に当たる者です。私は「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーではありませんが諸事情により姉が所属するギルドにお世話になっております。詳しい事情は事態が落ち着いてから再度話し合う場を設けますのでどうかしばらくの間受け入れてもらえるようお願い申し上げます。」

なかなかの演説だったな。少なくとも失言したようには見えなかった。さて、NPC達はどう反応するか…。まあ大方の予想は付くけど。

アル「質問よろしいでしょうか？」

山「ああ、どうぞ」

アル「失礼ながらあなたには聞いてません。私はモモンガ様に尋ねたのです」

山「・・・それは…失礼しました」

アルベドの質問には敵意が感じられた。やはり他のギルドから来た山明さんは味方とは思ってないようだ。

モモ「質問は許す。しかしアルベドよ、彼女は一応やまいこさんの妹だ。余り敵意を向けられると我々としては困るのだが」

アル「申し訳ございませんモモンガ様、しかし「アインズ・ウール・ゴウン」に所属しているわけではない以上、守護者統括としてはどうしても確認しなければならぬことがいくつがございます。どうかお許しください」

やま「ありがとうございますモモンガさん。いいよアルベド何でも聞いて」

アル「ありがとうございます。何故【黄昏の妖精】のメンバーである山明様がここに居るのですか」

やはりきたか、山明さんが失言したら私たちがフォローしないと。一応【黄昏の妖精】とは同盟組んでるし、NPC達を敵に回すとかなりやばいし。

山「理由はいくつかあります。一つは姉とモモンガさんから最終…ああ失礼。たまには一緒に集まらないかという話が合って、私ももう一度ナザリック地下大墳墓を見たくてきたんです。そこでこの異常



事態に巻き込まれて今に至るわけです。二つ目は自分のギルドメンバーと連絡が取れない状況だからです。」

アル「解りました。次にモモンガ様に質問があります」

モモ「許す」

アル「ありがとうございます。人間種である彼女は信用できると判断してよろしいのでしょうか」

やま「そこは私が保証するよ。崇めろとは言わないけど客人である以上丁寧に接してくれると有難いんだけど」

アル「畏まりました。至高の御方々に信用に足る人物と言われた以上異議はございません」

山「あ、ありがとうございます」

モモ「他の皆も聞いてくれ。山明さんは今後客人待遇としてナザリック地下大墳墓に住むことになった。もしトラブルがあれば私たちに報告してくれ」

守護者全員「はっ」

ふう、どうやら丸く収まったな。念のため彼女は一人にしないほうがいいかもしれないけど話は粗方終わったかな。

モモ「さて、これから私はギルドメンバー全員で密議を開く。皆は情報共有システムの構築とナザリックの隠ぺいの件よろしく頼む」

守護者全員「はっ」

こうして私たちは第9階層の『円卓の間』に転移した。そこでの会話は混迷を極めた。

モモ「つ、疲れた。何あれ、あいつらマジだよ」

武人「取り敢えず落ち着きましょう。拙者も少し時間が欲しい」  
そんなこんなで5分たち皆は円卓の席に座り会議となった。

やま「正直あれ程とは思わなかった。何あの忠誠心、死ねって言ったらほんとに自害するタイプだよあいつら全員」

闇「皆々様、我から一ついいですかな」

やま「ああごめん、どうぞ闇信刃さん」

闇「我としては余りNPCを怒らせぬように接したほうが得策と思います。ですが、どう思いますか？」

へロ「私も賛成です。あのNPC達の忠誠心の高さは腹に一物抱えた人間よりも危険です。やまいこさんの言うとうり死ぬといたら死ぬでしょうし、忠誠心を削ぐようなことをすれば、逆にナザリック内の全NPCを敵に回すことになりかねません。そうなったら私たちはどうなると思いますか？」

式式「私などシヤルティアやコキュートスの攻撃なら3発で終わりです。いくら私がナザリック一の素早さを持つていたとしても守護者全員を相手にした場合、全ての攻撃をかわしながら闘うのは金剛盾等のスキルをフルに使っても不可能です」

円卓の間を数秒静寂が支配する。

モモ「チョツトいいですか？、その点は此処で言い合っても解決しないと思います。先ずは何人かのNPC達と語り合って性格などをきちんと把握することから始めませんか？」

闇「我は盟主を支持する」

私は唐突に返事をしてしまった。だって私早く自分のNPC達とおしゃべりしたい。

やま「私も概ね賛成かな。明美は正確には「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーじゃないからきちんと言い聞かせておかないと後々面倒だよ」

へロ「では一度散会してNPC達と話し合ってみませんか」

モモ「賛成です。反対の方は？」

全員がおし黙った。反対はいないようだ。

山「すいません。気が抜けたら急に眠気が……」

やま「実は私も……。モモンガさん、散会したら私は妹と自室へ行きます。妹をベットに置いたら私は執務室のソファで休ませてもらいます」

武人「そういえば今午前3時過ぎだな。拙者は大丈夫だがやはり人間種は睡眠が必要なようだな」

やま「私は異業種だけどやはり種族によって体調管理が違ってくる

のね」

モモ「それじゃあ休息が必要な人がいるので散会したら明日の6時ごろここに集合ということだ」

全員 「」「」「異議なし」「」「」

こうして私たちは一度ナザリック各所を見て回るようになった。私の神楽とティファニアはどうしてるかな。そしてどう変わったのか楽しみだな。

危険性よりも楽しみが勝り私はまず第1階層に転移した。

## 第5話 NPC達と平和な日常

闇「久しいな、とは言えんか。少し話したいがよいか？わが眷属神楽よ」

神楽「こ、これは主よ。いかがなされました」

私こと闇信刃は現在第1階層表層神殿に居る。

明日の朝6時まで自由にして良しと言われたので愛しのNPC達に会いに来ました。自分が作ったNPCがどんな変化を遂げたのか沢山話して確かめたかったので。あ、でも100%遊びというわけはないよ。性格は設定道理なのか等を確認しておかないと今後どう付き合っていったらいいのか分からなくなるからね。

闇「さて、いくつか質問したいが今大丈夫か？」

神楽「はっわが主よ。何なりと」

闇「貴君は先程私たちを評した意見。誰からの情報でそう考えたのか」

神楽「はっ私は創造されてから幾人かの至高の御方々にお声がけ頂き至高の御方々が内外でどのような評価を受けているのかを聞いておりました。至高の御方々の様々な意見からそう推察したのですが…もしや間違っていたのですか？」

闇「・・・貴君はユグドラシルに居た頃からの我らの会話の全てを記憶しているのか？」

神楽「当然にございます。創造主たる闇信刃様は無論のこと、至高の御方々の会話は一言一句余すことなく記憶しております。それが眷属として当然の責務かと…主よ、何やら薄緑色のオーラが出ておりますがどうされましたか？」

正直二の句が継げなかった。NPC達はユグドラシルというゲームで生み出されてからの記憶をすっかり持つてる。そして自分の事を「わが主」というのも「武人としての矜持はあるが女ゆえ一人称は私という」ことも間違いなく私がつけた設定だ。

どうやらNPC達の性格も完全には言えないまでも『設定』通りと判断して良さそうだ。設定に「自身が人間故カナザリックでは珍し

く人間種に対する差別意識はないが至高の41人に仇なす者には容赦しない」と書いておいて良かった。人間の街に潜入させるとき役に立ちそうだ。

数分後、私は第8階層『桜花聖域』に転移した。そこにはもう一人の自作NPCティファニアがいる。第8階層は荒野なのだが、岩壁に隔てられた直径700m程のそこは一本の巨大な木に常に桜が満開の別世界だ。

その聖域の木の下に正方形の赤じゅうたんが敷かれておりその上に江戸時代の茶屋のような建物があり中心に置かれた台座に直径50cm程の巨大な水晶が置かれていた。そのそばの椅子に二人の女性が座っていた。

一人は腰辺りまで伸ばした黒髪と切れ長の目とやや太くて丸みのある眉毛、そして巫女装束が特徴の実に日本的な美人で、もう一人が胸と腹の間辺りまで伸ばした綺麗な金髪と碧眼と尖った耳、そしてキャミソールワンピースが特徴のアメリカ風美人のエルフ。

第8階層桜花聖域守護者、オーレオール・オメガとティファニア・ワイズマンだ。

二人は私を見ると立ち上がり小走りで近づいてくると跪いた。

ティファニア（以下テファ）＋オーレオール・オメガ（以下オメガ）  
「ようこそおいで下さいました闇信刃様。桜花聖域までようこそ」

見事にハモった。そういうえば神楽も含めて仲良し3人組だって設定したっけ…。

その後30分程ガールズトークに花を咲かせたが3人がかすきながら「私たちを気遣い絶対者たる振る舞いをしてくれて恐悦です」と言われた為、結局私もいつも道理し「支配者の補佐」としての態度で接するしかなかった。私の話し方は一生このままかもしれない。最もリアルに未練は無いから別に良いのだが…。

初めまして。私は山瀬明美と言います。現在第9階層の姉の自室で寝てました。

少しずつ意識が覚醒して現在の状況を思い出した。私は姉が所属するギルドの本拠地、ナザリック地下大墳墓に招かれ、ここでユグドラシルというゲームの最後の思い出を作るはずだった。

本当に楽しかった。私は友人からの誘いもあって【黄昏の妖精】と言うギルドに所属していた。理由はもちろんエルフと言う種族が好きで、高校時代からの良いクラスメイトが二人所属していたからだ。

アバター名は『山明』。姉が山瀬舞子で「やまいこ」だから私は山瀬の山と明美の明で山明。種族はダークエルフを選択した。某漫画に出てくる主人公の相棒をモデルにした。銀髪にスカイブルーの眼、髪はポニーテールでまとめており、町を歩けば100人中99人が振り返る程の美人、年齢は17〜20歳位、身長170cm、体重62kg、スリーサイズは95（G）・59・90の自分でゆうのも恥ずかしいがナイスバディな美女だ。

私は当初魔法職だけを取ってた。LV60位の時、本拠地が別のギルドに襲われ壊滅的な打撃を受けた（かくゆう私も殺された）。

その後2人いた生産職の一人が辞めてしまったため生産職のエルフ又は天使或いは悪魔のスカウトが求められた。

私は2人の友人と特に仲の良かった3人に話し合った結果私が生産職を担うことになった。

理由は2つあり1つは魔法職を多くとっておりLVに40も空きがある私は都合が良かった。魔法職を多くとっていれば後は錬金術師等の職業を取得すれば一人でもマジックアイテムを生産できるからだ。二つ目は私は戦闘に立つより縁の下の力持ちの方が性に合っていると感じたからだ。

戦闘では他の戦闘職専門のLV100プレイヤーには及ばなく

なってしまうけどギルド戦には参加しなくていいし（本拠地防衛と生産が主な役割となったため）、皆が気を使って新しい土地やダンジョンに行く時は連れて行ってくれた（LV80以上の敵が出る所は足手まといになるから連れて行ってもらえなかったけど）。

何より大きかったことは2つgetできた世界級アイテムの内の一つ『神核』を使うことを許してくれたことだった。最も24人居たメンバーの半数が引退した2年前からだ、ギルド戦に加われる力に身に着けたが雑魚かイベント戦闘でしか使う機会がなかったのが残念だったけど。

そんなこんなで最終日に姉とモモンガさんのご厚意でナザリック地下大墳墓で最後を迎えることになったが、ゲームが終わるどころかゲームのアバターのままだとか不明の土地に転移してしまった。

というのが現在の状況だ。

「コンコン」ドアノックの音がして尋ねた。

やま「明美、起きてる？」

山「姉さん、空いてるよ」

ドアが開き姉が入ってきた。十字架が付いた黄色いシルクハットに似た頭巾。中心をボタンで留めたコート。足には黒革のハイブーツ。姉のアバターは『半魔巨人IIネフィリム』だ。岩肌でゴーレムに近い体でそのずんぐりとした体形はコートと帽子で姿を隠していると太った中年男性に見える。姉の外見で一番目立つのは両手にはめられた巨大なナツクル（モンク専用装備）『女教師怒りの鉄拳』だ。姉の取得職業はモンク系と神官系が半々で普段は前衛で敵を蹴散らしながら他の仲間が傷つくと回復要因に回る。それでついたあだ名が「脳筋ヒーラー」だ。

私と【アインズ・ウール・ゴウン】の出会いとは7年前【黄昏の妖精】が一度壊滅した後そのギルドを【アインズ・ウール・ゴウン】が壊滅させてそのお礼をさせてほしいといったのがきっかけだった。

しかし【黄昏の妖精】の加入条件が《○○高校、又は××高校の生徒、又はOBでアバターがエルフ、ドワーフ、天使系、悪魔系であること》となっており「商取引ならともかく人間種がいるギルドと共闘は出来

ない」との意見が出て、私が作ったマジックアイテムの取引のみをしていた。

今のような関係になったのは5年前の『大侵攻』の時だった。

あの時私たちにも誘いがあったのだが私たちは敵討ちの恩があったため参加せず、逆に「アインズ・ウール・ゴウン」に『大侵攻』の情報と参加したギルドの名前をリークした。モモンガさんは其れを元に対抗策を練り1500人からなる軍勢をかりうじて撃退した。

その時の縁と姉さんの縁で私はナザリック地下大墳墓に招待してもらった。初めて見た時は拘りぬいた内装に驚嘆した。その時の感動は今でも覚えている。

やま「ゆっくり寝れた？」

山「うん。ごめんなさい。もう大丈夫。心なしか体がリアルよりずっと軽いし、健康になった気分」

やま「それじゃあどうする？私はこれからユリに会ってくるけど」

山「私も行く。先ずNPC達の性格を把握することが大事なのは私も賛成だから」

やま「なら丁度いいね。外でアシエリート君が待ってるよ」

山「え〃、何で？」

やま「本人曰く〃騎士とは常に主の傍らにいる者〃だって」

山「軽いノリの英国紳士か…。我ながら設定を誤ったわね」

私はそう言って姉さんの自室を後にした。

アシエリート(以下アシエ)「おおっ我が君、心配しておりましたぞ。やまいこ様から疲れただけと伺いましたのでこちらでお待ちしておりました。御傍に居たかったです。男子の私が女性が寝ている部屋に入るわけにはいきませんので」

私はこの言葉でホツとした。目が覚めたらこんなイケメンが顔を除いていたら心臓に悪い。一応中学高校と共学だったので男子ともよく話したが基本的には苦手だ。

山「し、心配させてごめんなさい。本当に大丈夫よ。色んな事が起こりすぎて疲れただけ」



アシエ「それは何よりです。それでこの後のご予定は？」

山「取り敢えず、プレアデスに会いに行くことかな」

アシエ「おおっあの美女の戦闘集団ですな。私もトーゼンと一緒にしても？」

山「一応私の護衛なんだから許すけど、変な気を起こさないでね。まあ寝ている私の部屋に入らなかつたくらいだから英国紳士という設定は生きてるとみなしているから問題ないと思うけど……」

そう言っつて私は姉と共にプレアデスが待機する第9階層の入り口へ急いだ。

私は困惑していた。

現在私と姉は姉が制作したNPCユリ・アルファの所へ来ていた。ところが話しかけたら急に泣き出したのだ。

ユリ「おっ……オガエリナザイマセ……やまいこ様」

やま「ただいまユリ。半年以上これなくてごめんなさい。これからはなるべくナザリック地下大墳墓にいるよ」

涙と鼻水を出しながら感動に打ち震えてる『首なし騎士IIデユラハン』に姉はわが子の様に優しく語りかける。

今はとても自己紹介できる雰囲気じゃないと私はユリが泣き止むまで10分間程待った。

山「えーと、ユリさん？私の事は覚えてますか？」

ユリ「はい、山明様。5年前一度お会いしております」

山「これからもよろしくお願いします」

ユリ「山明様。私の事はユリと及び下さい。それと他の使用人たちにはじめをつけるためにも敬語はお控えください」

山「わかつたわユリ、改めてよろしく」

ユリ「はい、わが創造主たるやまいこ様の妹君であらせられる以上精一杯お世話させていただきます」

その後の話で分かったことは以下の4つ

☒NPC達の性格は設定と創造主の性格に反映されている。

☒戦闘において取得した職業が装備可能な物しか装備できない。

例えばユリはモンク系統が主体で戦士系統は騎士しか取得していない為斧、弓、銃器、両手剣は装備できない。防具も同様。

☒基本的に「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバー全てに忠誠心を持つてゐるが優先順位は創造主＜ギルドマスター＞その他39名の順番。

☒アシェリート君の場合、忠誠は私＜【黄昏の妖精】のメンバー＞やまいこの順番。別のギルドのプレイヤーは基本的とみなしているが姉のやまいこは何故か私の肉親だと理解できるらしく一定の忠誠心は持っている。

私の近くでは式式炎雷さんもナーベラルの対応に苦慮していた。ただどこか嬉しそうに見える。たしかナーベラルの外見は死んだ幼馴染がモデルと言っていたような。後、こんな女性に叱ってほしいと誤解を招くようなことも言ってたっけ。

式式「久しいな、わが娘ナーベラル。息災か？」

ナー「はい、本当に良くお帰り下さいました。私は式式炎雷様のご帰還を二年待ち続けておりました」

その後の話は忠誠心とお世辞がMAXで、逆に引けた。

## 異世界初の接触くドワーフの工匠編 第6話 外の景色

モモ「まあこのように、普通の剣は装備できませんが、「創造IIクリエイト・アイテム」で作った物は装備できるようです」

モモンガさんは昨日の1日で判明したことを皆の前で実演して見せた。

私こと闇信刃は現在ナザリック地下大墳墓第9階層円卓の間に居ます。そこで皆が昨日一日調べたことを話し合っていた。

そこでいろいろなことが判明した。NPC達の性格、できることとできないこと等。マールによるナザリック地下大墳墓の隠ぺい工作が上手くいったこと、宝物殿の宝が無事だったこと、中でもNPC達がナザリック地下大墳墓の外に出るのが可能であることが発見できたのは僥倖だった。

1時間の話し合いの後、いよいよ最大の課題と向き合うことになる。

モモ「それじゃあ今日最大の課題です。外の調査はだれがいくか決めましょう」

武人「ムウ、確かに早急に決めねばならぬ課題ですな。リスクは承知ですがこのままナザリックに引きこもっていたらこの世界の者たちに後れを取る危険が高い」

式式「この世界の生物がナザリック地下大墳墓を攻略できない保証も、我々より弱い保証もありませんしね」

闇「このままナザリックに閉じこもっていたらいずれ宝物殿の金貨が尽きた時身動きが取れなくなります。トラップ装置を発動させているだけでも1階層につき1日金貨30枚。NPC達とナザリックの維持費は『永劫の蛇の指輪』で無料になりましたが、この世界の敵対勢力に攻め続けられればトラップ装置の修繕やNPC達の蘇生等でいつか枯渇します。その時我々がこの世界に無知だったら身動き取れません」

やま「100LVNPCの蘇生は1体金貨1億枚だからねー。さらに神器級の装備品全てが敵に取られれば其の全て再生させるのに3億以上はかかったよ。以前の大侵攻の時に」

山「姉さん、ナザリックにはどれだけ貯めてるんですか」

やま「確か私が半年間休む前は5000億枚位あったかな。モモンガさん、今はどうなの？」

モモ「転移する一週間前に確認した時は5000億と1000万枚位でした」

式式「私が最終日買い物に5000万枚使いましたから4999億チョットです」

へロ「何もなければ1000年以上持ちますが、侵入者がひっきりなしにくればどれだけ持つか解りませんな」

結局意見は平行線をたどり、外出メンバーの選出に移った。

先ずは地形の大まかな把握だけなので、モモンガさんと武人武御雷さんがデミウルゴスかアルベドを連れて、本格的な調査は再度メンバーを選定するとした。

ところが少々諍いがあった。第9階層にアルベドとデミウルゴスを連れて相談した。二人はナザリックNPC達の中でも特に知能が高いことが昨日発覚したためだ。

モモ「アルベドにデミウルゴスよ、取り敢えず私と武御雷さん外の空を調査することとなった。お前かデミウルゴスを連れていきたいと思うが何か意見はないか？」

アル+デミ「大至急近衛軍を編成しますので少々お待ちください」

武人「待て、それでは外に例えば大型生物がいた場合すぐに発見され戦闘になってしまう。これは極秘の調査だ。少人数でやらねばならぬ」

デミ「ですので万が一戦闘が発生した場合速やかに殲滅するためです」

モモ「繰り返すがこれは極秘の調査である。完全不可視化のマジックアイテムで姿を消すにも50人100人ともなればスクロールの在庫がすぐ無くなってしまう。一人もつれていけないとは言っていない」

ない。理解してほしい」

アル「…畏まりました。しかし外出がお二人ならせめて私とデミウ  
ルゴスをお連れ下さい。それならいざという時私たちが盾となりお  
二人を奇襲から守ることも出来ましょう」

武人「確かに…。どうかモモンガ殿」

モモ「解った。お前たち二人が同行することを許可する」

アル+デミ「ありがとうございます」

どうやらNPC達は主人が危険にさらされると冷静さを失うらしい。また一つ収穫だなと思いつつモモンガと武人武御雷は第1階層  
神殿の入り口まで来た。

モモ「〔複数対象〓マスマジック、完全不可視化〓パーフェクト・ア  
ンノウアブル〕〔飛行〓フライ〕」

モモンガは不可視化と空を飛ぶ魔法を4人全員にかけそのままナ  
ザリック地下大墳墓の上空2000M位まで上昇し景色を見上げた。

雲を突き上げた先は現実以上に美しく太陽が輝く青空だった。太  
陽が東側だったのは現時刻が7時頃だったからだろう。

モモ「美しい…。雲の上はこんなにも澄んでいるのだな」

武人「このような景色…。リアルでは先ずお目に掛かれませんか」  
西暦2138年の日本では核ミサイルによる環境汚染の影響で空  
は日中でも灰色のスモッグが漂い、スモッグの隙間からしか日差しが  
差し込まず星も見えない。ブループラネットさんは面倒な手続きを  
してあちこちに爆心地がある危険な山を登り、頂上付近で星空を見た  
時は涙が止まらなかったというが、今はその気持ちが良く分かる。

モモ「この青空、ブループラネットさんに見せてあげたかったな  
…。」

武人「うむ、むつモモンガ殿今の発言はまずい」

武御雷はモモンガに近づいて小声で話しかける

武人「〔伝言〓メッセージ〕を発動してくれ」

モモ「何故です」

武人「頼む！何も言わずに」

そう言われてモモンガは「伝言」を使用した。

武人「モモンガ殿、NPC達の前でギルドメンバーの消息については絶対に話さないで下さい」

モモ「何故です？」

武人「解らぬのか、もしブループラネットさんや死獣天朱雀さんがすでに死んでいることがNPC達ばれたらどうなるとお思いか。殺したやつを探し出せとかご遺体を探し出して復活させましょうとか言い出しかねませぬ」

モモ「…あー、確かに」

武人「以上です」

モモ「あつでもたつちさんや他のメンバーもこつちに世界に来ている可能性だつて…」

武人「こんな異常事態が起きている以上断言はできませんが…：それなら我々と共に転移しているはず。望み薄と考えるべきですな」

モモ「でも私は逆に希望を持ち続けたい。何よりもリアルに未練はありませんしね」

武人「私も例え帰る手段があつたとしてもこの世界を知り尽くしてからでなくては嫌ですね。リアルの生活は決して苦しいものではありませんでしたが先は見えてますし（笑）」

モモ「決まりですね。もう少し調査したら皆で相談しましょう」

モモンガは「伝言」を切った。と同時に少し不審に思ったのかアルベドが心配そうに尋ねてきた。

アル「いきなり「伝言」を使つての相談とはどうされたのですか？何か問題がございましたら…」

武人「ああ気にするなアルベド。さつきも言ったとおりこれは極秘の調査だ。帰ったら皆に全て伝えるから余計な詮索は控えてほしいのだが」

デミ「アルベド、至高の御方々はおそらく我々ではまだ理解できない内容の話をされているのだ。それに周囲の警戒が必要な状況では落ち着いて話せない。故に「伝言」で必要最低限の相談をし後で我々にも解るように話されるつもりでしょう。」

アル「これは気が利かず申し訳ございません」

こちらに都合よい解釈をして貰い二人は安堵しながら雲の下に移動した。最もそのおかげで不用意な発言をってしまったのだが。

モモ「しかし素晴らしい景色だ。雲の上は青空と太陽が美しく、雲の下を覆う森と山もまた美しい。正に自然の造形美だ。宝箱に入れて持ち帰りたい位な」

武人「ふむう、帰還したら是非とも皆と見たいものだな」

モモ「もしもこの宝箱が我々の手に入ればこれ以上の幸せはないだろうな」

デミ「お望みとあらばナザリック全軍を持って手に入れてまいります」

モモ「フフフ、この世界にどのような勢力がいるのか不明な段階でか」

武人「デミウルゴスよ、物事には段階というものがある。我々は現在この世界の事を何も知らない。その状況で軍を動かせば多くの勢力を敵に回しナザリック地下大墳墓の存続にかかわる。不用意な行動は慎んでもらいたい」

デミ「も、申し訳ございません」

モモ「だがそうだな…。世界征服なんか面白いかもしれないな」

武人「我々は魔王ロールギルドとして名を馳せたからな。それがもし可能であればさぞ痛快であろう」

二人はそこで話を区切りナザリックに帰還することにした。美しい自然に感動して早く皆に伝えたいという焦りか後ろをついてくる二人が怪しく目を光らせているのに気付かなかった。

途中で武御雷からストツプがかかった。

モモ「どうしたんですか」

武人「血の匂いがする…。あの辺りから、それに…誰かが闘っている?」

蟲王の能力なのか武人武御雷は山と森の境目辺りを指さした。モモンガは山と森の全面的な調査はナザリック地下大墳墓に帰還して皆と相談してからにしようと思ったのだがこの世界の生物の戦闘が

見られるのは貴重な体験だ。幸いなことにアンデットになっても視力はゲーム時に使っていたインターフェイス機能で矯正された1.5の視力がある(相変わらず理由は不明だが)。自分たちにかけた「完全不可視化」が作動していることを確認してから地上に降りた。

地上に降りてようやくモモンガも血の匂いを確認した。匂いの方向を見てみると小柄な中年男がゴブリン×3とゴーストウルフ×1の集団と山の麓にある大岩を背にして闘っていた。少し右側に離れたところにゴブリンとゴーストウルフの死体が2匹ずつある。

モモ「人型の方は人間というよりドワーフですかね? 対戦してるのはゴブリンとゴーストウルフですかね」

武人「ふむ、拙者も同意見だ。ユグドラシルでは初期に闘うモンスターであるな。しかしこれは何とも…」

武人武御雷さんが何か他に気になる点があることが伺えたが先ずは目の前の戦いに集中する。

中年男がまずゴーストウルフに向かってナイフを投げる。ゴーストウルフは其れをあつかりと躲し突撃して来た。それに合わせてもう一本ナイフを投げる。ナイフは額に刺さり、武器が聖属性なのかあつさり消滅する。その後ゴブリンが3体同時に棍棒を振り回して3方向から襲ってきた。中年男は其れを予期していたのか腰に下げている小型の斧を手に前方に突進し体当たりした。バランスを崩したゴブリンの頭に小斧を振り下ろす。小斧は頭蓋骨を割り鮮血が飛び散る。倒したゴブリンの顔に足をかけ一気に抜き取る。しかし振り向こうとした瞬間ゴブリンの棍棒が側頭部に当たり中年男が転倒。思わず小斧を手放してしまい、中年男は思わず転がって追撃をかわす。その瞬間「魔法の矢||マジックアロー」が二匹のゴブリンを貫いた。

武人「モモンガ殿、なぜ助けたのです?」

モモ「すみません。一つ思いついてしまったので。それに私の攻撃魔法がこの世界の生物に通じるかどうか、またあのゴブリンの強さがユグドラシルと違うかどうか調べたかったのです」

??? 「な、なんじゃ今のは。魔法? しかし誰もおらん…」



どうやら「完全不可視化」はうまく機能しているようだ。

中年男が周りを気にしだしたとき急に倒れた。

武人「モモンガ殿、「睡眠」スリープ」で気絶させてどうなさるのだ」

モモ「だから色々調べるんですよ」

モモンガは中年男の額に手を当てて「時間延長化・支配」エクステンドマジック・ドミネート」を唱える。眠った状態から薄く目が明き、虚ろな瞳が見える。どうやら上手くいったようだ。

モモ「お前は何者だ？」

???「僕はロックと申します。ドワーフ族の首都フェオ・ジュラからきました」

モモ「ロックよ、おまえは何の目的でトブの大森林まで来た」

ロック「摂政会と親友のゴンドからの依頼で薬草採取に来ました。情けない話ですが私は発掘作業より戦闘の方が得意なので」

モモ「では次の質問だ。そのドワーフ族の町はどこにある？」

ロック「アゼルリシア山脈の巨大な洞窟の中です。この先に行くことやや大きめの山道があります。そこを山の見えるほうに進むと山の中腹にたどり着きます。そこに大きな横穴が見えますのでそこが入り口です」

モモ「摂政会とは何だ？」

ロック「ドワーフの町、というより国の意思決定機関です。現在のドワーフの国は国王がいない為、それぞれの分野の最高責任者6人が集まり会合によって政治を行うのです」

その後、持ちうる兵力。国王の血筋が絶えたこと。現在クアゴア族というモグラのような亜人にかつての首都を奪われ、現在の首都フェオ・ジュラも危険の為対策を迫られている。『プレイヤー』『ユグドラシル』といった単語に覚えがない。など現在のドワーフ族の情報をできる限り集めた。

モモ「こんな所ですかね、念のため「睡眠」をかけて連れていきましよう」

武人「モモンガ殿、もしかして彼を案内人にしてフェオ・ジュラとかいう町に乗り込む気ですか？」

モモ「はい、我々はこの世界の事を知らなすぎます。今我々に必要な情報は情報ではないのですか？ナザリックを守る為にもこの世界で生きていくためにも必要なことだと思います。最も設定道理なら私は死んでるんですけどね」

武人「アンデットも不死身ではないからあながち間違えではないと思うが…。さて、二人はどう思う？」

武御雷さんがアルベドとデミウルゴスの方を向いて聞く。二人も同じ結論に達したらしく頷くだけだった。

モモ「以上が私と武御雷さんが見て来たことです」

武人「時刻は朝7時頃。今まで見たことがない澄んだ青空と美しい森の自然があった。そして山に生命反応多数だ」

ここはナザリック地下大墳墓第6階層の闘技場。よそ者であるドワーフの男を第9階層に招くのは何かいじられでもしたら後が大変だと思い第6階層にした。ここなら彼が混乱して暴れても問題なしと判断した。もちろん私も含めて。

闇「それは幸運でしたね。この世界の生物の戦闘を見学できただけでなく、貴重な情報源まで確保できたとは。それにクアゴア族でしたっけ、彼らの敵は。我の見立てではこの世界の勢力の一つと協力関係が構築できるやもしれません」

式式「然り。私もそう思います。問題はドワーフ族とクアゴア族、どちらと手を結ぶべきかという所ですが…」

山「私はドワーフ族がいいと思うな。だって今押されているのドワーフの方でしょ？そっちに協力した方が恩を売れると思う」

やま「私も姉の意見に賛成です。有利な勢力に売り込んでもたかが知れてるし、戦争中ならスパイの可能性を疑われると思います。かなりの高確率で」

武人「拙者も一ついいかな？先程の戦闘を見るとこの男はドワーフ族の中でも戦闘が得意だという。そしてプレイヤーやユグドラシルという単語に「知らない」といったことからドワーフ族の中にプレイ

ヤーがいる可能性は非常に低いと考える。そして恐らく我々の方がドワーフ族より遙かに強い。この点から見ても、我々の力を見せつけて恩を売れば裏切られる可能性は低いと判断するが」

やまいこさん、山明さん、そして武人武御雷さんの意見は説得力があつたのかギルメンだけでなく守護者たちも仕切りに頷いていた。念のため理由を聞いてみたが全員「有利な方に味方してもリターンが少なく、恩を踏み倒すような種族ならナザリツク全軍を持って両部族を滅ぼしてしまえばよい」という過激な意見だった。

確かに有利な方に味方してもリターンは少ないし、何より信用を得るまでが大変だ。

それにもしくアゴア族の中に『プレイヤー』が存在していた場合、有益な情報と命が引き換えになるかもしれない。「アインズ・ウール・ゴウン」以外にも亜人種や異業種のプレイヤーは大勢いたし同じユグドラシルプレイヤーでも皆が友好的とは限らない。それどころか『悪の組織』『人間種の正義への槌』を標榜していた「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーと解れば敵に回る確率が高い。

以上の点から一先ず捕らえたドワーフの話聞いてから最終的な判断はするが一応ドワーフ族の味方をする方向で落ち着いた。

早速モモンガさんがドワーフ族の男を起こした。

男は目を覚ますと同時に驚き、「ひーっ」と叫んで後ずさり、咄嗟に武器を構えようとしたが武器が没収されおれり、力なく膝をついた。

ロック「お、お前たちは何者じゃ。儂は誘拐されたのか？ここはど・・・」

デミ「至高の御方々に対して無礼ですよ。平伏したまえ、抵抗するな」

ドワーフ族の男「ロック」が言い終わらないうちにデミウルゴスがスキル「支配の呪言」を使ってドワーフの動きを抑制した。

デミ「モモンガ様、話を聞く姿勢が出来たようです」

モモ「デミウルゴス、一応客人だぞ」

へロ「いえ、あの状態ではまともに話を聞いてくれないでしょう。英断だと思えますよ。」

モモ「ウーン、まあ仕方ないですね。ロック殿、失礼はお詫びする。  
2、3聞きたいことがあつて連れてきた」

ロック「き、聞きたいころ…?」

平伏し、頭を床に着けている状態なため言葉がたどたどしい。

流石にこの状況は見かねてしまうので、モモンガさんもデミウルゴスに頭を上げさせるよう命じた。

デミ「頭を上げることが許可する」

ロック「はっ、くっ首が動く?」

モモ「さて、尋問を開始する。クアゴア族とはまだ戦争中ということだが、勝つ見込みはあるのか?」

ロック「な、何故そのことを」

武人「おぬしに催眠魔法をかけたのだ。余計な詮索はせず事実のみを答えよ。言っておくが職業柄嘘はすぐに判る。頼むから余計な魔力を使わせてくれるな。嘘と解ればまた魔法で矯正自白させなければならぬ」

ロックは観念したのか質問に答え始めた。

ロック「勝つ見込みは…低いと言わざるを得ない。儂はドワーフ族の中でも戦闘が得意な方じゃがクアゴア族相手では1対1で勝てるかどうかというもの。しかも奴らは必ず集団で行動する。食料の調達から戦闘までじゃ」

闇「1対1の相手って斥候、それとも敵の大将?どっち」

ロック「斥候じゃ。敵の大将は氏族長ペ・リユロといって実際に奴の戦闘を一度見たが儂が10人いてもかなわんじゃろう」

式式「現在の状況をできるだけ詳しく聞かせて」

ロック「現在は首都フェオ・ジュラから離れた大地の亀裂の所にあるジュラ関で防衛線をはつとる。クアゴア族はオスメス問わずほとんどが戦闘員となれる。こちらの兵力は約1万2千。敵は約5万。現在は地の利を生かして上手く守れておるが正直いつまでもつか…」

その台詞の後ロックがうつむく。先行き不安で絶望の未来を予想しているのかもしれない。もしや売り込むチャンスなのかと思ひ、声をかける。

闇「ロック氏、ドワーフ族の未来を守る提案があるのだが、乗りま  
すかな？」

皆が若干驚いた顔をするが、興味があるのか分かってくれたらしく  
黙って聞いてくれた。

ロック「な、何故そんなことを…。何を企んでおる！」

闇「質問しているのはこちらです。それに難しいことを聞いてるわ  
けでは無いでしょう。是か非かで答えてください。ドワーフ族の未  
来を守りたいか否か」

アル「先に断っておくけど、あなた自分の立場わかってるの？今生  
殺与奪の権利はこちらにあるのよ。命が惜しくないのなら……」

闇「すまないアルベド、少し黙っててくれないか」

アル「も、申し訳ございません。闇信刃様」

闇「すまない、話の腰を折ってしまつたな。とつすまない、言葉を  
崩させてもらう。で、どうだね？」

ロック「：わしとてドワーフじゃ。同志達を守りたい。聞かせてく  
れ、ドワーフ族の未来を守る方法を」

闇「簡単ですよ、我らの軍門に下れ。それだけです」

ロック「それは・・・国民すべてを奴隷にするということか」

闇「ははっ随分な誤解だな。軍門に下れというが同盟関係に近い。  
実はこの地下墳墓に閉じこもっていたせいか我々は世情に疎くてね。  
端的に言えばこの世界で生活するのに必要な物品と情報とコネク  
ションを寄こせということだ。たしかドワーフ族の鍛冶師は有名だ  
から他国との関係は有効なんだろう？今後他国の権力者とコンタク  
トを取る時、貴国の金と情報とコネを都合してもらいたいということ  
ですよ」

それから話ほとんどん拍子に進み、ロックが摂政会の知人に話を通  
してくれ、そこに我々を連れてってくれるということでも落ち着いた。

モモ「いやー、お見事です闇信刃さん。闇信刃さんが今必要なこと  
全部言ってくれて、話も無事まとまりました」

武人「うむつ、闇信刃殿かモモンガ殿でなければこの話はまとまら

なかつたろう」

ヘロ「これでこの異世界へ進出する第一歩が踏み出せましたね。私からも感謝しますよ」

モモ「さて、皆さんここからが問題です。誰が交渉に行きましょうか？」

これほど感謝されるのはいつぶりだと感慨に浸りながらモモンガさんのここ一番の重要な話に耳を傾けた。

式式「確かにそうですね。7人全員で行くと大仰すぎて攻めに来たのかと疑われかねません」

ヘロ「それにナザリック地下大墳墓の管理を守護者だけに任せるわけにはいかんでしょう。ナザリックを空にするのは外の情報がない現時点では余りにもリスクが高い」

確かに近衛軍を連れて行けば交渉所じやないかもしれない。それに援軍が必要な時の為にナザリック地下大墳墓に待機するものが必要だ。もし凶暴なプレイヤーやワールドエネミークラスの敵に遭遇した場合、最悪の事態に陥るかもしれない。自分たちは未知の世界に來ているのだ。最悪の事態は想定しておくべきだろう。

そこで交渉役は私が志願し（皆にもお願いされた）もし何かあった時確実に情報を持ち帰られるメンバーでドワーフ国の首都フェオ・ジユラに向かうことになった。

## 第7話 ドワーフの工匠 ゴンドの意地

私こと闇信刃は現在数人の仲間と十数人の僕と共にドワーフが住む洞窟の入り口に来ています。

ロック「ここが首都フェオ・ジユラへ続く洞窟の入り口じゃ。僕もここを通ってきた」

式式「ずいぶん大きいな。高速道路の入り口と同じかそれ以上だ」  
シャルティア（以下シャル）「式式炎雷様、「コウソクドーロ」とは何でありんすか？」

闇「あー、洞窟の名前だ。気にしなくてよい」  
シャルティアの質問にしろうじて答えた後、私達は直径十数mもある洞窟に入る。

ロック「この洞窟は時折『岩喰らい』ロックイーター』やスライム種のモンスターが出てくる可能性がある。お主等には余計なお世話かもしれないが注意しておいたほうがよい」

闇「となると先頭は索敵ができるアウラと魔法が使えるシャルティアですか？式式殿はどう思いますかな」

式式「ウーン、よくよく考えたらこの中で第5位階以上の魔法が使えるのシャルティアだけです。取り敢えずアウラと伴蔵の一体に「不可視化Ⅱアンノウアブル」をかけて先行させますか？本隊は私とデスナイトが先頭。次にロック、シャルティア、闇信刃さん、デスナイトの順でどうでしょう？」

闇「いいと思います。それならば敵が後ろから来ても対応できるでしょう。ただ：地中から「完全不可視化Ⅱパーフェクト・アンノウアブル」で近づかれたら…」

式式「：闇信刃さん。それじゃあ一歩も外に出られません。この世界の生物の事を私たちは何も知りません。今はこの世界の情報を得るためにリスクがあろうと行動すべきです。もちろん私、闇信刃さん、アウラ、シャルティアそしてセバス・チャン。この5人の内一人でも殺されたら、可能な限り情報を収集して撤退です」

式式炎雷さんはLV100の隊員を上げてそう答える。LV100

0の階層守護者クラスが殺された時点で、戦闘力より調査に特化したメンバーでは全滅の可能性がある。ドワーフが闘っている敵はそれほど強者ということになる。だから現状は式式炎雷さんとアウラの索敵能力を信じて進むしかなかった。

こうして先ずはアウラとアウラの従魔獣クアドラシル、そして、第4、第6階層に配置してある人型のモンスター伴蔵に1km程先行させて道なりとモンスターの有無を調べさせている。ついでに索敵能力はユグドラシルと同じか、あるいは変化しているのかを調べるために。

アウラはビーストタイマーだが隠密と索敵能力に特化した職業構成だし、伴蔵も隠密+奇襲攻撃に特化したアルフヘイムにあるイベント時に入れる城にPOPするモンスターでLVは50〜59。諜報係として優秀なため選択としては正しいはずだ。

そして、30分程進んだ所で、アウラが戻ってきた。

アウラ「報告します。ここから1km程進んだ所でドワーフを一人確認しました。LVは6〜7。戦闘力は恐らくありません。鍛冶師又は錬金術師に特化しているものと思われれます」

アウラはスキルでおおよそのれLV、種族、職業、ステータス等を読み取れる。

式式「一人で戦闘力がほとんどない…。おとりか？」

シャル「私が先行して仕掛けてみるでありんすか？」

闇「早まるなシャルティア、ロックに合わせて敵か味方が判断するのが先だ。そもそもフェオ・ジュラには情報収集がメインだ。目的をはき違えてもらっては困るな」

ロック「おおっ思い出したわい。今日はゴンドの奴がこの辺りで仕事の予定があったはずじゃ」

闇「知り合いか」

ロック「おうよ、儂が山の外に居たのもあいつからもう少し稼いだら旅に出るからポーシジョン作成用の薬草を取ってきてくれと頼まれたからじゃ」



式式「なら急ごう。知り合いなら交渉は任せますよロックさん」

ロック「呼び捨てでいいわい。あんたたちのようなスゲー奴に敬称を着けられると心臓に悪い」

念のため伴蔵に全員に「不可視化」をかけるように言ってから全員でアウラが見つけたドワーフの所へ行った。

確かにピッケルで穴を掘りトロッコに掘った岩を入れて運び出してる中年男が居た。ロックに確認させたところ友人のゴンドに間違いないらしい。

伴蔵にロックの「不可視化」だけ解除するように言っ行って行かせる。もちろん周囲100M圏内にモンスターがいないことは確認済み。

ロック「ようゴンド。白鉱石は採れたかい？」

ゴンド「ロック？今回はいつもより遅かったな。目当ての薬草と鉱石は採れたのかい？」

ロック「ああつこの長くて白い根つこの薬草は効果が高いから高く売れるぞ。ちゃんとお前に注文された分も取ってある。」

実は道中式式さんが薬草の匂いを索敵して（この世界ではそんなこともできる）目当ての薬草を見つけてきた。ロックは今所持しているものも含めて何時もの二倍以上の収穫だと喜んでいた。

ゴンド「少し待っててくれ。これを運び終わったらひと段落だ」

そう言っって掘った岩と土をトロッコで運び、白鉱石をかごの中に入れる。

ゴンド「5時間掘って結局これだけだ。これじゃあ剣一本とナイフ一本、もしくは盾1つが限度だな」

ゴンドは革袋の水を飲みながらため息交じりに言った。恐らく注文量より少ないのだろう。それでも一日で取れる量としては十分多いのだが。

一息ついたのを確認してロックは話を切り出した。

ロック「なあゴンド、実はあってほしい人たちがいるんだが…」

ゴンド「どしたあ、改まって。あってほしい人ってことは人間の商人でも連れて来たのか。今はクアゴア族との戦で満足な品は卸せないが…」

ロック「まあ客と言えなくもないんだが…。少し心臓に悪い連中かもな」

ゴンド「…何があった。おめえがそんなに改まって話すのは珍しいな」

ロック「ははっ確かに…。おーい、来てくれ」

私たちは「不可視化」の魔法を解いて姿を現した。ちなみに万が一の為に諜報担当の式式炎雷さんとソリュシヤンは「不可視化」を解かないでもらっている。

ゴンド「うわあつ、な、なんだそいつら、けつたいな格好しよるのお」

ロック「落ち着け、実はこの人？達を摂政会の長老たちに紹介したい」

ゴンド「なんのために？まさか上客なのか？お前は酒や発掘より探検や薬草採取の方が向いているから商売は苦手と思っと思ったんだが」

ロック「違うわい。この方達は儂らの救世主になるやもしれん」

ゴンド「…どういうことだ？」

ロックが私たちに会って交わした約束や実際に見て来た戦闘風景などを話した。

ゴンド「にわかには信じ難い話だがドワーフの戦士であるお前が国を滅ぼしかねない事で嘘や冗談を言う男でないことも知っている。…：わかった。従妹が摂政会の会員じゃ。話してみよう」

ロック「ありがとう。友よ」

ゴンド「やめてくれ、お主との仲じゃ。その前に一ついいか？」

闇「質問によります」

ゴンド「お主たちは人間か？後ろのフランジュベルを持った奴はどう見てもアンデットじゃろう。青い鎧の兄ちゃんにも同じ感じがするんじゃないが」

闇「…ロックさんこの人が混乱したらちゃんと言明してくださいね。ゴンドさん、今は落ち着いていますか？」

ゴンド「なんじゃ藪から棒に…。後ろのアンデットには正直未だに肝を冷やして居るからこれ以上驚かせんでもらえると助かるんじゃないが」

が…そうもいかんか」

闇「・・・分かりました。デスナイト達、少し下がって後方の警戒を」

デスナイトたちを視界の外へ行かせる。

闇「顔を見せても構いませんが再度警告します。私にあなたに対する害意は有りませんがあなたが余りに敵意を向けられるとこちらとしても接し方を変えなくてはなりません。そこはどうかお気をつけください。私たちの目的はあくまでドワーフ国との話し合いですが余りに軽蔑される態度を取られると友好関係を築くどころかクアゴア族と共闘しあなた方の敵に回ることになります。しかしこちらとしてもドワーフの工匠達の技術力を失いたくありません。どうかそこを忘れずをお願いします」

ゴンド「う、うむわかった。というよりお主たちはロツクが信用して連れてきたものじゃ、敵とは思ってらんよ」

闇「ありがとうございます。では…」

私はそういつてフードを取った。途端にくわつと信じられないようなものを見た顔になった。まあ、私も人間のままだったら同じ反応を思うけど…。

フードの下は人間の顔ではなかった。鎧の中は青白い炎がゆらゆらと揺れている。しかも不思議なことにその炎は全く熱を持っていないようだった。というか実際武人武御雷さんが触れても熱がないどころか少し冷たいとさえ言われた。そしてその炎の中に金色に輝く二つの細長い炎が人間の目の形をして揺らいでいる。

ゴンド「まさかとは思つとつたが…人間じゃなかったか」

闇「…流石ですね。てつきり混乱すると思つていたのですが」

ゴンド「それらしいことをロツクから聞いたとつたからのお。まあええ、もしお主等が敵に回つたらドワーフ族は全滅じゃろう。それぐらい強いことはうまく言えんが感覚で分かる。ロツクを信じてお前らは責任もつてフェオ・ジュラに連れてつちやる」

闇「契約成立ですね。成功の暁には我々にできることがあつたら言つてほしい」

ゴンド「フォーム、お主等ルーン技術というものを知っとるか」

闇「ルーンですか、その技術で作った武器や防具はユグドラシルで見かけたことは有ります」

ゴンド「ユグドラシル？」

闇「い、いえ私たちの本拠地にいくつかあるというのを思い出しただけです」

ゴンド「・・・まあ良い。藪をつつくつもりはない。儂はこの仕事と次の仕事が終わったら旅に出ようと思つとるんじゃよ。時間が惜しい、歩きながら話そう」

首都フェオ・ジユラに行くまでの道程でゴンドは自分の人生と目標について話してくれた。祖父がルーン工匠であったこと。父もルーン工匠だったが人間が作るマジックアイテムの方が性能が良く、短期で出来るため儲からなくなり金堀人になったこと。祖父の代で人間に追い抜かれてしまった技術に対抗して世界に誇れるルーン技術を復活させる事が人生最後の仕事であるということ。

一通り聞いた後関所付近に偵察に言っていたアウラが緊急報告に戻ってきた。

アウラ「報告します。ドワーフ族と思われる一団がこちらに来ます」

闇「どうゆうことですか？まさか襲われたのですか」

アウラ「いえ、どうも何者かに襲われ避難しているようです」

ロック「どうゆうことじゃ？クアゴア族が攻めて来たのか」

アウラ「さあ、私はクアゴア族なんて見たことないから知らないよ。襲っている奴は白い毛がふさふさしていて黒い爪が生えた両手足を持って金色の眉毛をしていてモグラみたいな体型をしていました」

ゴンド「間違いない：クアゴア族じゃ」

闇「アウラ、シャルティア、いよいよこの世界での実戦だ。打ち合わせは覚えているか」

アウラ「はい、闇信刃様、まず「不可視化」で遠距離から攻めこちらに気付かなかつたら接近戦で殲滅。敵が3名以上だった場合2名は捕獲。ドワーフ族が殺されそうだったり人質になっているたら可

能な限り助ける、ですね」

闇「よしつ式式炎雷さんとソリュシヤンは遠くから戦闘の監視をお願いします。私とセバスは此処を確保し、状況に応じてアウラ達を支援します。アウラ、シャルティア、行けっ！」

私の櫓と共に二人は姿を消した。

ゴンド「あのダークエルフの男の子と肌の白い人間の娘で大丈夫なのかの？」

ゴンドが心配そうな顔で此方を伺う。まあ、当然の反応だ。二人とも外見は子供だし私も彼女たちの実力を知らなければ同じ表情をするだろう。

ロック「大丈夫じゃよ。儂はあの二人ではないがそのこの鎧男の実力は見た。その男が信用するのだ。信じてみよう。」

(・・・私リアルじゃ女なんだけどね・・・アラサーの)

アウラはシャルティアと共に急いで偵察していた現場に急行する。

もう全員逃げたか狩られたかと思っていたら一人逃げ遅れている太り気味の女性がいた。年齢は人間の見た目では十代後半だが背が150cm前後と低く身長に比べ寸胴型の体型をしている。これは典型的なドワーフの女性だ。

そのドワーフの女性がつまづいて倒れた。膝を打ったらしく苦悶の表情を浮かべていたが直ぐに立ち上がり駆け出した。しかしクアゴア族の先遣隊が追いついてきた。

ドワーフの女は半泣きしながら必死に逃げようとしたがすぐに追いつかれクアゴア族の兵士はドワーフの女に黒い爪で切りつけようとしたその時、「バアン」という音と共にクアゴア族の頭が吹き飛んだ。

フェオ・ジュラに住むドワーフのサラはその音に振り向き呆然とした。

サラ「な、何が起きたの・・・」

彼女は鍛冶師の父の頼みで作成した武器を隊商に売り、衣類や必要なものを購入し帰る途中でクアゴア族に襲われた。7人の仲間と共に必要な物資を運んでいたがリュックを背負っていたため足が遅く逃げ遅れてしまった。既に4人が殺され2人の仲間も必要最低限の荷物だけもって逃げてしまった。

そして今まさに追い付かれ殺されそうになった時突然襲ってきたクアゴア族が頭を吹き飛ばされて死んだ。

??「悪いけどその岩場で大人しくしといてくれなんし」

突然の声に驚き振り向くと絶句した。

そこには人がいた。しかし驚いたことは其処ではない。驚いたのはその人間の女性の外見だった。彼女は父の仕事関係で人間に会ったことは何度かある。その中には女性の商人もいた。しかし目の前の女性ほどの美人に出会ったことは無かった。身を包むは黒いボー ルガウンの服一目で高級品だと解る見事な出来栄だった。顔は一流の画家でも表現できないほど見事に整っていて銀髪は光沢を放ちながらさらさらと揺れている。赤い瞳はまるで澄んだルビーのようだ。唇は薄いピンク色で肌はまるで日の光を浴びたことがな白磁色でまさに芸術品と言っている。体に目を向けると身長145cm程度と自分より背が低いはずなのに胸が盛り上がっていて余りに不釣り合いだ。

全体的にどこぞの国のお姫様とでもいったほうが良いような外観の女性にしばし目を奪われていた。

シャル「あれっもしかして気絶しているんでありんすか？外傷はないようだけど…」

サラ「いっついえ大丈夫ですハイ。あっあの貴方様は…」

シャル「自己紹介は後、とにかくその岩陰に隠れていなんし」

サラは冷静さを欠いていたためか慌ててその美しすぎる女性の言葉に従って指定された岩陰に隠れた。

間もなくクアゴア族の兵士たちが揃って襲ってきた。

「頭目ウー。人間がいますが食っちゃまっていいっすかねえ」

「構わねえ、腹の足しにシロー」

そう言つてクアゴア族兵士4名の内2名は一気呵成に飛び込んできた。最もLV8〜12の彼らのスピードは例え種族的な速さを含めたとしてもシャルティア、というよりLV100NPCにとつてはスローモーシヨン並みの遅さだ。

先頭のクアゴア兵士2名が爪を左右から頭、胴体を狙つて振るつた。シャルティアは姿勢を低くして上段の爪を躲し下段の爪を手刀で切りその後真横に両手の手刀を振るつた。それだけで二匹のクアゴアは右側は首を、左側は胴体を切断されて息絶えた。

後ろに居た残りのクアゴアは驚き後づさつた。当然だ。人間はもちろん当のクアゴア族でも今の光景はクアゴア兵士が切りつけた瞬間、消えて再び現れた瞬間クアゴアの胴体と頭が泣き別れに会つたしか見えなかつたろう。後で聞いた話ではサラやロツクもそう見えたらしい。

こちらの手の内を探ろうと様子見を決め込んでいたらしいがシャルティアには関係なく一瞬で近づき「魅惑の魔眼」で捕らえて式式炎雷の前に連れてきた。

シャル「お待たせいたしました。クアゴア族の兵士2名であります」

式式「既に魅了済みか。よくやったぞシャルティア」

シャル「勿体ないお言葉」

シャルティアは敬意を示した礼を取っていたが式式炎雷と闇信刃は「モモンガさんとは違うな…」と、感じていた。以前モモンガさんに褒められていた時は「ああつ光栄でありんす我が君」と頬を紅潮させ興奮しながらいつていたのだ。

その後気になって聞いたら創造主のペロロンチーノさんがシャルティアは死体愛好家兼同性愛者という設定のせいだと知りモモンガを含めた7人が「何やつてんのあの人…」とため息を漏らした。

そんな思いを振り払いクアゴア族の兵士に尋問した結果、恐らく敵になる勢力の構図が見えてきた。

?クアゴア族は全部で8万4千人(匹?)。種族の長「氏族長」が8人いてさらに上の全氏族の頂点がペ・リユロと言うらしい(ここでは

総氏族長と呼称しておく。

☒クアゴア族は現在『氷竜Ⅱフロストドラゴン』と呼ばれる竜種族の配下に収まっている。

☒上記のフロストドラゴンは10年に一度『氷巨人Ⅱフロストジャイアント』と呼ばれる種族と山脈の覇権をめぐって争っている。

☒クアゴア族は個人的な身体能力的には人間より勝っているがどうくつや建物の中なら勝算は(同レベルでの戦いでは)高いが平地戦だと体が適応してないため相手が多少腕に自信のある奴なら勝算は低い。

☒クアゴア族の一般兵の戦闘能力はこの世界の基準でいう『難度』で20〜30。氏族長クラスなら45〜65位。LVに換算すると正確ではないが大体8〜12。

式式「取り敢えずクアゴア族の戦闘力とアゼルリシア山脈の勢力図は大方理解できましたね」

闇「はい、しかし判明したのはあくまで一般兵の強さです。フロストドラゴンやフロストジャイアントの戦闘力は不明ですのでそこは忘れず警戒していきましょう」

アウラ「雑魚は私とシャルティアが掃除してきましょうか？私の魔獣とシャルティアなら殲滅できると思います」

闇「現段階では情報が足りなさすぎる。まずはフェオ・ジュラに着いてから考えましょう。索敵を怠らずに」

途中ロツクイーターに出くわしたがアウラが鞭を一閃すると牙が折れ口が真っ二つに割れ血が噴き出していた。地中に逃げようとしたので仕留めるよう命じたら胴体を寸断した。幸い牙が折れて地中に潜るのに時間がかかったのが幸いしたらしい。

そんなこんなでゴンドと会ってから3時間程歩いてようやく首都フェオ・ジュラの関所に着いた。

先ず驚いたのは25mはあろう巨大な大地の割れ目だった。

闇「これはすごい！正に天然の要害ですな」



式式「ええ、私もこの体じゃなかったら縄をかけるか退くしかないところでしたよ」

ゴンド「そこにある大きな橋が唯一の交通路じゃ。現在クアゴア族の侵攻は此処で食い止めとる」

幸い橋は横幅が3 m程ありデスナイト達も容易に通れた。

いよいよ最初の関門だ。先ずはこの関所の責任者の説得なのだがそれはゴンドさんとロックさんが警備隊長と仲が良かったので説得はスムーズだった。

ゴンドさん曰く「現在は膠着状態じゃが隊商の生き残りが先に来てクアゴア族の攻勢の様子を見せているということと話したらしい」とのことで戦力が必要不可欠とのことだった。

その後の警備隊長との交渉で、デスナイト2体を残しクアゴア族の迎撃と関門から100 m以上離れないように伝えると私たちは首都フェオ・ジユラに向かった。

## 第8話 ドワーフの工匠 摂政会

首都フェオ・ジユラ

闇信刃です。私達アインズ・ウール・ゴウン一行は異業種だとばれぬよう、アウラ、シャルティア以外のメンバーは「不可視化」アンノウアブル」をかけ更に念のため感知阻害の効果がある外套を羽織っている。

首都フェオ・ジユラはドワーフ族が10万8千人+人間とエルフが50〜150人が生活するドワーフ族の最後の砦と言われるだけあって活気づいていた。ドワーフの工匠達と取引している隣国の支援もあつての事だろう。

フェオ・ジユラに着くと早速摂政会と交渉するにはどうしたらいいか尋ねた。

ロック「少し待合室で待つてくれ。摂政会に居る身内に話を着けてくる」

一応の説明を受けた後、我々は首都フェオ・ジユラの中でもひと際大きな4階建ての建物に案内された。途中で見かけた建物はどれも石又はレンガ造りの1〜2階建てだったので、小規模の会社という感じの建物は目立っていた。

その後シャルティアに定時連絡を入れるように言った後ゴンドさんに遠くには離れないから少し外を見てくると言い、出たところで二人にモモンガさんから「集団伝言」マス・メッセージ」が入った。

闇「もしもしモモンガさん、少し相談事が有るんだけど」

モモ「ドワーフ族から新しい情報でも？」

闇「はい、現状と交渉の焦点についてなのですが…」

こうして私たちはクアゴア族の戦力と侵攻の進み具合、個の力、集の力、手に入りそうな物。そして、交渉内容等を十分に検討した結果、此方が提供するの**は**戦力。ドワーフ族には**この**世界の通貨**この**世界の情報**その他**価値ある技術、以上の三つを要求することにした。

モモ「技術と言われましたが何か心当たりでも？」

闇「ルーン技術です」

モモ「ルーン？それだったら我々もいくつか持ってますが……」

モモンガさんが言っているのは本当だ。私も式式炎雷さんもルーン技術が使われた武器や防具を私は一つ、式式炎雷さんは3つ持っている。しかし式式炎雷さんにはユグドラシルで使われているのとは別の技術が使われているのではないかと睨んでおり、もしくはこの世界の未知の技術とナザリック地下大墳墓の錬金術師（あまのまひとつさんのNPC）でもつと協力的な武器や防具を作れるかもしれないと考えていた。いやあそれは気が付かなかったな。流石式式炎雷さん。現時点において我々の戦闘力や武器防具は優れているほうだと考えられるがそれはイコール最強という意味ではない。

モモンガさんは今の話に大いに興奮し賛同してくれた（その直後精神鎮静化してがっかりしてたが）。その後話を聞いた武人武御雷さんが「私が行けばよかった。未知の技術が手に入ればたちさんを超えられる武器を開発する夢に近づけるのに」と半泣きでモモンガさんに愚痴ってたらしいがここでは割愛する。

方針が決まった時、式式炎雷さんから提案があった。

式式「闇信刃さん、今回の交渉私に任せていただけますか？」

闇「構いませぬが……その理由は」

式式「商業ギルドとの交渉はやったことないでしょう？私はリアル知り合いとゲーム内での取引をしてましたのでその辺りは心得ています。もう一つは闇信刃さんとアウラに自分の交渉術を学んでもらいたいからです。ドワーフ族がいる以上エルフ族も存在する可能性は非常に高いです。もしエルフ族の村や町に行く時はアウラかマーレに交渉の仲介に連れていく必要があると考えています。何しろナザリック以外の者には冷たいですから、その時の為に友好的な接し方を学んでほしいんです」

闇「そういうことなら是非ともお願いいたします」

私は喜んで式式炎雷さんの提案を受け入れ細部を相談しようとした時、ロツクが帰ってきた。

ドワーフ族の政治の中心部摂政会合同執務室。直径20m位の部屋を中心にまるで王宮の食堂のような長い茶色のマホガニー製のよなテーブルが置いてありそこに8人の摂政会メンバーが集まっていた。

執務室には私、式式炎雷さん、アウラの3人が入った。もちろんロックと一緒にだ。シャルティアは揉めそうだったので留守番。

交渉は式式炎雷さん一人で行った。

当初人間種ですらない私たちが協力すると言っても信用されなかった(当然だが)。しかしゴンドさん、ロックさんの説得で何とか話を聞いてもらえた。やはり来る途中でクアゴア族と戦闘していたのが大きかった。

見返りを聞かれた時、この世界の貨幣と情報は承諾して貰えたがどうも3番目の条件が気に入らなかったらしい。どうも奴隷にされると勘違いしていたみたいだがあくまでも技術の研究だと根気強く説得してくれた。

その後、クアゴア族とそれを支配するフロストドラゴンの住処である旧首都フェオ・ベルカナの場所を教えてもらい、もしクアゴア族から旧首都を取り返す、あるいは侵攻を諦めさせることが出来たらこちらの要求に答えるという旨を書いた証明書となる羊皮紙を受け取り、デスナイト二体を関門に残し、旧首都に向かった。

## 第9話 クアゴア族とフロストドラゴン 前編

私たちは現在旧首都フェオ・ベルカナにむかっている。

道案内は引き続きゴンド氏が担当してくれた。一泊しただけで疲れが取れたのか不安だったが「恩人だけに危険を押し付け、自分だけ安全な場所で高みの見物というわけにはいかん」と同行してくれた。無理はしないでほしい。彼にはナザリック地下大墳墓の為にルーン技術を開発してもらいたいのだから。最もナザリック地下大墳墓に招くのか近くの森の中で居住地を構えてほしいのかはまだ検討中だが。ちなみにロック氏は薬草を卸した後大地の裂け目の関門に残った。何でも守備隊長から人手が足りないと言われ引張られた。

道中敵に関する様々な事を聞いた。元首都のフェオ・ベルカナは堅牢な城塞で当時からクアゴア族とは諍いがあったがその度に撃退していた。当時のドワーフ王は伝説として語られるほど強かったが二百年ほど前、魔人の出現によって草原にある国が一つ滅ぼされた時、生き残った人間たちの要請に応えドワーフ族の王と側近2名が国を開けて魔人と闘うことになった。

しかし魔人を倒した後、王は戻らず側近の一人が戻ってきて王の死を告げた。その事を知ったクアゴア族はフロストドラゴンと手を組みフェオ・ベルカナを奪ったと言われている。

私はその話になんか興味を持ったため索敵をしながら聞いていると何故か妙な胸騒ぎを覚えた。

式式「どうしました？ 闇信刃さん。何か気になってるようすが」

流石は式式炎雷さん。私の様子がおかしいことに気づくとは……。彼の索敵能力は感情の変化も読み取れるのだろうか

闇「上手くは言えないのですが…今の話何か引っかけがあります。不可解な不自然さがあるというか…」

式式「もしかして魔人というのがプレイヤーもしくはNPCだど？」

闇「…ウム。多分私の思い過ごしだと思うが」

式式「そうですね…。私もいささか引つ掛かりますがこういう事は考えても答えは出ないでしょう。この世界のモンスターや戦士、魔法使いの實力はまだほとんど判明していません。ドワーフ族やクアゴア族には居なくても人間やエルフの中には我々の脅威となりうる存在がいる可能性は十分にあります。いずれにしろ判断するには情報が少なすぎます。今は解らないことを悩むより目先の事を考えましょう」

式式炎雷さんの意見は実に正論だ。私も「式式殿、感謝する」といいまずはクアゴア族との戦いに集中することにした。他の事に囚われていたら足を掬われてしまう。ユグドラシルで何度も経験したことだ。

途中シャルティアやアウラが「至高の御方々の脅威となる存在などいるはずありません」「その様な者わらわが必ずや仕留めて…」と言つたやり取りやクアゴア族の守備隊50名と遭遇したがシャルティアとアウラが一閃して始末した（数名はわざと逃がした）と言うことがあつたがゴンドさんの為に途中で休憩して翌日の昼頃フェオ・ベルカナの前に到着した。

さてどうしたものかと思っていたら守備隊と思しきクアゴア族の兵士が100名程此方へ来た。

すぐさま戦闘態勢に入るが（何故かユグドラシル時代以上に切り替えが機敏になっていた）戦闘のクアゴアが一人で両手を上げまるで降伏するかのように向かつてきたので身構えたまま話すことにした。ちなみに式式炎雷さんが交渉を担当した。私に見せる意味合いもあるらしい。

クアゴア族の兵士「待ってくれ、戦闘の意味はない。わが主が貴様らに話をしたいと言っている」

式式「散々喧嘩売ってきておいてどういう風の吹き回しだ？」

兵士「お前たちが…いや、あなた方が我々の先遣隊を壊滅させたことは伝え聞いてはいる。故に我らはまともなぶつかるは得策ではないと判断した。わが主オラサーダルクとの会見を願いたい」

式式「会見ねえ…。念のために聞くがそれは1対1か？」

兵士「いえ、そちらの全員で構いません。勿論武器防具の所持も結構」

式式「それならお引き受けしよう」

それから少し時間が欲しいと断って50Mほど離れた所で相談した。

シャル「式式炎雷様。闇信刃様。これからどういたしんすか？」

式式「とりあえず私の考えを述べよう。私は二手に分かれることを提案する」

ゴンド「ど、どういうこった？」

式式「闇信刃さんは解りますか？」

闇「うくん。クアゴア族の二正面作戦への警戒ですかね？此方がフロストドラゴンに掛かり切りでいる隙に後ろからっていう…」

式式「流石ですね。もし敵のボスであるフロストドラゴンやクアゴア族の長がプレイヤーもしくはLV70以上だった場合それをされると多少厄介なことになります」

アウラ「それほどの相手が近くに居れば私のスキルに引っ掛かりそうなんですけど」

式式「相手が高LEVELプレイヤーだったら感知できなくても不思議はないさ。この世界にしかないマジックアイテム等の可能性もね」

確かにこの世界にはタレントや武技といった能力がある。ユグドラシルにはない特別な効果を持ったアイテムがあっても不思議ではない。

闇「解りました。内訳はどうします」

式式「我儘を言わせてもらえばフロストドラゴンは私に任せて貰いたいですね」

シャル「式式炎雷様おまちを。ユグドラシルにおいてドラゴンはモンスターの中でも最強種。もしLV70を超えていたら危険でありんす。危険な魔物退治ならわらわが」

アウラ「あたしもシャルティアの意見に賛成です。勿論式式炎雷の身体能力は存じております。しかし・・・相手が動きを封じるスキルを所持していた場合敗北の可能性がゼロとは言えません。あたしとシャルティアにお任せいただけないのであればせめてナザリックよりLV60以上の兵を複数連れてきてから会見に臨んだほうが・・・」  
式式「半蔵（LV50）二体だけで十分だよ。もしやばかったらスキルを駆使して半蔵を盾にして逃げるから」

その後、フロストドラゴンには式式炎雷さん、アウラ、ゴンド、半蔵×2が、クアゴア族の説得は私とシャルティアと念のためモモンガさんに連絡して送ってもらったデスナイト＋エルダーリッチ×5となった。やはりモモンガさんを始め待機組は式式炎雷さんに増援を出したかったがデスナイトでは建物の中ではかえって邪魔になると断った。

「転移から9日目の3月10日午前8時半 首都フェオ・ベルカナ 正門前」

ヘジンマール（以下ヘジ）「はあ…。相手が怖かったらどうしよう」  
ヘジンマールはそういつてため息を漏らした。

ヘジンマールはフロストドラゴンの長オラサーダルクの長男である。身長は6〜7Mとフロストドラゴンのなかではやや低いが体積は横に大きく体重も弟の約1.3倍と所謂デブドラゴン。しかもフロストドラゴンの中では弱い部類で城に保管されていた本ばかり読んだ。母は「知識は豊富なのでただ力が強いだけの存在よりは役に立つ」と評価してくれたが父は攻撃力至上主義なのでヘジンマールを嫌っていた。

その為、今回彼は父オラサーダルクから正門前で侵入者を迎え撃つ仕事を与えられた。

父から「負けたら殺す」と言われ引けなかった彼は目の前に相対している敵が身長が2Mも無い二人組を目撃し取り敢えず安堵した。



これなら自分の体格とブレスで逃げてくれるだろうと。  
しかし目の前の相手は強敵どころでは無かった。

この世界に来てから9日目の午前8時45分、式式炎雷は困惑していた。

現在私こと式式炎雷、アウラ、伴蔵×2　そして、モモンガさんに送ってもらったデスナイト二名と共にフェオ・ベルカナの正門前でこの世界初のドラゴンと対峙している。

ユグドラシルを数カ月プレイした者ならドラゴンがモンスターの中でも1, 2を争う強敵だという事は誰でも理解している。

しかしユグドラシルプレイヤーにとって目の前にいるドラゴンはがっかりするかレア者と喜ぶか困るところだ。

目の前のフロストドラゴンは一言でいうと『デブ』だ(控えめに言っても)。顔を見ると牙は鋭いが目は覇気と言うかすごくダルそうで迫力を感じない。しかも何故が眼鏡をかけておりそれが一層竜としての威厳や恐怖を感じさせない。翼もあるものなんか翼自体はおろか背中に余り筋肉が付いているとは思えず、空も上手く飛べるか不明だ。

私は忍者職を取得しているので半径2kmの敵味方の位置とステータスを把握できるがそのスキルで見た目の前の竜は魔力が高いため魔法は使えるらしいがLVは18しかない。すごいカルチャーショックだ。

相手は一応闘う意思があるようなので此方も構える。たとえ相手が格下でも私の防御力は無いも同然なので攻撃を受けるわけにはいかない。

取り敢えずスキルが通じるか否か試すため「影縫い」を発動してみた。どうやら効いたらしく驚愕の表情を浮かべている。

この世界のモンスターは未知数な部分が多いため一先ず情報収集を試みた。

式式「お前の身体は私の術で封じた。お前の命は風前の灯火だ」

ヘジンマール(以下ヘジン)「!!」

式式「さて、取り敢えず動きを封じさせてもらおうぞ？」

私はそう言うのと素早く翼を切断し、更に後ろ足二本の腱と思しき箇所を伝説級武器（陽光）（月詠）で切断する。

その間ジャスト一秒、しかも「影縫い」のせいで声も上げられない。（ユグドラシルでは高LEVELのぷれいやーには動きが少し遅くなる程度だったがリアルになったせいで効果が変わっているらしい）

式式「これで逃げられまい。人語が理解できるなら聞け。後3分程で術が解ける。そしてら質問する。嘘偽りが発覚したり、一分を超えると沈黙を確認したら拷問する。解つたら何らか伏せろ」

どうやら言語は共通しているようで「影縫い」が解けると頭を下げ「伏せ」の姿勢を取った。

ヘジン「お待ちください。どうか命だけは…」

後で知ったがヘジンマールはフロストドラゴン（というか家族）の中では魔力は高いが戦闘力は低く、更に本ばかり読んでいるため実戦経験も生まれてから3回位しか無いが先の私のスキルと身のこなしで敵わないと感覚で悟つたらしい。（確かにユグドラシルでも誘導系魔法以外は余裕で躲していたが）

その後、いくつかの質問で様々なことが分かった。フロストドラゴンのリーダーはオラサーダルク、勢力は妃が3匹、子供が12匹、合計16体でクアゴア族8万を支配下に加えており同じくアゼルリシア山脈に住むフロストジャイアントと支配者の座をかけて争っているらしい。最も現在は両勢力とも子供を鍛えて兵力を整えている最中らしいが。

私は早速「伝言」で闇信刃さんとモモンガさんに連絡を取った。

モモ「そのままボス戦まで行っていいと思いますよ」

モモンガさんの開口一番は極めて簡潔だった。

闇「一応は計画通りに行ってますし」

式式「問題は敵の首領がどの程度の強さかという事です」

闇「ヘジンマールというやつが18程でしたよね。いくら式式さんが紙装甲だからと言っても90レベル以下の敵の攻撃なら1,2発ではやられません。警戒を怠らなければ大丈夫でしょう」

闇信刃さんの意見は最もだ。私は種族も職業も防御力を無視し、隠密と攻撃力に特化したビルド構成だ。現在の身体なら大抵の攻撃は目をつむってたつて避けられるし、攻撃力に特化した100レベルプレイヤーであれば私を一撃で殺すこともできるが、それを防ぐスキルやアイテムは所持している。相手がスキルとアイテムを無効化する手段を持っているもしくは、必中スキルを4回以上使用できない限り勝てる自信はある。

それに魔法防御力もかなり低い物理防御力程ではない。ヘジンマールのように第2位階程度なら「中位魔法無効化」のスキルで無効化できるしヘジンマールの話ではオラサーダルクや母親のキーリストランも第3位階までの魔法しか使えないと聞いている。アウラもいれば十分すぎる。

その後、アウラやゴンドとも相談した。

ゴンド「なあ旦那、あのヘジンマールと言うやつには母親と兄弟がいるんだろ。俺が頼むことじゃねえが実の母親と弟妹は助けちゃくれねえか？」

式式「その理由は？」

ゴンド「大抵の種族は親兄弟を殺されると遺族は全滅するまで闘うもんだからだ。でも身内を何人か助ければこちらの狙いが虐殺じゃないってことが伝わり、服従させやすくなる。ドラゴンがいれば今後何かと役に立つんじゃないか？それにドラゴンが絶滅したら山の生態系が狂って色々な害獣が跳梁跋扈することに繋がりがねえしそいつらを駆除したら、今度は害虫が繁殖しちゃう」

アウラ「式式炎雷様。あたしの魔獣でも体長1m以上の害獣ならともかく小さな害虫を駆除させるのは難しいので一理あるかと。それにそのう……。私も個人的にゴンドの案を取り上げて欲しいのですが……」

式式「なんだ、お願いがあるというのか？」

アウラ「も、申し訳ございません。至高の御方を前に出すぎた真似を……。これは決して害虫駆除が苦手というわけでは……。いえ、それも事実なのですが」

式式「落ち着け、大丈夫だ怒りはしない。親友の娘であるお前の願いを理由なく無下にはしない。言いなさい。私もお前たちが何を望んでいるのか知りたいのだ」

アウラ「で、ではお言葉に甘えて…。個人的にフロストドラゴンを飼ってみたいので…」

式式「はははっ、分かった。大丈夫だ。それぐらい皆も許してくれる。大丈夫だアウラ」

アウラ「あ、ありがとうございます。」

アウラは感激し涙を流していた。「こりや益々皆殺しと言うわけにはいかなくなったな」と気を引き締めつつ敵首領の下に向かった。

蓋を開けてみればあっけなかった。話を聞く限りドラゴンは誇り高い種族なので徹底抗戦の構えを見せてくると考え、何匹かは「影縫い」で動けなくして数匹をばらして持ち帰り、有効活用しようともモンガさんとヘロヘロさんに相談して戦いを挑んだ。しかし探知系スキルを使用したらオラサーダルクですらLV46しかなかった。アウラにも確認してもらったから間違いない。

戦闘は数秒で終わった。出会い頭に「見事な短刀だ。小さき者よ、命が惜しければその短刀を献上せよ」などと言われたので「影縫い」で動けなくしてから素早く頭上に上り先ず目をくりぬき眼窩に手を入れて脳を潰した。竜の素材は貴重なので素材を傷つけずに得る配慮だ。

私はオラサーダルクの後ろに控えていた3匹の竜に向いて言った。

式式「ヘジンマール、あいつ等が父親の妃とやらか？お前の母親は誰だ。そいつの命は助ける。残りの二匹は従うなら助けるがあくまで抵抗するなら容赦なく殺す」

三匹の雌竜「私です」

三匹の竜はそう言って全員頭を下げた。

式式「…何だこりや、んんっこれは、生みの親育ての親温めの親でもいるのか？」

私は半ば呆れながらゴンドやヘジンマールと相談し、最後にモモン

ガさんにも相談して全匹助けることに決めた。

その後、徹底抗戦を主張した一匹をさっきのやり方で倒すと（期待したがLVは31程度だった）残りの10匹はあっさり降参した。

こうしてフロストドラゴンはナザリツクの支配下に入った。

## 第10話 クアゴア族とフロストドラゴン 後編

「3月10日午前8時半 アゼルリシア山脈中腹（フェオ・ジユラとフェオ・ベルカナの中間からそれて10分位の所にある広い空間）」

現在私こと闇信刃はシャルティア、デスナイト×5＋エルダーリツチ×5を連れてクアゴア族の本拠地に招かれていた。最も案内役のクアゴア族を半殺しにして道案内をして貰い、仲間を呼んでもらってクアゴア族のリーダーに話を着けてもらえるようにしたのだが。

ペ・リユロ（以下リユロ）「ほう…。つまり貴様らは我々に支配下に入れと？」

クアゴア族の氏族王ペ・リユロは殺気の入り混じった視線を放ちながらそう言った。種族を束ねる者として冷静沈着を装っているが、配下を10匹以上殺した相手だ。その声と殺気交じりの視線はどの様に報復してやろうかという意図が伺えた。

闇「何と言うか、殺気や良くないことを考えてるってことがすぐわかるな…。リアルではこんな感覚感じなかったのに…。まさか種族が変わったせいか？そういうえば死霊Ⅱ「レイス」やスペクターⅡ「守護霊」は敵の感情を、特に怨念を感じ取り近づいたり吸い寄せると聞いたことがあるが…」

言葉には出さないが、白金真理華としての感情は残っていても精神は確実に新しい体に引っ張られている。そう感じながらも悩みすぎて隙を作りすぎて逃げられないよう気を引き締める。

闇「ええ。はつきり申し上げますがあなた方では我々には勝てません。我々の戦力は逃げ帰った手下からお聞きしていると思えますが」  
リユロ「ふつ雑魚を数人捻ったくらいで慢心しているのか？貴様が闘ったのは偵察兵、我が種族からすれば弱いほうだ」

闇「でしたらこういうのはどうでしょう。あなたがたの主力と呼べる軍隊とこちらの全戦力を戦わせてみるというのは？」

提案した直後シャルティアから横やりが入った。

シャル「お待ちを、至高の御方であられる闇信刃様がこのような3

0LV以下の雑魚を相手にするなど…御手を煩わせるような相手とは思えませんし、もし万が一のことがあれば…」

闇「もし仮にお前がやられるような相手が居たら、どうあがいても勝てぬ。撤退か死しか無かろう」

会話に一区切りが着くとドスの利いた声が響いた。

リユロ「オイオイ：俺様を無視しておしやべりとはいいい度胸だな」  
シャル「至高の御方に対して殺気交じりの視線を向けるとは…」

闇「落ち着きなさいシャルティア、失礼。それで返答は？」

リユロ「…ふざけるなど言いたいが貴様らが並みの兵士では勝てないことも事実。こちらでも損害を出したくないので受け入れよう。但しこちらの人数は主力だけでも1万はいるが良いのか？」

闇「1万でも10万でも構いませんよ。ああつひとつ忠告が、闘うのはシャルティア一人です。我々はこの広場にくく4つの道に配置させて貰います。」

リユロ「ほう…そりやどういことだ」

リユロの顔に浮き出た血管がピクピク痙攣している。イヤー、ここまで解りやすい人、嫌いじゃないな。って人じゃないけど…。いや、それとも人じゃないから好感を覚えるのだろうか…。

闇「もしシャルティアに勝てたら私たちはあなた方から完全に手を引くと約束しましょう」

私にかつと笑って答えた。(エレメンタルは顔がオリンピックの聖火みたいなものに緑金色の目の形をした炎がくっついていてだけで笑顔かどうかは目型の炎の変化で判断するしかない。ぶっちゃけ解らない人の方が多い)

幸い話はまとまりクアゴア族主力4万匹VSシャルティア+エルダーリッチ×5+デスナイト×5と相成った。

とはいえ私とデスナイトとエルダーリッチは逃走防止のため待機しているだけで実際闘うのはシャルティア一人なのだが…。

結論から報告すれば手こずったのは逃げて来るクアゴア兵士の始末でした。

開始時はポ・ラム族とズ・アイゲン族の計2万がシャルティア目掛けて襲い掛かってきた。

しかしシャルティアは素早く鎧に着替えてスポイトランス一閃。それだけで3匹のクアゴア族の兵士が一瞬で（0・1秒で）弾け飛んだ。こちらの獲物が大きいから連続攻撃はできないと踏んだのか、ひるむことなく襲い掛かってきた。非常に統率が取れている。優秀な軍隊だなと感心したが相手が悪すぎた。

クアゴア族の兵士の平均レベルが（あくまでも私が測った時は）15。対してシャルティアは100LVの信仰系魔術師で肉弾戦にも長けた階層守護者最強の攻撃力を誇る（あくまで総合的な攻撃力だけ）。その為基本スペックに差がありすぎて勝負にならないのだ。敵が一回攻撃する間にシャルティアは4回はスポイトランスを振れる。つまり敵が爪を一度振り下ろす度に前後左右合計10〜12匹葬れる事になる。敵の攻撃も50匹に一匹位は当たるがダメージが全く無かった。

2時間もしないうちにズ・アイゲン族の9割とポ・ラム族の5割が蹴散らされた。

ペ・リユロ氏族王は驚きすぎて開いた口が塞がらなかつたそうです。

欠伸が出そうな状況の中（この体は呼吸もいらさないのだが）式式炎雷さんから「伝言」が来た。内容は現在ヘジンマールという氷竜から情報を聞き出し敵の戦力とボスは全面戦争を望んでおりボスを倒さない限りこの戦いは終わらないから相談したいというものだった。

モモ「そのままボス戦まで行っていいと思いますよ」

闇「一応は計画通りに行ってますし」

式式「ただ問題は敵の首領がどの程度の強さかという事ですが」

その後、ヘジンマールが18レベルなら敵の首領が80LV以上という可能性はかなり低いと考えていいと、これからこっちも佳境に入ると話して通信を切った。

案の定全体の6割以上をシャルティアに殺され、彼らは目標を私たちに切り替えた。



バフ効果のあるペ・リユロの咆哮で若干ステータスと肝がアップしていたが、ついに兵たちが怖気づいて私とデスナイトたちに半々ずつ攻めて来た。

闇「はあ…。まあ私たちを相手にするほうが楽だからな…。」

私は敵の判断に称賛して迎え撃った。生命の略奪Ⅱライフサクシオンを食らった相手はミイラのようになりそのまま崩れ落ちた。

敵は其れを見た途端怖気づいて攻撃が止まった。

結論から言えばこの反応には助かった。何故なら私自身がその結果に驚き、数舜硬直したからだ。

闇「あれ。ライフサクシオンってHPと経験値を奪うだけじゃなかったっけ？ユグドラシル時代は80LVのプレイヤー相手でも一割程度しか削れなかつし、8日前の検証で武人武御雷さんにやった時も3〜4%しか削れなかつたしな…。（しかもその後の反撃でHPが1/4以上持つてかれたし）」

その後の戦闘はお粗末なものだった。私と敵は同時に我に再び爪や牙で攻撃してきた。私はライフサクシオンやマジックサクシオンでは隙が大きすぎると見て剣を抜いて応戦した。不思議なことに恐怖心は無かった。リアルの私ならこんな化け物の大群に襲われたら震えて動けなくなるだろう。しかし目の前の敵は体長数cmの小動物が背伸びをしているようにし感じず、おまけに呆れんばかりの遅さだ。人間種だったら欠伸を噛み殺すのに一苦労だったろう。襲ってきたクアゴア兵士は一匹も逃がすことなく斬殺した。デスナイトとエルダーリツチの場所も同様であつさり撃退できたらしい。

次に最後の主力、プ・ランデルをぶつけてきた。流星は精鋭というのか攻めて来る前に咆哮だけでなく第1位階魔法で全員身体能力を強化してからシャルティアに襲い掛かってきた。確かに先の二万とは違い今度はマジックキャスターもいた。第2位階までしか使つてこなかったのでダメージは無かったが。

最も結果は9割以上の殺害の後降伏した。

クアゴア族とフロストドラゴンを支配下に置いた我らアインズ・ウール・ゴウンはその後モモンガさんと呼んで盗賊系レアアイテム「魔神開錠石」(あらゆる鍵を開錠できる。回数が9回しかない)ので注意。今作では後6回)を使い城の金庫を開けて財宝を調べるというドキドキイベントを終え、フェオ・ジュラに戻り、報酬と今後の付き合いについて相談した。

「3月13日午前11時半 ナザリック地下大墳墓 第9階層 執務室」

モモ 「ご苦勞様でした。大金星ですよ」

現在私こと闇信刃はナザリック地下大墳墓に帰還しモモンガさんから7人と今回の騒動の報酬を精査していた。

※最も守護者らには「以後軽はずみな外出は厳に慎まれますよう」と威圧感たっぷりと言われてしまった。特にセバスはたっちさんが怒った時と瓜二つだった。そういう所は似なくていいのに：やはりNPCには創造者の性格や設定が色濃く反映されているようです。

クアゴア族とフロストドラゴンの戦いが終わりフェオ・ジュラに帰ってからはある意味戦争以上の騒動が起きた。

ゴンドさんが摂政会に話を通し証拠としてオラサーダルクの頭部とクアゴア族の精鋭兵士の比較的綺麗な遺体(戦闘終了後皆で話した時、モモンガさんとヘロヘロさんの提案でアンデット作成の為に運よく胴体を綺麗に切られている遺体を数十体(無限の収納庫IIインフィニティ・ハヴァーザック)に入れてきた。)を摂政会員全員に見せた。摂政会員は混乱したり泡吹いたり話し合いが再開されるまで一時間弱かかったが以下の状況に収まった。

内容：ドワーフ族の摂政会はギルド「アインズ・ウール・ゴウン」に対し以下の事を約束する。

☒：周辺国家(リ・エステイーズ王国、バハルス帝国、スレイン法  
国、カルサナス都市国家連合)に関してドワーフ族の視点で重要と判断した情報、あるいは強大な個人ないし集団の情報は必ずシャドウ

デーモンを通じて報告する。

☒：「ユグドラシルプレイヤー」に関する情報あるいはその事に詳しい者の情報は最優先で報告する事。

☒：財政を破綻させない程度の金銭を提供する事。

具体的には王国金貨100枚、帝国金貨100、法国金貨150、カルサナス都市国家連合金貨80、交易用白金貨40。

☒：各種鉱石及び装飾品並びにマジックアイテム及びルーンアイテムの提供。

具体的には銅鉱石、鉄鉱石、玉鋼石、銀鉱石、金鉱石が1000kg(1t)。白金鉱石、ミスリル鉱石、オリハルコン鉱石、アダマントタイト鉱石が500kg。

上記の鉱石を用いた装飾品(銅、鉄、銀、金等)合計100点  
金庫に眠っていたマジックアイテム2点、ルーン製の武器3点、ルーン製の防具3点。

☒：ルーン技術者3名は受け入れ態勢が出来次第「アインズ・ウール・ゴウン」が指定する地に赴きそこでルーン技術の研究をする。※補足としてここでの研究成果は「アインズ・ウール・ゴウン」に所有権が有り「アインズ・ウール・ゴウン」の許可無くその技術を国家ないし個人に流出させた場合、厳罰に処す。

闇「我としてはこの条件で納得しております。皆様はどうですか？」

へロ「私も式式炎雷さんの仕事には満足してます。というかモモンガさんの言うとおりこれ以上の条件を引き出すのは難しいでしょう。武御雷さんは？」

武人「拙者も異存はない。鉱山の権利全て等の条件はリアルとは違い食っていけなくなる。これ以上の要求はドワーフ族に「死ね」と言っているのと変わらぬ。」

モモ「女性の意見は？」

やま「ボクも異論はありません。というか物資の交渉とか外交とか良く分からなくて。そういうことは明美に聞くことにしてるんだ」

明美とは「山明Ⅱさんみょう」の本名です。

山「10万人分の助っ人料としては妥当だと思います。流石にそれ以上要求すると後々遺恨が残ります。ドワーフ族の生計を立てる手段を潰しては同盟という建前が使えなくなるし、今後の目標の為の資金としても妥当だと思います」

やま「今後の目標って?」

やまいこさんがきよとんとした顔で妹に問いかけたが当の妹もきよとんとした顔で返答する。

山「式式炎雷さんと闇信刃さんの情報を聞く限りアゼルリシア山脈の周りにはいくつかの国が有るんですね。どんな種族がいるとか解りますか?」

式式「周辺国家は基本的には人間の国らしいです。そういえば他にどんな種族がいるか詳しく聞いてませんでしたね。そうだモモンガさん、私とフェオ・ジュラにひとつ走り行ってくれますか」

闇「その必要は有りませぬよ式式殿。シャルティアに「転移門Ⅱゲート」をフェオ・ジュラに繋げてもらえばいい」

モモ「周辺国家の情報がないと動きようが有りませんのでひとつ走りしてきます」

その後シャルティアを呼んで理由を話すと「ああつモモンガ様とデート」等と不穏当な発言が聞こえたので前回行かなかったへ口へ口さん、やまいこさん、山明さん、武人武御雷さんも連れてフェオ・ジュラに行きそこで周辺国家とそこにいる種族について詳しく聞いてきた。

残念なことに周辺国家は全て人間の国だった。

やま「いやー、背が低いひげ面親父、まさにゲーム設定通りの生き物でしたね。ある意味安心しました」

へ口「幸いユグドラシルで学んだ通り大人しい生き物で助かりました。これからお付き合い出来そうですね」

武人「拙者らの姿を見たとたん泣き叫んで逃げたりいきなり斧で切りかかったやつもいたがな」

へ口「無傷だったんだからいいじゃないですか。それよりも今後の

付き合いを取りましょう」

初めてのナザリツク地下大墳墓の外にいる生物と接触し、皆興奮しながら話し合っていた。因みに私とモモンガさんは興奮した後沈静化してを2度体験し、ため息をつきながら一時間ほど話したところで私はこれからの行動について意見した。

闇「皆、少しよろしいか。そろそろ今後の事について話したいのだが…」

やま+へ口+武人「今後の事？」

モモ「大丈夫かなこの人たち…」いやいや、やらなきゃいけないことあるでしょ。てゆうかむしろドワーフ族の事より重要ですよ」

山「ちよつと、まさかお姉ちゃん解らないの？教師だから頭いいはずなのに」

やま「あけ・・・じゃなくて山明、ゲームとリアルは離して考えるものだぞ」

山「私たちにとつてもうこの世界がリアルでしょう。そうじゃなくて周辺国家の調査の事よ」

途端に「ああつそうだった」とやまいこさん、へ口へ口さん、武人武御雷さんが口を揃えて言った。うくんこの人たちに調査を任せるのは心配だなー。でも留守番は絶対断るよね。私だつてこの世界の町や村とか言ってみたいもん。正直この好奇心を抑えるのは難しいと思う。だつてユグドラシルプレイヤーの大半は“未知の開拓”を楽しむためにプレイしてるんだもん。

モモ「周辺国家に関して判明しているのは4つ。ひとつはアゼルリシア山脈に隣接する周辺国家は人間の国だという事。二つ目はエルフや亜人の国もあるにはあるが遠すぎて解らないという事、3つ目はリ・エステイーゼ王国とバルス帝国とスレイン法国は仲が悪いという事。最後はカルサナス都市国家連合は全ての国に対し中立を表明しているという事」

闇「しかも我々が知っているのは周辺国家の名前とどの国とどの国が仲が良くて悪いかという類の事に過ぎず、ユグドラシルプレイヤーはおろか強力な個人や団体に関してもあまりに無知です」

式式「そして様々な情報をローリスクで調べたり、この世界に有つて「ユグドラシル」にはないアイテムを入手するにはこの世界の国々で流通しているお金が必要不可欠。もちろんそれを可能にするためのコネクション作りにも、です」

山「問題は、だれが、どの国に、どうやって、潜入し調査するかです。そしてこの仕事はNPCにだけに任せるわけにはいかないという事です」

やま「それはどうして？」

山「いやいやお姉ちゃん何言つてんの？まさかお姉ちゃんこのままずっとナザリック地下大墳墓に引きこもってるつもり？私たちの姿と強さはゲームのままだけどここはもうゲームじゃないのよ。現実なのよ。一応一通りの隠ぺい工作は施してるとはいえこの状況で何の手段も取らなつもり？」

モモ「いいですかやまいこさん、へろへろさん、武人武御雷さん、落ち着いて聞いてください。いくらナザリック地下大墳墓の表層を偽装しているとはいえこの世界に人間や亜人がいる以上いつかはばれます。そんな時この世界に無知であれば戦いの時、相手に主導権を握られてしまいます。そうしてナザリック地下大墳墓を失った時、誰がどうやって責任を取るんですか？そして、拠点を失ったら私たちは明日からどうやって生きていくんですか？」

式式「それにこれは個人的な我儘だが、この世界の人々の暮らしがどういふものか是非見ておきたい」

ゴクリ、と何故か式式炎雷さん以外の人々が固唾を飲んだ錯覚を覚えた。

こうして人員の選考に入った。後にNPCが「何故至高の御方々が・・・」という質問があつたがギルメン全員が「人から聞くだけでなく自分で見聞きした情報と合わせることで真実が見えてくるから」といい肝心な所は「極秘事項だ」とお茶を濁していたことは此処では割愛する。

※何しろ全員が「この世界を冒険してみたい」と言つたらNPC達

が「自分たちが捨てられる」と要らぬ誤解をして混乱を招くことを皆知っているからだ。

## 第11話 幕間

モモ「さて、先ず最初の調査対象はこのナザリックがあるリ・エステイーゼ王国ですが、一つの国に集中したら情報が偏り偽りの情報をつかんでしまった時、大きな損害を被ることになります。それはリアルを振り返れば理解できると思います。そうですね、先生」

やま「それは間違いないよ。一昔前の大国。アメリカ合衆国や中国、ロシアなどは国民に自分たちの失敗は全て他国の陰謀だのなんだの言って責任逃れしていたから」

モモ「それに個人的には7人しかいないとは言えNPC達を含めればかなりの大所帯です。調査対象を一国に絞っては大所帯になって目立ってしまいませんか」

式式「それは私も危惧してます。皆さん考えてみてください。私も忍者が好きで色々調べて分かったんですが一つの国に強力な個人が複数時を同じくして現れたら誰だっておかしいと思いませんか」

その後議論は4時間続き山明さんが「眠い」という言葉を聞くまで気付かなかった。皆『未知の冒険』は大好きだからね。

翌日、昨日話したことをまとめてみた。その後モモンガさんの発案で『遠隔視の鏡』リモート・オブ・ビューイング』を、私（闇信刃）の発案でシャドウデーモンを使って数日調査した後、各国の調査に赴くことにした。

1. 調査対象国は複数。理想は3つ。
2. 現地調査の前にドワーフ族とフロストドラゴンから話を聞いて（クアゴア族は山から出たことが無く人間とも交流を持たないので何も知らなかった）さらにシャドウデーモンと『遠隔視の鏡』で国の様子を調査し、活動に入る。

この判断は正解だった。

モモンガさんと私の提案で調べた結果とんでもないことが判明し



た。

新たに【竜王国】【ローブル聖王国】【アーグランド評議国】【エルフ王国】が存在することが判明。これは確かに大きな収穫だった。特にカルサナス都市国家連合は各都市長の権限が強いものの横のつながりが帝国より強く、何か不味い事をした時全ての都市が敵に回る為潜入工作での国家転覆は不向きと思った。

しかし、翌日の報告はナザリックを震撼させた。

【スレイン法国】と【アーグランド評議国】に派遣したシャドウデーモンが殺されたのだ。派遣してたった二日目だった。

【スレイン法国】には先ず『遠隔視の鏡』で確認した4つの都市にそれぞれ一体ずつシャドウデーモンを派遣した。ナザリックには72体しかいなかったがエクステンジボックスに金貨4万枚を投じて新たに8体を作成。内50体を各国に派遣、調査に当たった。

ところが二日目。首都らしき場所の神殿の神官の影に潜伏するこゝとに成功したシャドウデーモンから連絡が途絶えた。

モモ「駄目ですね。「伝言」を使ってみましたが繋がりません」

武人「どうする、追加を派遣するか？」

闇「武御雷殿もお人が悪い。無駄に終わるのが解っておられるでしょう」

武人武御雷さんは冷笑を称えて返す。

式式「スレイン法国……。もしかしたら『プレイヤー』がいるかもしれませんね」

その台詞に皆は驚愕の表情をしたが直ぐに「ああ確かに……」と納得した。そう考えれば全ての謎が解ける。

闇「スレイン法国……。確か亜人や異業種に対抗すべく人類の団結を唱える宗教国家。現時点での接触は危険すぎる気がするが、皆々様はどう思われますか」

10分程議論したがやはり結論は同じ。【スレイン法国】にはノータッチという方向でことになった。まあそうなるよね。いくらリアルより文明が遅れてて身分証明が雑とはいえシャドウデーモンに気付いたという事は人間種に変装して潜入した時もあるリスクが非

常に高いと考えていいから。わたしだってそんな場所には潜入したくは無いよ。何か月も隠し通せる自信が無いから。せめてナザリツク地下大墳墓を表に出せる状況になるまでスレイン法国にこちらの存在は悟られないほうがいい。プレイヤーが潜伏していると思しき国家と情報が不十分な状態で事を構えるわけにはいかないから。

次に「アーグランド評議国」だ。ここは5匹の竜が評議員として政治を動かしてる真正銘亜人と異業種の国だがここも評議員に憑りついたシャドウデーモンが直ぐに見破られ殺されたため『プレイヤー』の存在が懸念され、調査は保留となった。個人的には評議員の竜に会ってみたいけど…。

打って変わって気になる国は竜王国だ。気になる都市が4つ有り、首都の役人の話から現在この国は亜人の集団の侵攻を受けているらしい。本来拠点となる町や村がたくさんあるらしいが防衛線らしい3都市から先の村や町は既に獣人の占領下であり、住民が皆餌になっ  
てるらしい。

やまいこさんとへろへろさんは間違いなく戦争に巻き込まれるからやめたほうがいいと言ったが、式式炎雷さんと武人武御雷さんがここには絶対行くべきだと主張した。理由は戦時下なら間違いなく傭兵を欲しているはず。なら冒険者ではなく傭兵として雇われ活躍すれば国の中枢に潜入できるかもしれない、それは歴史が証明している  
と。

このセリフには7人全員が衝撃を受けた。確かに単純に市井に紛れて調べるよりも国の役職についた方がはるかに信憑性の高い情報が得られる。それは間違いない。それどころかその国の権力者をこちらの都合道理に誘導することも可能となる。

これには満場一致で賛成、派遣が決まった。

こうして、調査対象国とメンバーが決まった。

1. 調査対象国は【リ・エステイーズ王国】【バハルス帝国】【竜王

国】とする。

2. 派遣時期は【リ・エステイーゼ王国】【竜王国】が直ぐに。【バハルス帝国】は最初はセバスとソリュシヤンにナザリック地下大墳墓製のごみアイテム+ドワーフ製のアイテムを売らせた後、派遣する。

※時期をずらさない因果関係に気づかれる可能性が高い。

3. 【リ・エステイーゼ王国】【バハルス帝国】では基本的に冒険者として活動する。

その際装備は『聖遺物級Ⅱレリッククラス』以下の装備にする。これはゴンドの情報と周辺国家のモンスターのレベルからそれ以上の装備だと直ぐプレイヤーだとばれる為、不安でも可能であれば『遺産級Ⅱレガシイクラス』が望ましい。

4. 派遣するチームは以下の通りである。

・【リ・エステイーゼ王国】にはモモンガ、闇信刃、ルプスレギナ、ハルカ（闇信刃のNPC）

※セバスとソリュシヤンはバハルス帝国での商売が終わってから

・【バハルス帝国】にはやまいこ、山明、イース（山明の傭兵NPC）

※セバスとソリュシヤンは商売が一通り終わったら、王国に移動

・【竜王国】には式式炎雷、武人武御雷、神楽、ナーベラルを

※へろへろは商売が終わった後、ナザリック地下大墳墓に帰還

## 王国の冒険者たち編

### 第12話 現実の冒険者はゲーム程甘くない〜王国編

「3月25日午前8時頃 城塞都市エ・ランテル 街道」

ここは、隣国バハルス帝国とスレイン王国との要所となる境界に位置する、リ・エステイーズ王国領の城塞都市エ・ランテルだ。三重の城壁に囲まれ、その内部はそれぞれ3つの区画に別れている。

一番外の外壁に2か所、縦幅約8M、横幅約10Mの大きな門がある。本来敵に攻められた時、立て籠る目的で作られた門は精々直径5m以下のはずだ。（これは敵兵が一度に大勢入ってこられないように入られても広く戦力を展開できないようにする為だ）しかし、エ・ランテルは城塞都市。馬車に乗った商人や農民が毎日数多く出入りする為、道の中間に白線を引いて左側から入場し、右側から出られるように（現実の車道が石畳で出来た物をイメージして下さい）工夫されている。

一つ目の外壁の内側（外周部）は軍事系統の設備が整い、王国軍の駐屯所として利用されている。戦時、兵士たちや下級貴族達は此処に簡易テントを組み立てて寝泊まりする。※因みに宿代が無い農民や登録したての冒険者などは此処で一夜を過ごすのが当然安全は保障できない。それでもゴブリンやオーガが出現する可能性がある外よりは余程安全なので利用者は1日5〜20名いる。

二番目の区画は一般市民の生活の場。露店等の大小様々な店が立ち並び、居住区画にもなっている。

三番目は行政区画。都市の中核を担う場所であり、王侯貴族やそれに雇われた代官が寝泊まりする施設がある。戦時には作戦会議施設として利用される。

エ・ランテルの街道は財政上の関係で整備されているのは大店の前と行政区画の一部だけでそれ以外は外と同じ土で出来た道で雨が降

ると靴が泥でべちゃべちゃに汚れる。しかし道行く人々の声は明るく朝6時頃から夕方5時頃まで街道は多くの人で賑わい露店では働き盛りの男女が元気よく商売している。

ところがその日はいつもと少し違った。王都とは違い碌に舗装されてない街道を歩く4人の旅人に道行く人の目は奪われていた。

一人は女性だ。青と白を基調とした女性用の法衣。恐らく『神官Ⅱクレリック』だろう。真っ白なヴェールが付いた法衣帽子からはこの辺りではよく見かける茶髪が三つ編み状に二本肩にかかるまで垂れている。

だが、何より目を見張ったのはその美貌だ。自分達の頭にあった美人という概念そのものが間違っていたのではと思わせるほどの美しさだった。法衣の胸の部分を押し上げた平均値よりやや大きい胸が歩きたびにわずかに揺れたり、それでいて体の線が崩れない熟練の戦士を思わせる歩き方。彼女の整った動作のひとつひとつが、その考えに拍車をかける。

二人目は男性だ。身長180cm位の中世の時代には大柄な体型だ。体格は筋肉質のわりに少しやせ気味なので体重は80kgより下と思われる。

顔は痩せ型の体格に反して偉丈夫と言った面持ちで右目に縦方向に頬まで続く傷があり眼帯を掛けている。髪は珍しい水色で染めているのかと思えば根元まで水色であり地毛だという事が伺える。体は鉄等級〜金等級までが良く身に着ける大型の猛獣の毛皮を着けた『硬革鎧Ⅱハードレザーアーマー』を着用し、靴は金属のプレートを付けた毛皮のブーツを着けている。

武器は腰にブロードソードを一本だけ、しかも新品で使い込まれた形跡がない。鎧は使い込まれた感じなのになんかちぐはぐで冒険者になりたてなのか熟練者なのか判断が難しいが、顔つきは鋭くある程度の修羅場は潜っていそうな雰囲気を出していた。

三人目は性別不明だ。全身を漆黒の全身鎧で覆っているため、男か女かわからない。

だがどちらにしても、相当な金持ちであることは、全身鎧と背中に背負った二本のグレートソードを見れば明らかだった。何処かの貴族の道楽か、はたまた装備に見合った実力を持つ冒険者なのか。

最後尾の4人目は女性だ。フードを深めに被っており恐らくマジックアイテムであろう白い仮面を被っているため素顔は不明だが、マントの下から見える服を押し上げた胸部から辛うじて女性だと解る。

身長165cm位で、体格はこの時代の男子の平均値位だ。マントは前を閉じているが角ばったところがまるでないことから鎧は身に着けていないことが解る。

その4人組のリーダー格のフルプレートフルプレートの男は人類の歴史を思い出しながら考えていた。

中世ヨーロッパでは、馬車の馬が垂らす糞尿が道端に巻き散らかっていて強烈な臭いを放っていたらしいから、ここも似たようなものなのかと悪いほうに考えていた。

が見る限りでは汚物は無いし、臭いだって普通だ。(鼻はないけど)

正直、あまりにも酷ければ他の都市に移動しようと思っていたので助かったな。と。

この異常な組み合わせの4人組は衆目を集めながら「エ・ランテル冒険者組合」と書かれた建物に入っていた。木造の5階建てで一階は地震対策なのかレンガと鉄柱で補強されている。

その建物内部には様々な人間がいた。

頭には鎖帷子の付いた鉄兜に体は革鎧に鉄板を貼り付けた鎧と恐らく鉄製のメイスを持った戦士風の男。禿頭で白衣を纏った恐らく神官の男。緑色のとんがり帽子にローブを羽織った木製の杖を持つ目元のきつい女性は恐らく魔法詠唱者「マジックキャスター」だろう。

一般人に比べ背は低いがロングボウを背負い革鎧と革の兜を身に着けた身軽そうな男は野伏か盗賊だろう。

全員がそうとは言わないが入り口付近やソファアに座った者、二階のテーブルに座った何人かはドアの音に気付き視線を向けた。

喧騒に包まれた建物は突如静寂に包まれた。テーブルやソファアで談笑していた冒険者がドアから入ってきた4人組を見て息を飲み固まってしまった。受付嬢と依頼のやり取りをしていた冒険者もそれに気づき何事かと後ろを向き息を呑んだ。

一番の理由が最初に入ってきた神官風の女性だ。法衣帽子を被っているため顔の全体が解りにくいが正面から見れば絶世の美女だという事が解る。身長は大体160cm位と平均レベルだが青と白を基調とした法衣を押し上げる胸は歩くたびに揺れ法衣の上からでも女性の色気が伝わってくる。

我に返った冒険者の一人が固唾を飲んでナンパをしようと声をかけようとするがそれはすぐ後ろから入ってきた3人組に阻まれた。

??? 「私の連れに何か御用かな」

その男の口調は静かだが明らかに威圧が感じられ、ナンパをしようとした冒険者はその威圧に押され冷や汗を流しながらたじろき黙ってしまった。

右目に眼帯をした戦士風の男、黒を基調としたフルプレート戦士、そして仮面とフードとマントで顔と体を隠した正体不明の人物。共に入ってきたことから仲間であると推察された。

その異様な雰囲気先頭を歩く美女に誰も話しかけられなかった。

其の四人組は受付らしき女性に近づいていき、冒険者になりたい旨を伝えたところやや呆然としていた受付嬢イシュペン・ロンブルは冷や汗をかきながら説明を始めた。

内容は、登録料として一人銀貨2枚と代筆代金銅貨5枚が必要だったり、冒険者の簡単な規則だったり、階級は『カッパー』『アイアン』『シルバー』『ゴールド』『プラチナ』『ミスリル』『オリハルコン』『アダマンタイト』という風に上がっていくこと。

俺たちはもちろんカッパの冒険者として登録されるなどの説明を受けた。

どの階級でどんな依頼が来るのか、又報酬の最低額などの質問をしたら受付嬢は「今説明しても意味が無いのでアイアンの昇格試験に合格したら話します」と言われてしまった。

イシュペン「最後になりますがあなた方はもうパーティーを組んでいると考えてよろしいでしょうか？。でしたら此処でチーム名を登録しますか？」

???「チーム名ですか」

イシュペン「今此処でチーム名を決めてパーティー申請しておけば次から依頼を受ける時一人ずつ書類を提出したり一人ずつ申請したりといった手間がかかりませんよ」

???「ムウ…。どうするジーク？」

ジークムンド（以後ジーク）「そうだな…漆黒の剣というのはどうだ」

その言葉を聞いた周囲がざわつく。不審に思ったのが表情に出たのを察したのか受付嬢が話しかけた。

イシュペン「申し訳ございません。そのチーム名はすでにこちらで登録されており、他の町でも同名で登録しているチームが一つ存在しています。既に同名で2チーム存在しているため規則上の事もありますし、なにより混乱を避けるためにも別の名をおすすめいたします」

???「直ぐには思いつかないな…。名前は後から変更可能ですか？」

イシュペン「可能ですがそれだと本人確認の為審査が必要になり時間がとられてしまいますが…」

ジーク「仕方がありません。チーム名は後日登録するとして銅等級で受けられる依頼を紹介していただけますか？」

紹介された仕事はたった3件。それも2件はドブさらいだった。

しかもドブさらいの報酬は必要人数は2人以上で報酬は銅貨80枚。もちろん調査費用が引かれるので手取りは銅貨64枚。（エ・ラ



ンテルの冒険者一人の生活費は一泊二食で銅貨10枚。この時代は貴族は1日3食。平民は1日2食)

流石にそれとは思いい、取り敢えず荷運びの依頼を検討するという方向で今日は宿を探すことにした。受付嬢の話では割のいい依頼は朝早くから来ないとすぐ無くなってしまいうし3〜5日に最低1件は良い依頼が必ず来るといっているので明日の早朝に期待したいものだ。

4人組の新人冒険者が組合所から去った後、堰を切ったように組合内の人々が話し始めた。話題は当然先程の4人組である。

冒険者A「ナニモンだあいつ等…。知ってる奴いるか?」

冒険者B「いや…。あれだけの実力者が王国に居れば少しは名が知れ渡ってるもんだが」

冒険者C「神官っぽい服着た女、スゲー美人だったよな。受付に居た時帽子取ったところ見たけど間違いない今まで見た中で一番だった。横顔だけだったがな」

冒険者D「髪が茶色だったな、この国にも茶髪がたくさんいるが多分他所から来たんだろ。あんな美人がエ・ランデルにいたらとっくに噂になってるか、欲深い貴族どもに攫われてるよ」

冒険者A「フルプレートの大貴族の三男坊か?」

冒険者E「俺は仮面を被ったやつが気になったね。多分女だと思うが…」

仕事にありつけなかった冒険者たちは昼前までその話題で時間を費やした。

ここはエ・ランテルの冒険者組合から500M程歩いたところにいる『旅の宿り木亭』。利用者は銅等級から金等級の冒険者で所謂なりたてから装備を揃えて手持ち無沙汰の中堅クラス冒険者が利用する。三階建てで宿泊部屋は二階と三階で二階が相部屋と個室で三階が二人又は四人部屋となっている。店長は一階の酒場に居り夕方16時頃から20時頃まで冒険者たちが軽食や安いエールを呑みながらだ

べつっている。24時間明かりが消えない21世紀の繁華街とは違い夜間警備の衛兵以外は21時頃までには寝てしまう。21時以降騒いでいる奴は寝ている冒険者たちが起きて怒鳴って来るからだ。ましてや殺人事件など起こしたら情状酌量の余地があっても冒険者資格を剥奪されてしまうからである。(ちなみに王国の法では情状酌量の余地があれば1〜2年間の地下牢暮らしor鋤山送り※生存率50〜70% 悪質な計画犯罪ならば死刑)

午前9時半頃その宿のウエスタンドアが開き一階の酒場でだべっていた冒険者たちの視線が自然と集まる。どの客も仲間になるかもしれない相手の品定めが癖になつてるからだろう。

入ってきた客は4人組だった。先頭はフード付きの厚手のマントを羽織り仮面をつけた怪しき十分の人間?だった。フードを深めに被り、仮面をつけていたため表情は読めず、マントも厚手の為性別も不明だ。武器は背中の中腰回り辺りにマント越しにかろうじてわかるふくらみと腰に下げている一般的な長さの剣があることから剣士か野伏か盗賊、あるいはマジックキャスターか意見が分かれる所か。

二人目も性別は不明だった。黒を基調としたフルプレートで覆った戦士だったからだ。さらに驚いたのは体格だ。エールを呑んでいた客の中に盗賊がおり、ダンジョンや森などで罨や木々の影に隠れた穴や崖などを発見しながら進まねばならないので地形や相手を観察する能力は鍛えている。後にその男が言うにはその戦士の身長は明らかに2?近くあったという。(正確には196cm)リ・エステイゼ王国の男子の平均値が158cm位だから190cm以上の体格はかなり珍しい。背には2本の両手持ちの大剣に紅のマントで肩と背中を覆っている

三人目は傭兵風の男だ。水色に見える髪に右目の傷に眼帯。少し痩せているようにも見えるがよく見ると筋肉が引き締まっている。かなり鍛えてる証拠だろう。胴体には硬皮革鎧「ハードレザーマー」、武器は新品の柄のダイヤ型の宝石が目につくブロードソード。銀等級〜金等級によく見られる戦士もしくは野伏だ。

4人目は神官風の女だ。神官の制服とも言える法衣帽子に青と白

を基調とした法衣。なにより正面から見れば100人中90人以上が美人と答えるだろう。法衣の上からでも解る発育した胸と腰の括れと尻は男の視線を集め情欲を駆り立てる。

何と言うかちぐはぐながらも個性的で珍しい組み合わせだった。

4人組は集まる視線に気づきつつも気にしない様子で真つ直ぐカウターの店長と思しき男の所へ行った。

その男の顔立ちは精悍と野獣の中間位で、右頬と左側頭部に傷がある40代後半から50代前半の年季の入った顔立ちだ。

頭部は坊主頭に見える程短く刈り込まれている。恐らく戦闘や料理を作る時邪魔にならないようにするためであろう。

袖を捲くり上げ、露出した太い二の腕には獣とも刀剣とも予測の付かない傷跡が幾つも浮かび上がっていた。

身長は160cm位とこの時代の平均値あたりだが店の人間というより傭兵に見える。後で組合に聞いた話ではこの宿の主人は元金等級の冒険者で、引退後組合から頼まれて初心冒険者のアドバイスをしているらしい。

宿の主人(以下宿屋)「初めて見る顔だな。宿なら相部屋で朝食付きで一泊5銅貨。夕飯も食うなら10銅貨だ。飯はオートミールにウサギと大豆のスープとサラダだ。他におかずが欲しけりや追加で2銅貨。おかずは日替わりで豚肉か鶏肉か魚の塩焼きが出る」

??? 「4人部屋を希望したい」

宿屋「あんたら初めて見る顔だな…。銅等級「カッパー」のプレートつてことは今日登録したばっかだろ?」

??? 「正解だ」

宿屋「何故冒険者組合がこの宿を薦めたか解るか?」

??? 「さあ」

宿屋「ちったあ考えろ。無駄に年食ってんじゃねえ、早死にするぞ」宿の主人は怒鳴ったが前の4人組は全く動じていなかった。まるで駄々をこねた子供を相手にしているようだった。

宿屋「ほう…。肝は据わってるようだな。うちは二階に相部屋と個

室、三階が二人部屋と四人部屋だ。相部屋でなら他の冒険者と顔見知りになるチャンスがある。そこでお互いに顔売っておけばパーティーを組むきっかけになる。それには俺の店をもってこいだからだ。カツパーやアイアンならともかく銀等級「シルバー」になると野伏やマジックキヤスター等と組まないと達成できないような依頼が増えるからだ。・・・とはいえお前さんらは要らん世話のようだな」

??? 「ああ。御覧の通りパーティーメンバーなら間に合ってる」

宿屋 「はあ…。夕食はどうする？」

??? 「今日は遠慮しておく」

宿屋 「一人一泊朝食付きで7銅貨。前払いだ」

??? 「それで構わん」

フルプレートの戦士は腰に付けたポーチから金貨1枚を取り出しカウンターに並べた。

宿の主人はそれを噛んで本物の金貨であると確認するとそれを奥の机の鍵付きの引き出しに持っていき、すぐ近くに建て掛けてあった2つの鍵束とお釣りの銀貨9枚と銅貨72枚を持って客の戦士に渡した。

宿屋 「部屋は三階の奥の『305号室』だ。最後に言っておくが冒険者つてのは職業柄気性が激しい奴らが多い。トラブルが起こっても俺に頼るなよ」

そういつて階段が有る方向を親指で刺した。

一向が階段に向かって歩こうとすると先頭を歩くマントを羽織り仮面をつけた者に冒険者の一人がずいっと足を出してきた。

禿頭の男で、鉄板を貼り付けた革鎧(一般的に鉄鎧という)にブロードソードを背負っている。

同じテーブルに座っているその男の仲間と思しき者も下卑た笑みを浮かべてこちらを見ている。店の中を見渡すと何人かの客がニヤニヤしながら見ている。まるでこれから起こるイベントを楽しみにしているように。

4人組の一人、ジークと呼ばれた男がフルプレートの戦士に小声で話した。

ジーク「モンガー、どうやら連中喧嘩売ってるようだがどうする？」  
モンガー(以下モンガ)「しかも周りの連中の様子だとこれが初めてじゃないらしいな」

ジーク「ユグドラシルに似たようなイベントが確かあったと思う。確か酒場でさっきのマスターと似たような話の後、絡まれて勝負を挑まれ、戦闘力が認められたら特別な仕事を紹介してくれるやつ」

モンガ「俺もそう思った。恐らく通過儀礼と言うやつだろう。むしろアイアのレベルを凶るのに丁度いい。俺が行く」

そういつてモンガーと呼ばれた男は無造作に歩いて行って足を出した冒険者(アイアのプレートを下げてるからほぼ間違いない)の足を軽く蹴った。何気に力加減に気を使った。もし一般人レベルだったら普通にぶつかっただけで骨折ものだからだ。

足を払われた男は待ってましたとばかり立ち上がり不良が威圧するように絡んできた。

客A「オイオイ痛えじゃねえか。どーしてくれんだおい」

モンガ「ははっ悪い悪い、こんな狭い場所で足を広げるとそうなるから気を付けたほうがいいと思うぞ」

客A「金払えよ、それとも仲間が出すか、あーん。ん…どうやらそっちの女にやさしく介抱してもらうしかねえな」

その台詞を聞いた直後モンガーとジークがクククと忍び笑いを漏らした。

客A「オイオイなに笑ってんだ、あーん」

モンガ「いやいや許してくれ。余りにも雑魚にふさわしいセリフに笑いをこらえきれなかった」

そう言うモンガーは突然その男の胸倉を掴んで持ち上げた。

見物を決め込んでいた者たちは驚いた。持ち上げられている男はランクこそアイアンのとはいえ鉄鎧と鉄の剣「ブロードソード」で武装している為総合体重はかなりある。(60+7+4||71kg)それを片手で持ち上げるのだから相当の腕力だろう。最も経験を積んだ冒険者なら二本のグレートソードを装備しているのを見れば人並外れた臂力の持ち主だと気づきそうなものだが。

そしてそれに気付かなかった事がこの冒険者最大の過ちだ。

モンガ「貴様相手なら遊ぶ程度の力も出さなくて良さそうだな」

そういつてその冒険者を投げ飛ばした。

その男は大きく放物線を描きながら赤髪の冒険者が座っている机に激突した。

モンガ「さあ、次は誰だ、時間を無駄にするのも馬鹿馬鹿しい。かかって来るなら早くしろ」

モンガーはそう言ってさっきの冒険者と同じテーブルに居たアイアのプレートを下げた二人を睨んだ。

二人がたじろいたあと、突如「うつきや——」という女性の悲鳴が聞こえた。

その後その女冒険者がポジションの弁償をしろと言ってきて絡んできた奴に請求しろと言ったら「銀貨一枚と銅貨50枚が毎日飲んだくれてる奴らに払えるはずないわよね」と言い女神官と仮面の魔法詠唱者が殺気を出し始めたので仕方なくユグドラシル産の下級回復薬「マイナーヒーリングポーション」を渡して三階の部屋へ向かった。

新人冒険者たちが上の階に上がった後、一階の酒場では先程の新人冒険者の事で持ちきりだった。

冒険者B「オイオイ、あいつ等誰だ。おい、この中で知ってる奴いるか」

冒険者C「多分王国人じゃないと思うぜ。この町のモンなら噂になってるはずだ」

冒険者D「俺は二年前まで傭兵だったがあんな連中は聞いたことねえな」

冒険者A「やれやれ、また俺らの頭を飛びぬけてく奴らのお出ましか」

この話題は1時間程で一旦切れるが一週間後に再び炎上することになることをまだ誰も知らない。

モンガ「ジーク、ハルナ、索敵はどうだ？」

ジーク「問題ない、少なくとも聞き耳を立ててる奴はいないな」

ハルナ「同じく」

そういつて不可視化看破の魔法をかけたハルナが念のためドアの外と窓（この時代にガラスは無く木製の戸を使っている）を見まわした後盗聴防止のマジックアイテムを起動しモンガーとジークはベッドに座り、神官レギナと盗賊ハルナは直立不動となった。

モンガ「さて、皆お疲れの所悪いが早速この町での活動の相談だ」

ジーク「やはりリーダー役が様になってますね盟主」

ハルナ「しかしよろしいのですか、モモンガ様、闇信刃様。至高の御身がこのような場所に滞在されるなど」

モンガ「そのようなハルカ。我々はまだ一番格下の銅のプレートだ。最下位の者が上位冒険者と同じ宿に泊まったら奇異の目で見られる。確かに名声を得るのも目的の一つではあるが周囲の反感を買うような行為は慎むべきだ。それに出世するまでは身の丈に合った生活というのも悪くない」

レギナ「発言をお許しください。あの不快な女はどういたしましたしもう」

ジーク「ルプスレギナ、彼女は我々より格上のアイアンのプレートだ。後輩たるもの多少は顔を立ててやらねば悪い意味で名が広まってしまう」

そう、彼らこそ我らがアインズ・ウール・ゴウンのメンバーの変装した姿である。

ナザリック地下大墳墓での相談の結果、モモンガと闇信刃は王国でこの世界の情報収集と貨幣の調達の為に人間の冒険者に扮してここに来ているのだ。しかし、冒険者が一人二人のパーティーでは如何にも不自然。さらに万一強者に接触し敵に回った時の為に盾となる人材も必要と考えルプスレギナと式式炎雷さんが41人の人造人間メイドの一人を改造して作ったハルカをお供に連れて来たのだ。ちなみにハルカの外見と能力値設定には私も一枚噛んでいたため私も自身の創造主として認知されていたためなついてくれた。

しっかしあれが冒険者か…。組合という組織に管理され依頼はモ

ンスター退治や荷物運びばかり…。予想以上に夢のない仕事だ。ユグドラシルの冒険者組合が出すクエストはダンジョン攻略や希少な薬草や鉱石の採取だったのになー。まあ現実化すればこんなもんかー。

闇信刃はそんなことを考えつつもモモンガに意見した。

闇「取り敢えず今後の行動方針ですね。諸君らも良いか」

ルプスレギナ+ハルカ「はっ」

そういつて直立不動から片膝をつき玉座の時と同じ姿勢になる。あのな…。

こうして意見のすり合わせが始まった。優先順位は以下の通りである。

1. この世界の強者の情報を得るための情報網の構築。特にユグドラシルプレイヤーの情報は最優先。

2. この世界での金銭の確保。

概ねこの二つである。

モモ「しかし此処で問題が生じている」

闇「わかってます。手持ちの金でいつまで生活できるかという事ですな」

そう、ドワーフ国から取引でもらった王国の貨幣は金貨100枚。しかも3枚ほどエキステンジボックスに投げ込み、更に万が一落としたり盗まれたりしたときの事を考慮し、50枚をナザリックの宝物殿の隅にメモ書きと共に置いて30枚をモモンガさんが、私がお小遣いとして17枚貰ってる。しかも明日、もう一泊分のお金を払ってから出かなくてはいけないため、生活費を稼ぐことは急務だった。

モモ「さて、最後にお前たちに質問したい。人間をどう思うか」

ルプス「おもちゃっす」

ハルカ「能力値が低くても様々なスキルや知恵を使ってくるので厄介な存在です」

即答するルプスレギナに一抹の不安が残るが、一体どうなることやら……。

ひとつため息をつくると私と盟主はルプスレギナとハルカに部屋で



待機を命じ商店街を見て回ることにした。市場にある冒険者御用達の店にどんな商品が売られているかの調査もそうだが盟主とプレイヤー同士でナザリックの支配者ではなく一人の人間として気晴らしがしたいというのがメインだ。

2時間程買い物を楽しんだら私と盟主はナザリックに戻ってトレーニングの続きだ。私は聖騎士兼マジックキャスターとして、盟主は前衛の戦士として…。（実はこの体でのトレーニングは17日〜24日までしかやってない）

## 第13話 幕間

3月16日 午前5時半 ナザリック地下大墳墓 執務室

私こと闇信刃は現在重大な悩みを抱えている。

冒険者の自分は男になるか女になるか…。話は一昨日前に遡る。

転移から14日後の3月14日 午後2時半 ナザリック地下大墳墓 円卓の間

モモンガIIモモ「せっかく新しい冒険するんだからおれ、戦士やってみたいです」

この唐突な一言は他のギルメンを困惑させた。

現在エクステンジボックスで余分に召喚した伴蔵やシャドウデーモン、そして恐怖公の眷属を周辺諸国へ派遣し大まかな情報を調べている。未開の地の調査ならレンジャー兼ビーストテイマーのアラが適任なのだが彼女はトブの大森林とアゼルリシア山脈の調査を任せている。現在はナザリック地下大墳墓の周囲5kmと全体の2/3の調査が既に終わっており、最後に残った北部が終わり次第アゼリリシア山脈の調査に取り掛かるとの報告を受けていた。

そこでNPC達が動いている間“だれが”“だれと”“どの国に向かうかという話に入った。  
“条件は以下の通りである。”

1. 一人で調査に当たるのは絶対に避けること。
2. 必ずNPCを一人連れていくこと。
3. 最低三日に一度は定時報告をすること。前の連絡から75時間たっても連絡が無く、此方からの応答に応じなかった場合、非常事態と判断する。

一つ目は言わずもがな。一人では対処できない問題が多すぎるしこの世界の生物の戦力はこちらより弱いというのは分かっているが、強力な個人や集団に遭遇し敵対した場合、とても一人では逃げ切れなからだ。

二つ目はもし、上記の状況に陥った時、生存確率を上げる為殿が必

要な時、盾にする為である。これはNPCを愛するメンバーから反対意見が入ったが、NPCは生き返らせることが出来ても自分たち『プレイヤー』はどうなるか分からない上、実験したくても万一蘇生魔法等が『プレイヤー』に通じない可能性がある以上怖くてできない。そして何より大きな理由はNPC達からの懇願があったからだ。「お一人で行くというのなら例え殺されてもおとめします」「最低でも一人僕をお連れ下さい。」「どうしても無理と言われるのならこの場で我らの首を切り落として頂きたい」と言われては妥協するしかない。NPC達に蘇生アイテムが効くのは確認済みだ。それに私と式式炎雷さんは自分のNPCと旅をしてみたかったしね。

そんな訳でまずは連れていくNPCの選定に入った。

モモ「そんな訳でつれていくNPCなんですが…。」

闇十やま十山「自分のNPCを連れていきたいです」

取り付く島もない。

へロ「待つて下さい。皆さんの気持ちは解りますがそれだと色々の不都合が生じるようになります」

闇「不都合とは？」

へロ「先ずやまいこさん、ユリはダメです」

やま「ど、どうして」

へロ「何故つてホントに判らないんですか？我々が調査に向かう先は人間の町なんですよ」

やま「そりや何度も聞いたよ」

へロ「自分で作ったのに忘れたんですか？ユリ・アルファはデュラハンなんですよ。人間に見えたのに突然首が浮いたりしたら受けるかもつて言ったのやまいこさんでしょ」

やま「ちよ、チヨーカー外さないようにすれば…。」

へロ「我々は冒険者として活動するんですよ、モンスターの攻撃を受けた衝撃で首が取れてそれを別の冒険者に見られたら身の破滅ですよ。その時点で冒険者としての社会的地位は断たれます」

…うん。そりや誰も言い返せないよね。一日二日ならともかく周辺国家の調査と資金稼ぎが済むまでどれだけかかるか解らない。

仮に一年とした場合、前衛職と料理人とメイドの職業しかとつてないユリが前衛職以外をこなせるとは思えない。ユリが人間じゃないとばれるのは時間の問題だよ。

皆の説得もあり山明さんと山明さんの連れてきたNPCのアシエリート君と一緒にという事で納得してくれた。

次は式式炎雷さんと武人武御雷さんだ。

先ず悩んだのは武人武御雷さんだ。何しろ自作のNPCはあのコキュートスだ。『人化の指輪』は2つしかなく一つはやまいこさんと武御雷さんが使う予定なので早々にナザリックに残すことに決定した。どの道ナザリックを空にはできない。階層守護者は最低でも二人は残しておかなきゃね。

次は式式炎雷さんだがさつきとは打って変わって即採用された。理由は種族は違っても外見は人間で、ダメージを食らった場合ちゃんとした赤い血が出るし、何より攻撃魔法は無論の事「伝言」が使えるし人間の街に溶け込むのに必要な偽装系魔法も使える。マジックキャスターとして強すぎ無い為この世界ではそこそこ優秀なマジックキャスターとして通用する。

次に挙げられたのは私のNPCである第一階層守護者「神楽」だ。この世界には自分たちの知らないスキルがたくさん存在する。もし耐性突破型のスキルや動きを封じるスキルが存在する場合、式式さんは紙装甲なのでたとえ拘束時間が数秒であっても4回喰らえば死んでしまう。式式さんのスキル「金剛の術」は一日3回しか使えず1回でも使うと回数が回復するのは24時間後だ。(確認済み)

神楽は武人でありタンク役として適した職業構成をしている。式式さんはもちろん防御力に不安がある人？のお供にうってつけだ。

そんなこんなで式式炎雷さんのお供はナーベラルと神楽、武人武御雷さんのお供はオーレオール・オメガが担当することになった。その間ナザリックの転移システムの管理は私のNPC「ティファニア」が担当することになった。更にオメガは後方支援に特化している為戦闘で役立つかという意見が有り、せっかくだからワールドアイテム「魔神の杖」を持たせることになった。これは第一位階第十位階の

魔法をMP消費無しで使えるというものだ。これは私が持つてマジックキャスターとして活動してみようかと考えたがオーレオール・オメガは攻撃魔法が3つしか使えず、騎士系統の武器防具は装備可能だが物理攻撃力は精々半分だ。敵がプレイヤーでなくともレベル50以上だったら勝てる可能性は低い。そんな訳で持たせることになった。勿論この世界のマジックキャスターは第6位階が限界らしく更にどのマジックアイテムにどんな魔法が込められてるか看破できる魔法もあるらしいので(ロック談)アイテム専用の隠ぺい魔法が込められた永続系マジックアイテムを持ち、非常事態に備え10位階の魔法も込めるがこちらが許可しない限り第5位階以上の魔法は決して使わないように厳命した。最も最大の理由は式式炎雷さんと武人武御雷さんならオーレオールのスキルと魔法で強化すればユグドラシルでも勝てるプレイヤーは指で数えるくらいしかないからだが…。

そんな訳でそれぞれが連れていくメンバーは決まった。しかし肝心の私は今大きな決断を迫られている。それは私の仮の姿の性別をどうするかである。

私の種族「幽霊IIレイス」にはこの種族又は、「傀儡師」の職業を取得しているものしか使えないアイテムが存在する。それが人形だ。私の種族はこの人形に憑依してその人形に設定されている能力が使えるようになるのだ。勿論憑依すればレイスとしてのスキルも本来の職業も使用不可能私はユグドラシル時代一時期このアイテムの製作に没頭した時期があった。

努力の甲斐あってか様々な能力を持つ人形が6体完成した。

男女3体ずつで戦士系、魔法詠唱者系など各種揃えている。全員美形で髪形も男子は水色のオールバック、赤茶色のロング、金髪のショート。体格も30代、20代の痩せ型筋肉質、10代のシヨタ系美少年。女子は髪形が藍色のロング、金髪の三つ編み、ストロベリーブロンドのツインテール。体格もボンキュッボンのナイスバディからロリっ娘まである。

盟主と武人武御雷さんは気づいていないようだが私はリアルでは女子だ。だから仮の姿も女にしたいのだが連れていくNPCも全員女子だ。だったら普通は女子のアバターを選ぶだろう。しかし我らが敬愛する盟主は30代後半の男性に見えるように幻術で偽装するらしい。盟主一人が男子では冒険者として名声を得た時、女冒険者を漁る好色家などという噂もたつだろう。ハーレム状態のパーティーが周囲にどう思われるかなど自明の理だ。人間とは事実に関係なくそう言う下品な話の方を信じようとする。それに私も男に扮してルプスレギナやハルカと一緒に街を歩くのも悪くない。

懸念があるとすれば情報収集だが幸いルプスレギナとハルカは話し方が明るく社交的であったため聞き込みなどは任せてよさそうだ。ギルメンとNPC二人一組で行動すれば悪い虫がたかってトラブルを招く危険も少ないだろうし今の話し方は変えたくない。リアルの引っ込み思案の自分に戻ってしまいそうで怖いのだ。

そんな訳で紆余曲折の末、男のアバターにすることにしました。女子のアバターは機会があればやってみようと思う。

職業構成は聖騎士系と生産系に特化した構成にした。あくまで調査と資金調達が目的であり、何より盟主が前衛でやりたいと言っているルプスレギナは「神官Ⅱクレリック」でハルカは忍者で式式さんが盗賊、アサシン、ガンナー、スナイパー等の職業も取得させていた。(本人曰くやっぱメイドの暗殺者に射撃能力は外せんでしよう。とのこと)

私が何をしたいかという一番は暗殺者系だが今はかつて一人だった私を救ってくれた盟主を守りたいというのと一度生産職をやってみたいと思い戦闘時は聖騎士だが実はアイテム制作のエキスパートというギャップが味わえるこの男の身体にした。

最も新しいボディは男なせいか慣れない感があったので、コキュートスに戦闘訓練を4日、副料理長に料理の訓練を2日、パンドラズ・アクターに錬金術の素材を見分ける訓練を一日つけてもらった。

## 第14話 初依頼〜王国編

3月26日午前4時25分 旅の宿り木亭

冒険者の朝は、というかこの世界の朝は早い。

リアルでは夜間には街灯があちこちで煌めいており夜からが稼ぎ時という店が数多く存在する。

しかし22世紀以降、一般人はゲームセンターかコンビニしか利用しない。スナックやキャバクラ、レストラン等は富裕層（日本では全体の16%）しか利用しない。一般人の食事は手料理など週に1、2回食えれば良い方で、ほとんどは味の付いたサプリメントと水で済ませているからだ。

農民は畑の世話や食事を使う水を井戸から汲みに行く為、町民は商品のチエックや料理の下拵えの為、そして冒険者は割の良い依頼を受ける為日の出と共に起きる。これは夜に明かりに使う魔法のランプや油を使って明かりを灯す道具の燃料が勿体ない為だ。何しろ値が張る為に大店でも21時には家族全員寝てしまう。

ここの宿屋の店主は日の出前に起きて朝食に出すオートミールを作る為の小麦粉を煉る。何しろ『旅の宿り木亭』の客層は銅等級「カッパランク」〜金等級「ゴールドランク」の冒険者で上位の冒険者と違い、指名を受けられる程の実績が無く、いつも組合で条件の良い依頼の取り合いをしている奴らだ。今日は昨日の夜から猪の肉と骨でだしを取ったスープを温めていた頃、宿泊客が下りてくる。

各々がカウンターに行き猪のスープに豆と小麦粉を煉った物が入ったオートミール、レタスとトマトに少量の塩を振ったサラダが乗ったカートを受け取り、空いた席に座って食べる。皆殆ど話さず黙々と食べていく。早く食べて冒険者組合に新しい依頼が貼られる前に行かなきゃならないからだ。

最初に食事を済ませた客がカートをカウンターに返しに行った時、階段が軋む音がしてふと階段の方を見て一瞬固まり何人かの客が食事の手を数舜止めた。昨日騒がせた4人組。モンガー、ジークムンド、レギナ、そして仮面の女ルカ（宿泊客はまだ彼女の名を知らない）

が下りて来たからだ。

※ここからはジークムンドこと闇信刃がお送りいたします。

3月26日午前4時。私とモモンガさんはアルベドとデミウルゴスに現在の状況を説明した後、頃合いを見て『旅の宿り木亭』の4人部屋に「転移門Ⅱゲート」で来た。そこで待機していた二人に声をかける。

闇「ルプスレギナにハルカ。おはよう、侵入者はいなかったかい？」  
ルプスレギナ（以後レギナ）「おはようございますモモンガ様、そして闇信刃様。ハルカが「野伏系Ⅱレンジャー」と盗賊系スキルを駆使して警戒しておりましたが侵入者はありませんでした」

モモ「まあ、貸し切りの部屋に入ったのがばれたらすぐにけいさ…じゃなくて衛兵？が飛んでくるし昨日の騒動を見聞きした連中ならそんな無謀はことばせんだらうよ。それより今日の予定だが…ハルカ、お前はどうすべきと思う？」

ハルカ（以後ルカ）「私はこの町に来た目的である情報収集に専念すべきだと思います」

モモ「ルプスレギナは？」

レギナ「私も同じように考えます」

モモ「その為には何をすべきだ？」

ルカ「私は昨日行った冒険者組合に行き、諜報活動すべきと判断します。難しい仕事があれば受けて名と顔を売っておくのも有効かと」  
レギナ「私は至高の御方々がおっしゃったように酒場で聞き込みをすべきだと思います。酒場は情報の宝庫だと私の創造主獣王メコン川様もおっしゃっております」

盟主は「ほう…」と感心した様子を見せた。私も今の発言は成長を期待できる返答だった。

闇「両者とも良い意見だ。だが惜しいな。今の意見はいずれ行う事だが現時点では時期尚早だ」

ルプスレギナとハルカは真剣な眼差しをこちらに向けた。その顔



は氣迫に満ちており至高の御方々の話を何一つ聞き逃さないという決意が伺えた。

闇「価値のある情報とはある程度の信頼が無ければ聞いても答えてくれないものだからだ。例えば見知らぬ人間からナザリツク地下大墳墓はどこにあるのかと聞かれたら貴公らはどう答える?」

レギナ&ハルカ「その者を捉えて情報を吐かせます」

モモ「なかなかの答えだがそのような人間がもしいたら必ず報告するよう」

闇「ではもしその人間が私と盟主が信頼を寄せる者だったら?」

レギナ「話していいものかどうか「伝言」で伺います」

闇「実によい判断だ。つまりは私たちが冒険者になった目的の一つ情報網の構築は相手を信頼させる何かが無いと不可能なのだ。そして我々には信頼を得られるような身分証のようなものは無い」

モモ「私からもいいか闇信刃。付け加えるなら我々はこの世界の事をほとんど何も知らない。何しろこの国の物価の相場も理解していないのだ。これではいずれ足元を見られ悪徳商人のカモにされてしまう。故に登録に身分証が必要ない冒険者や傭兵などの職業で実績を積み上げ、金と信頼を得る。そうすればおのずと有益な情報が入ってくる」

闇「我からもひとつ、ハルカは先程「難しい仕事をして名前と顔を売れば」と言ったが信頼は小さい仕事をいくつかこなして次に難しい仕事をこなすことが最も効果的で近道なのだ。それ以外の方法で信頼を得るにはさらに大きな労力が必要でありまた、目立ちすぎて周囲から目の敵にされてしまう。そもそも小さな仕事がこなせない者に大きな仕事を任せる者はいない。我らにとって目先の問題は小さな仕事を着実にこなし鉄級「アイアンランク」に昇格することだ。そうすればモンスター退治の依頼がもらえるからその時ナザリツクからレベル30位のモンスターを現場に仕掛けて見物人の目の前で倒して見せれば名声も高まり特例で昇格なんてこともあるかもしれない。だが信頼が全くない最下級冒険者では怪しまれて要らぬ詮索をする者が出てくるだろう。此処は耐えるべきだ」

私はNPC達をそう説明し、一階の酒場に降りて食事を受け取った。最も私と盟主は食えないから朝食はハルカたちに食ってもらったけど。

ちなみにルプスレギナとハルカには人間の町に居る時は偽名で呼び合う事を徹底させた。ルプスレギナはレギナ、ハルカにはルカと。

冒険者組合の扉を開けると予想通り多くの冒険者が詰めかけてた。来る人の三分の一は熱心に掲示板を見ている。ほとんどが長剣と小盾を持つていることから戦士系の職業であることが伺える。恐らくリーダーなのだろう。既に1組が他者を押しつけて割の良い依頼書を取り受付に持っている。早速自分も割り込んで見ようとするが自分たちはまだこの世界の字が読めない。一応ロックやゴンドに一通りの単語は教えてもらったが長文読解はとても無理だ。結論として依頼書で理解できる内容は報酬の金額とモンスター名(ゴ布林、オーガ、ゾンビ、ワームだけで他は無理)と銅等級で受けられる依頼かどうかだけで鉄等級以上の階級は読むことも出来なかった。最も現状では必要ないんだけどね…。

ジーク(ヤミシバの偽名)「モンガー殿今は無理ですね。幸いユグドラシル時代の古代語や暗号が解読できる眼鏡持ってますがこの混雑では落として割ってします可能性があります。実際ユグドラシルでは落としても割れたりしませんでしたが今はこの状況が現実になっておるからな」

モンガ「やむを得ません、見た所「金等級Ⅱゴールドランク」と「白銀等級Ⅱプラチナランク」の冒険者もいますし、新人の内は上位の冒険者の恨みを買おうと後々面倒でしょう。此処は待ちましょう」

レギナ「私が追い払いますでしょうか？」

ジーク+モンガー「今そういうことするとヤバイって言ったろ」  
突っ込んでから20分。ようやく空き始めた。まだ少し混雑しているが余裕で躲せるしユグドラシルではほとんど役に立たなかったが今では必須のアイテムを落として破壊することもないでしょうね。

うっかり女口調になってしまうのをこらえ掲示板を見た。

やはりろくな依頼が無いな。初心者だから仕方がないとはいえ昨日と同じドブさらいと荷物持ちだけだ。モンスターの中で一番弱いとされるゴブリン、スケルトン、ゾンビ、ジャイアントラット、食肉植物などの討伐も鉄等級からしか受けられない。

ジーク「モンガー殿、やはりポーターが一番ましな依頼ですな」

モンガ「上位冒険者の荷物持ちですか。正直『冒険者』の仕事じゃないと思いますけどね。預かった荷物を届けるとかならユグドラシル始めた頃受けたことがありますけど」

闇「奇遇ですな我もです」

ルカ「失礼ながらこのような依頼は至高の存在がお受けするような依頼ではないと愚考いたします」

レギナ「私も同感です。モンガーさんやジークさんが人間の荷物持ちなど…」

ジーク+モンガー「だからそういう仕事をこなして信頼を得るんだよ」

ジーク「嫌だと言つても来てもらう、万が一敵対関係のユグドラシルプレイヤーにあつたら盾が無いと色々と不味いからな」

レギナ+ルカ「至高の御方々を一人になどできません」

そんなやり取りがあつて『ポーター、人数は二人まで可、報酬は一日銅貨10枚、食事は依頼者持ち』と書かれた依頼書を受付に持つていこうとした時後ろから声がかかった。

???「それでしたら我々の仕事を手伝いませんか」

後ろを振り向くと一人が10台後半と30代後半、二人が20代前半と思われる4人組の冒険者がいた。

3月26日 午前5時10分頃 冒険者組合二階 談話室

私たちは現在別の冒険者チームに誘われ一つのテーブルに向かい合うように座った。

これは私たちにとっては幸運だったと思う。私はリアルで人の本質を見抜く目は訓練してきた。何故かと言うと私はリアルでは一応、あくまでも一応裕福な家庭で生まれたため貧困層の人間に絡まれて

騙され金品を巻き上げられることが多いのだ。そのためその人が信用に値するかどうか嘘を見抜く訓練を受けていた。(例えば特定の癖を探すとか、かならず儲かる、リスク無く大ヒットするとか言うやつは信用するな等)

しかし、目の前にいる者たちは真剣な眼差しで此方を値踏みしているようだった。こういう人間はこちらが信頼を損ねるような態度を取らなければ真摯に対応してくれる者たちだと長年の勘が言っている。社会人経験は10年足らずだけどね…。まあ、最終的な判断は我らが盟主が下すがその時は私の感じたことも伝えるつもりだ。

ちゃんと仲間の意見を拾い全体の気持ちと利益を考えた上で結論を出す。だからギルドメンバーたちは盟主を信頼しているのだ。

ペテル「まずは自己紹介を。私が【漆黒の剣】のリーダー、ペテル・モークです。左端に座っているのはチームの目と耳である「野伏」レインジャー」のルクルクット・ボルブ」

自分たちから見て右側に目を向けるとルクルクットと呼ばれた男が頬を赤くしてレギナに向かって手を振っていた。この土地でよく見かける金髪碧眼で背格好も160〜165cmでやや細身と平均レベルだ。顔つきは優男の様に見えるがルプスレギナに色眼鏡を使っている所から軟派な印象を受ける。服は布製の服の上に革鎧を装着している。その革鎧も野伏として動きやすいよう利き手の肩部分を外したりと手を加えてある。武器は背中に背負った「長弓」ロングボウ」と腰に下げたブロードソードと胸に下げた短剣。確かに典型的な野伏だ。

ペテル「続いて「森司祭」ドルイド」のダイーン・ウッドワンダー」  
続いてペテルは右側の男を紹介した。

くすんだ金髪と落ち着いた雰囲気を出す薄く開く切れ長の碧眼、短いが立派な髭を生やしている。体格は丸みのあるずんぐり体型だが太つてるといふよりどっしりとした感じがしており薬材で染まったのか薄緑色のハードレザーアーマーが良く似合う。長く戦闘をこなしてきた雰囲気がある。年齢は恐らく30代後半から40代前半だろう。食事がサプリメントで完全に栄養管理されているリアルでは

60代に見えるが栄養士が存在しない中世じゃあそのぐらいが妥当だろう。

ダイイン「よろしくお願いする」

挨拶はそつけないものだったが年長者故だろうか。

ペテル「そして最後はチームの頭脳、ニニヤ・ザ・スペルキャスター」  
ペテルがペテルとルクルットに挟まれた少年に左手を向けた。

髪は短く刈り込まれた茶髪。目鼻立ちは整っており青い目は人形のようにクリクリしている。年齢は恐らく10代後半だろうが身長が145cm位しかないから10代前半にも見える。よく見れば女性のようにも見えるがこれくらい年齢層は中性的な顔つきが多い。15歳以上でないと就業できないから10代前半は無いと思うが…。  
ニニヤ「よろしく…。つてペテル、その恥ずかしい二つ名やめませんか」

ペテル「いいじゃないか。モンガーさん、ニニヤは此処では有名なタレント持ちなんですよ」

モンガ「ほう、それはどのようなものですか」

タレント・・・確か修練して修める武技と違いこの世界の生物が生まれつき持つる特殊スキルだったな。ドワーフ国の摂政会の一人が確か「万能鑑定」つてタレント持つてたな。『どんな物質もその詳細な情報が解る』つてどんだけレアスキルなんだよ。正直魔法で洗脳してナザリック地下大墳墓に監禁してじっくり調べようとまで検討したが、せつかくこの世界で初めて友好的な関係を築けた国と仲違いはしたくないと却下したが。

ペテル「確か「魔法適正」と言つて習熟に2年かかる魔法が1年で済むというものです」

モンガ「それは凄い」

隣でレギナがクスリと声を漏らしたが私と盟主が怒りの目を向けて黙らせた。

ルクルット(以後ルクル)「まーこの町にはもっと有名なタレント持ちがいるけどな」

ダイイン「バレアレ氏であるな」

聞けばこの町にはンファイレア・バレアレという有名なタレント持ちがいるという。リイジー・バレアレという王国で一番有名な薬師の孫で、「魔道具制限解除」と呼ばれているらしい。(だれが名付けたか不明)

モンガ「それはどのようなタレントなのですか？」

ペテル「なるほど…。バレアレ氏を知らないと言う事はこの辺りの人ではないのですね」

モンガ「ええ。私と言うよりルカ以外はこの国の出身ではありませんん」

ペテル「ええと、話がそれてしまいましたね。ンファイレア・バレアレ氏のタレントはあらゆるマジックアイテムを自在に使えるというものです。マジックアイテムには特定の人物や暗号を知ってる人しか使えない物があつたり、インテリジェンス・アイテムという意思を持ち特定の資格を持つ者にしか扱えない物もあります。彼はそういった制限を無視して使用することが出来るんですよ」

それを聞いた私は戦慄した。

ユグドラシルにもそういったアイテムが多数存在した。ゲームを盛り上げる意味もあるが最大の理由は種族や職業ごとの難易度を調整する為だ。そうしないと皆強い種族や職業しか選ばずせっかく職業選択の幅や自由度を上げた意味が無いからだ。

しかし、その人物のタレントはそれを無視してしまう。それはつまりモモンガさんしか使えないギルド武器すら使用可能という事だ。ユグドラシルプレイヤーならこの力が如何に危険か良く分かる。だがしかしその人物を手懐ける、あるいは利用できれば強力な戦力になる。しかし、もし敵対するユグドラシルプレイヤーにその人物の身柄が渡った場合、最悪暗殺も視野に入れておかなければならない。恐らく盟主も気づいているだろう。後で他のギルメンにも伝えておこう。

レギナ「モモンガ様、その人物、危険かと」

ルカ「私もそのように思われます」

モンガ「分かっている。だがくれぐれも早まったマネはするな」  
ジーク「殺してしまつては利用できなくなる」

NPC達にしっかりとくぎを刺しておいたけどハルカは制作に携わったからともかくルプスレギナの設定は知らない。心配だ…。

おっと【漆黒の剣】の皆様が疑念の目を向けてるな。ひとまずこのことは置いて目先の依頼に集中しよう。

モンガ「ちよつと待って下さい」

モンガーが顔を寄せたので私も耳を向けた。

モンガ「ジークムンド、あなたも気づいてるだろうけどそのタレント持ちの件は後でゆっくり話しましょう」

ジーク「了解」

疑いの目を向けられる前に盟主は依頼の話を進めた。

モンガ「すいません皆さん。依頼の話を進めましょう」

ペテル「そうですね。実は今回の仕事は組合を通したものでじやないんですよ」

モンガ「というと？」

ペテル殿の話ではモンスターを狩って証明部位を持ち帰ると町から組合を通して報奨金が出るのでそれが今回の仕事らしい。

ニニヤ「5年前に第3王女の提案で施行された法律です。これには冒険者はみんな喜んでます」

ルクル「俺達には飯のタネになる、町や村の人間は危険が減る、国は検問所から通行税がしっかりとれる、損する人間は誰もいないって寸法さ」

聞けばリ・エステイゼ王国の第3王女は平民の為の法案を多数発案してるらしい。近年では奴隷売買禁止などが有名だ。

他にも冒険者に支払う依頼料を下げる為各領地への足税（通行料のようなもの）を無くせなど発案してるらしいがそれでは税収が減ると貴族たちからの反対でとん挫してしまったらしい。

そう言えば学生時代、中世の貴族たちは貴重な収入源として半ば強制的に通行税を取っていたと教わった記憶がある。個人的には足税を無くして町ごとの商売許可証などを作成した方が金の流れが活発になり税収も増えると思うけど。

ペテル「どうでしょう？私達に協力していただけますか」

モンガ「ええっ喜んで。ジーク、君も構わないか」

ジーク「ん、我も断る理由はない」

モンガ「それでは一時とはいえ共に仕事をを行う以上、顔を見せておきましょう。ルカ、お前もいいな」

ルカ「モンガーさんがそういうのなら」

私の心配をよそに、二人は同時に兜と仮面を取った。

やはり【漆黒の剣】のメンバーからは動揺の声が上がった。私もナザリックにいた時一度見たがこの二人の顔は異国情緒あふれるものだったからだ。

まずモンガーさん。確か自分のリアル顔を3割ほど手を加えて長身で筋肉質の男にふさわしく少しごついがややイケメンに見えるようにしたものだ。(ガチのイケメンは体格と合わず魔法による偽装を疑われる危険が高い為)

そして、ルカはたしか某忍者ゲームのヒロインをモデルにしたんだよね。ストロベリーブロンドの髪は後ろで白いリボンでまとめられている。目の色はこの地方にも時折見かける蒼眼で(狙ったわけでは無い)目鼻立ちはやはりメイドの性か個人的にはルプスレギナ以上の美人だ。年齢層も16〜18位の設定なのでこの地方の駆け出しから中級冒険者と言うにぴったりだろう。

などと考えている内に【漆黒の剣】から質問が来た。

ペテル「黒髪黒目…。男性のお二人は南方の人種がそうだと聞いたことがありますか」

ルクル「うつひよー、そっちの女の子もすっげー美人じゃん。なあなあジークさん、こんな美人どうやってひっつけたの?」

ジーク「ひっつけたとは失礼な。この娘は偶然盗賊に襲われていた所に出くわして、その時共闘した縁で一緒に行動するようになったのです。一応信頼はして貰ったようなので。そうですなルカ殿」

ルカ「はい、私はこの国の田舎村の出身です」

ルカはスラスラと「偽装経歴Ⅱカバーストーリー」を並べる。幸い疑問に思われることが無くてよかった。

実は特訓中に恐怖公の眷属に廃村が有るか調べてもらっていた。



そこで3年ほど前にモンスターにやられて全滅した村があったらしいのでその出身という事にした。村人もほぼ全滅状態だったらしいのでそう簡単にばれることは無いだろう。

ルクル「ところで男性のお二人と女性のお二人はどのような関係なのでしようか」

明るい声でルクルツトが私と盟主に質問してきた。ため息が聞こえてきた方向を見ると「漆黒の剣」のメンバーがうなだれていた。リーダーのペテル・モークはこめかみを抑えている。どうやらルクルツトは女がらみで問題を起こし、それに仲間を巻き込むタイプのようだ。私もリアルでこうゆうやつに絡まれたことがあるから良く分かる。(自覚は無いが私の外見は平均よりやや上らしい)

私は気づかれないよう小さいため息をつくと盟主と決めた答えを返した。

ジーク+モンガ「仲間です」

ジーク「一般的に言う友人程度に仲は良いと思いますが別に恋人と  
言うほどでは・・・」

ルクル「惚れました。付き合ってください」

レギナ「アハハツ面白い人っすねー。この人より強ければ考えてあげるっすよ」

ルカ「私も気さくな人は嫌いではありませんが、私はこの人たちに恩があるので今から恋人として付き合う事は難しいですね」

おおっ上手いスルーだ。なんだNPCにも考えた受け答えが出来るんだな。ルプーは若干危ないが…。

ルクル「ではお友達から始めて下さい！」

レギナ「ンくまあ友人程度ならいいっすよ」

ルカ「私もそれなら問題ないです」

ルクル「ありがとうございます。イヤッター！」

一時はどうなることかと思ったが上手くまとまったね。これがナーベラルやソリユシャンだったらどうなっていたやら…。

話がひと段落したので、早速初仕事の準備に入ることにした。先ずは飲み水の確保だが『無限の水差し』を持っているのでそれは問題な

いのだが食料はレギナとルカ用に焼き立てパンとベーコン、ゆで卵等嗜好品をひと月分ナザリックから持つてきているが、こっちの食材も数十種購入してある。これにはいくつか理由がある。

一つ目はやはり何も食べないというのは周囲から奇異の目に映るためだ。もしかしたら人間ではないのかと疑う者も出て来るかもしれない。

二つ目はこの世界の料理をメイドであるルカに食べさせてナザリックの料理のレパートリーを広げて貰うためだ。

最後はこの二人の料理の感想を聞くことで誰かに料理の話を振られた時ある程度答えられるようにするためだ。我らは現在食事が不可能の為味や食感などは外聞に頼るしかない。基本的な料理の味も答えられないようでは要らぬ詮索をされてしまう。

以上の理由から食料の買い出しは必要ないのだが彼らが見たこともない食材ばかりでは色々と答えに詰まってしまうので買い出しに付き合い、少し購入して残りはナザリックの料理長に見てもらおうという。

二階の階段から降りた所で受付嬢から声がかかった。

受付嬢「モンガーさん、ご指名の依頼が入っていますが」

私と盟主は恐らく同時に頭に疑問符を浮かべた。

指名とはベテランの冒険者が信頼を得た客から「ぜひあなたに頼みたい」と言われる事だ。指名依頼は通常の依頼より迅速に話が進むし、優先的に引き受けてもらえるがその分手数料がかかる為顧客と冒険者の信頼関係が重要だ。昨日来たばかりの新米冒険者にくる話じゃない。どういうことだ。

盟主も同じことを考えたのか緊張が伝わってくる。

モンガ「一体どなたが？」

受付嬢「ンファイレア・バレアレ氏です」

受付嬢の後ろには金髪の前髪が目を覆い、薬草のしみ込んだ麻と革製の服と靴を身に着けた10代後半くらいの男の子が立っていた。

## 第15話 初依頼〜王国編

3月26日午前5時25分 エ・ランテル冒険者組合二階談話室

盟主は当初組合を通じた依頼ではないが仕事の契約を交わしてしまつたためまたの機会にしてほしいとお願いしたが【漆黒の剣】の皆さんが折角の指名だからと言ってくれたのでバレアレ氏の話を聞いてから考えるという事になり再び二階の談話室にて依頼内容を聞くことになった。

ンファイレア・バレアレ（以後ンファイ）では改めて自己紹介を。僕はンファイレア・バレアレ。この町で薬師をしております。今回は此処から馬車で二日程の所にあるカルネ村という所に薬草採取に行くのでそこまでの護衛と荷物の運搬の手伝いを依頼したいのです」

警護依頼か……。確かにうちはその仕事にうってつけのパーティーが揃っているな……。前衛は現在は「聖騎士Ⅱパラディン」の私と戦士の盟主が、後衛は「神官Ⅱクレリック」のルプスレギナ、索敵は「盗賊Ⅱシーフ」のハルカが担当すれば大丈夫だろう。（「アインズ・ウール・ゴウン」では私やぬーぼーさんの役目だったが現在は聖騎士の義体に憑依中なので不可能）

しかし、この世界の冒険者のレベルとはいかほどなのだろう。【漆黒の剣】のランクは銀等級だがそれが冒険者として日が浅い為であり、実際はミスリル等級の実力者という線もありうる。

ジーク「少しよろしいか。バレアレさん、お願いがあるのですがこちらの冒険者チーム【漆黒の剣】も共に雇ってもらえませぬか」

ンファイ「それは何故ですか？」

バレアレ氏のみならず【漆黒の剣】のメンバーも頭に？が浮かんでいるのが見て取れる。隣の盟主も袖を引っ張ってきた。

モンガ「私達も説明を聞きたいですね」

ジーク「我らは冒険者に成りたてのひよっこ。お恥ずかしい話ですがモンスター討伐の経験なら多少はありますが警護任務となるとお世辞にもベテランとは言えませぬ。もし【漆黒の剣】の方々にこのような経験が豊富ならばぜひご活躍を拝見したいのですが・・・いけま

せんですかね、何しろ冒険者として初めての仕事なので銀等級なら依頼料もそれほどかからないと思います」

ジーク「こちらとしては非常に有難いのですが……。ンファイレアさんは、どうでしょう」

ンファイ「僕の方もそれで問題ありません」

フウ、何とか話がまとまったな。おっと、そういえばまだ一つ重要な話を聞いてなかったな。

モンガ「では最後に質問しても」

ンファイ「はい、何なりと」

って盟主に先を越されたか。

モンガ「何故私たちなのでしょうか？私達4人は昨日この町にやってきました。親しい友人はおろか誰も私たちの顔を知りません。にも拘らず何故？」

ンファイ「……実は宿屋の一件を聞いたんですよ」

モンガ「宿屋の一件？」

ンファイ「はい！昨日登録したばかりの「銅等級Ⅱカッパーランク」の冒険者が格上の相手を吹っ飛ばしたって。実は今まで頼んでいた銀等級の冒険者の方が違う町に行かれたようなので折角ですから新しい方にと。何より、銅等級の方ならお安いと思ひまして上のランクに行く前に期待の新人さんと縁を持つておきたいというのもあります」ナルホド。確かに納得のいく理由だ。微妙に言いよんどんでいたのが少しだけ気になるがそれだけでは何とも言えない。さほど気にすることは無いだろう。

我々は質問を打ち切りこの仕事を引き受けた。

依頼内容はカルネ村への護衛。期間は移動に往復で4日、薬草採取で2日、合計6日。報酬は銀等級の【漆黒の剣】は一人当たり金貨1枚と銀貨8枚（手取りは2割を差し引いた金貨1枚と銀貨4枚と銅貨180枚）。私達は一人当たり一日銅貨60枚×6日Ⅱ銅貨360Ⅱ銀貨3枚銅貨60枚（手取り銀貨2枚と銅貨88枚）。以上。

受付嬢に依頼を受けた旨を伝えた。【漆黒の剣】は元々モンスター

を狩るために準備していたみたいだが私達の事が心配で尋ねてきた。ペテル「失礼ですがモンガーさん。見た所荷物が少ないようですが「水を生産する樽」マジック・ウォーター・ザック」は持っているんですか？」

モンガ「何ですか？ソレ」

ルクル「えっマジック・ウォーター・ザックも知らないでこの国まで冒険してきたのかよ」

モンガ「ええまあ…」

どうしよう…。随分驚いてるけど本当に知らないんだから仕方がない。知ったかぶりをしてても問い詰められたら絶対に誤魔化せない。恐らくこの世界で開発されたマジックアイテムだろう。

私とモンガさんは小馬鹿にされたと考えて殺気を放っていたルプーとハルカを手でけん制しつつ情報収集に努めた。

ペテル「端的に言えば一日20リットルの水を生み出すマジックアイテムです。組合が一日(一週間)銅貨60枚で貸し出してるマジックアイテムで冒険者にとって命綱と言ってもいいアイテムです」なるほど。彼らが私達を見て不審に思ったのか分かったわ。人は生活するのに確か成人一人につき一日1.5〜2リットルの水分を必要とする。普通に旅をしていれば必ず飲み水の確保が最優先課題になる。この世界ではあちこちに水道なんて便利な文明の利器は無い。そんな世界で水を確保する手段無しで旅をすることは自殺行為だわ。

う〜んどうしよう。手持ちのマジックアイテムで何か…あった。

モンガ「ご安心ください。私とジークムンドは名称以外同じ効果を持つマジックアイテムを持っていますから」

そうそう。私達は『無限の水差し』マジック・ピッチャー』という一日20リットルの水を生み出せるマジックアイテムを2つ所持している。と言ってもゲームでは味が感じられないからバフ、デバフ用に用いる。因みに私は隠密能力と素早さに効果のあるモモとブドウの果汁が湧くものを所持している。

モモンガさんはたしか同盟を組んだ人間種がいるギルドの為に水

が湧く奴を所持していたはずだ。

うっかりしてたな。時間が出来たら宝物殿にただの水が出るやつ3つほどあるから持ってこよつと。

3月26日午前6時30分 エ・ランテル近くの街道

色々あったが全ての準備が整い私達4人と【漆黒の剣】はエ・ランテルを出発した。

草原の中にある草の生えてない一本道を歩いていく。そろそろ慣れたとはいえリアルでは舗装されてない道なんて歩いたことなかったからそこを通つての遠出はワクワクする。

その感情を決して悟られないよう気を付けて歩きながら【漆黒の剣】と魔法について議論する機会に恵まれた。

ジーク「生活魔法：ですか？」

ニヤ「ええっ砂糖や塩など生活必需品はどの国も岩塩が取れない地方では魔法詠唱者が生産して売っています。だからどの国も魔法詠唱者は重宝され食うに困らないんですよ。最も王国では魔法詠唱者の価値は帝国に比べて低いですけどね」

私はある程度話した後開けた岩場で休憩をはさんだ時モンガさんと話した。

ジーク「モンガー殿、なぜかこの世界では我々の知ってる歴史とは異なった文明が発展してますな。魔法が存在している以上無理もありませぬが」

モンガ「私は知れば知るほどに疑問が増えていくことに驚いてます。魔法形態はユグドラシルと同じ位階形態が使われていますが生活魔法と呼ばれる麦や各種調味料が魔法で作れたり等魔法も独自の発展を遂げています。以上の事から見て魔法や武器の作り方をこの世界に伝えたのはユグドラシルプレイヤーと見て間違いないでしょう。それも私達がこの世界にくるはるか以前にこの世界に転移しています」

ジーク「一番古い伝承は900年前のミノタウロスの賢者ですか。たしか最古のマジックアイテムを作ったとか」

モンガ「更に現代にいたるまで使われている魔法は600年前に現れたとされる六大神が伝えたという事を事実として考えるとその神様とやらともユグドラシルプレイヤーと見て間違いないでしょう」

ジーク「他にもユグドラシルプレイヤーと思しき伝承もありましたな。八欲王、十三英雄……」

モンガ「そこから先は今度仲間たちと共に議論しましょう。そろそろ休憩が終わります。戻らないと怪しまれます」

ンファイ「モンガーさん。ちよつとよろしいでしょうか？」

モンガ「ええっ今行きます」

ジャストタイミングです盟主。証拠がない以上この話題は平行線になる。そして私達は現在仕事中。頭を切り替えていかねば足元を掬われる。ナザリックに帰還したらギルメンに要相談ね。

ンファイ「相談中にすみません、カルネ村に着く前に知らせておかなければならなかったので。カルネ村周辺の森は『森の賢王』の縄張りなので気を付けてください」

モンガ「森の賢王？」

ンファイ「二百年以上の時を生きる伝説の魔獣でとても強いらしいです。しかも英知に溢れ魔法も使えるとかで噂を聞いて挑んだ冒険者が何人も返り討ちにあつたそうです。その中には白金ランクの方もいたとか」

ジーク「それは是非、遭遇したいですね」

上手くいけばナザリックの強化につながる。敵意があるユグドラシルプレイヤーに遭遇した時の為に現在盟主はヘロヘロさんと共にナザリックの強化にも取り組んでる。未知の多いこの状況で「アイズ・ウール・ゴウン」の戦力を知っているユグドラシルプレイヤーに遭遇した時の為に優先順位は高い。

ルクル「レギナちゃん、大丈夫？なんか余裕があるように見えるけど」

レギナ「そつすねー、まあこの辺りに強いモンスターがいるって話は聞かないし今んとこはそれほど緊張してないっすね」

ルクル「やっぱ俺の目と耳を信じてるから？」

レギナ「モンガーさんとジークムンドさんがいるからっすよ。素敵もルカちゃんがいるし、そっちにはあんま期待してながっ」

その瞬間私は咄嗟にルプスレギナの足を踏んだ。LV95なので骨が折れぬよう手加減してかつ、LV50以下では目で追えない速度で。

レギナ「…仲間ほどじゃないっすけど期待してるっス」

ルクル「？まあ期待しててよ。俺のすっげー所見せてやっから」

フウ：何かかもめごとにならずに済んだな。

ルクル「なあなあ、レギナちゃんとルカちゃんって恋人いんの？」

レギナ「うんにゃ」

ルカ「私も恋人と呼べる人は別に」

ルクル「モンガーさんやジークムンドさんは？」

モンガ「私は…」

ジーク「モンガーさんには奥さんがいますよ。ちなみに私にも娘がいます」

オイオイ盟主、慌てなさんな。一応ギルメンの間ではアルベドが盟主の奥方ってことになってるし、あの二人は私にとって娘同然だから。っと『伝言』？ルプスレギナからか？

モンガ「何言ってるんすか、そーゆう事はひと言相談してください、もう引き返せませんよ！」

盟主がルプスレギナに『伝言』を使わせたらしい。

ジーク「あいすまぬ盟主、ギルド内ではアルベドが盟主の伴侶と言う設定でしたし、まあ実際の設定はギルメンを愛しているですが、盟主はこの世界出身の恋人又は伴侶を作るつもりで？」

モンガ「冗談でもそんな事言わんでください。NPC達の間にごんな波紋を呼ぶか分かりません」

ジーク「だからもう売約済みだと言っておくのです。下手に女を紹介され押し付けられても困るでしょう」

モンガ「確かにそうですが今後絶対一人でこんなことやら必ず相談してください。ギルマス特権で何らかの処分をしますよ」



ジーク「承知」

二度としないという約束をして『伝言』を切ったが私の設定自体は気に入ってくれたようだ。まあこっちの世界で人間の恋人を作ったら後が大変だしね。

「だって私達異業種だよ、あくまで元人間なんだよ、何よりNPC達がそのこと知ったらナザリックから離れる者やお世継ぎをどうするかとかの面倒ごとが山のように来ることは想像に難くない。

ルクル「あー、モンガーさんとジークムンドさんには決まった人がいるわけか：男女二対二のパーティーだからかどつちかが付き合っていると買ったのに」

私も初めはその設定で行こうとしたんだけどね。だって男一人で女三人のパーティーなんて怪しすぎ。おまけに美女美少女ばかりだから絶対周囲の嫉妬を買ってもめごとに発展するのは見えている。正直私も性別は女なので憑依するアバターは女性にしたかったがハーレム状態になってしまうので男にした。まあ個人的に姉キャラみたいにかわいいハルカとイチヤイチャしたいのもあるけど：まあ同性でもそこは：こういう娘と仲良くしたいなー的なのねえ。勿論状態異常アイテムを敵が使って来た時の対策の為基本ツーマンセルで行動する時の虫よけでもあるけど。

ペテル「ルクルット、休憩は終わりだ。そろそろ：」

ルカ「お話し中失礼します。モンスターの群れがこちらに近づいてます」

ルカの一報で全員が戦闘態勢を取り気配がする方角へ向かった。

ルクル「ほんとか？俺はなんも感じねーが：いや待てっ確かになんか来る、人じゃねえ」

ルクルットの言葉にルカの言葉に半信半疑だった【漆黒の剣】のメンバーも気合を入れなおす。ルクルットの探査能力を信頼しているが故だろう。

ペテル「ンファイアさんは馬車に隠れていてください。モンガーさん、分担はどうしましょう」

ジーク「モンガー殿来た、距離約600M、数は：「小鬼Ⅱゴブリ

ン」十数体、「人食い鬼」オーガ」4体、ルカ、敵の正確な戦力は解るか？」

ルカ「ゴブリンがレベル2、しかも全匹です。オーガも種族レベル入れて 3が3、4が1です」

モンガ「・・・一応油断せずに行くぞ」

ルカ「所持スキルまでは解析できませんがアゼルリシア山脈のモンスターのレベルが7〜16なので強さだったのでこちらに脅威となるスキルを所持している可能性は非常に低いと考えられます」

ペテル「どうしました？」

モンガ「あなんでもありません、分担でしたね。前衛は我々に任せて貰いましょうか、ベテラン冒険者さんに私達の力を見ていただきたいので」

ペテル「分かりました。しかし、できる限りの支援はさせてもらいます」

モンガ「それはありがたい、では行きます。私はオーガの相手をお願いします。ルプスレギナはインフィーレアさんを守れ、間違っても前衛に出るな。ジークはゴブリンを狩ってくれ。ルカはゴブリンを狩りつつ

【漆黒の剣】のフォローを」

ジーク+レギナ+ルカ「了解」「はい」

盟主はスタスタとオーガの居る方角へ歩いて行つた。冒険者となつても盟主がリーダーなのでおいしい所は譲るべきよね。ちなみにルプスレギナにはインフィーレア氏と一緒に馬車の傍で待機。あいつは神官戦士で回復要員だから護衛対象を守ってもらう、何よりカルマ値がーだからすぐには殺さずじっくりいたぶったりしそうなんだよね。実際デミウルゴスやアルベドがそういうタイプだったからそういう所を見せると悪い噂が立ちそうなんだよね。一応後でそれはきつく言っておこう。モンスターを狩る時は効率的に、拷問する時は周囲の目を気にしろと。

盟主はある程度敵に近づくと背中中のグレートソード×2を抜いた。そしてオーガが振り下ろした木製の棍棒を最小限の動きで躲すと左手の大剣を横なぎに振るつた。

体長2.5 m、横幅も人間の倍以上はあるオーガの上半身と下半身がきれいに別れズンと床に突つ伏した。

盟主は引き続き「かかってこい」と残り3体のオーガを挑発する。二匹のオーガが挑発に乗り盟主に襲い掛かった。今度は右側から横なぎに振ってきたので盟主は2 m程ジャンプして横なぎ一閃。オーガの首が飛んだ。

おっと、余所見は良くないな。私とルカにもゴブリンの軍勢が来た。私とルカに15体、後ろの【漆黒の剣】に3体つてところか…。

ジーク「ルカ、迅速に片すぞ」  
ルカ「はっ」

私はゴブリンの群れに体をやや前のめりにして駆け出す。先頭のゴブリンはさびてぼろぼろの剣を私から見て左斜めに振り下ろした。欠伸が出る程の斬撃を躲しぎまに刃渡り85 cm程の柄に申し訳程度の金細工の装飾が施されたロングソードを一閃する。その後、ゴブリンの群れを常人では目で追えないほどの速度（後で知った）で攻撃をかわしながら過ぎ去った。

私が剣に着いた血を振り下ろした刹那、8体のゴブリンが首と胴が、或いは肩口から腹にかけて斜めに切り離されて血の海に沈んだ。残りの7体はルカに向かったがルカが通り過ぎた次の瞬間、私が始末した連中と同じ運命を辿った。

後ろの3体は魔法詠唱者のニニヤに向かった一体だけルカが投げた小刀が後頭部から口の中まで貫き倒した。残りの2体は戦士のペテルと森司祭のダインが片手剣とメイスで倒した。おそらく【漆黒の剣】の実力を見るためにわざと残したんだろう。或いはルプスレギナの為か…。

## 第16話 初依頼〜王国編③

私（闇信刃）達は現在殲滅したゴブリンたちの耳又は手首を切り取って革袋に収めている。5年前から王国第3王女の発案で倒したモンスターのパーツを組合に提出すると組合を通じて町から報奨金がもらえるらしい。この法律ができるまで冒険者の暮らしはひどかったらしい。今でも銅く鉄等級の冒険者は食うや食わずの生活だがこの法律が制定されたおかげで冒険者の地位も向上し何より消費が活発になり経済効果も高いらしい。

しかもこの国の第3王女は「黄金姫」と言われるほどの美貌を持ち、求婚者が絶えないそうだ。同じ女として羨ましいやら同情するやら複雑ね。

ちなみにユグドラシルと同じようにクリスタルなどのアイテムがドロップするわけでは無いらしい。此処がゲームとは違う所ね…。ニヤがキョトンとしているがこれはどうしても聞いておかなければならなかったのだから仕方がないよね。

地位が低いうちは生活が苦しいのは仕方がない。でもその生活苦を味わってるのは銅＋鉄等級で、冒険者全体の7割弱を占めてるんだけどこのままでほんとに良いのか疑問視せずにはいられない。国を敵に回したくは無いかから何も言わないけどね。

3月26日午後4時30分 スフォル村前

出発してから約10時間。綺麗な夕日が見え始めたという時エ・ラントルから一番近い村にたどり着いた。いつもここで一泊するらしい。そして二日目の昼過ぎにカルネ村に到着するらしい。

が、近づくにつれンファイレア氏がいつもと様子が違うと言ったため皆移動を急ぐ。

そこで目撃した光景に皆絶句した。

そこはかつて村と思しき廃墟だった。所々の家の屋根が燃えてドアや壁が壊れている。かなり時間がたっているはずなのに幾つかの家が未だ燃えている所を見ると油を撒いてから火をつけたのだろう。これは明らかに人為的な物だ。ユグドラシルには火を吐くモンス

ターはいても油を撒くモンスターなどいない。

ルクルット「ひでえな…」

ペテル「全滅だな…。盗賊にでもあったのか?」

ニニヤ「かもしれませぬ。あの家を見てください。土壁まで燃えています。あれは錬金術で作った油を撒いてから着火したんですよ。私も師匠が作って火を灯したところを見たことがあります。土壁を燃やし、更に長時間消えない。間違いありません」

ダイン「ん?ペテル、生存者がいるのである」

全員がダインの言葉で指さす場所へ駆け寄った。30代くらいの男性が崩れた屋根の下敷きになっていた。「ううつ」といううめき声が聞こえてので間違いなく生きています。私は重しとなった屋根を押し脈をとる。

???「あ…ありがとうございます」

ジーク「無事ですな。レギナ、「軽治療IIライト・ヒーリング」を」

ニニヤ「待つて下さい。無償で治療すると神殿勢力から文句が…」

ジーク「では黙ってていただきます。これは情報収集に必要な行為です。情報が代金という事で如何か」

強引な理屈だがなぜこうなったのかは知りたい。やむを得ないと皆納得してくれた。

ンファイ「マックスさん?」

マックス「ん、ンファイレア君か、助けに来てくれたのか?」

ンファイ「ええまあ、結果的にはそうなるのかな、とにかくながあったのか教えてください」

マックス「帝国軍が…攻めて来たんだ」

ペテル「帝国軍が?…何故?」

話を聞いてみると今日の午前6時頃、朝食を済ませて畑仕事に精を出し始めた頃、物見やぐらにいた村の男が騎士のような格好をした一団が村の近くで隊列を整えていると知らせに回っていた。騎士様が一体何用でこんな辺境の村に来たのか当初解らなかった。この村はトブの大森林の近くにあり、『東の巨人』と呼ばれるモンスターの縄張りに近い為皆無とは言えないがトブの大森林から離れている村に比

ベモンスターに襲われる可能性が低い為曾祖父の代からこの村に住んでいる。一応物見やぐらと1m弱の浅い堀と申し訳程度の柵で村を覆っているが。

リ・エステイーゼ王国とバハルス帝国は4年前から一年に一度、秋の収穫期にこの村から北東へ3日ほど行つたところで戦争をしているがその間、この村から徴兵令が来ることがあつても(マックスも二年前駆り出された)帝国軍がこの村に攻めてくることは無かつた。

マックス「助かつた。本当にありがとう。えーと、・・・お名前は？」  
レギナ「レギナつす。イヤー、体力レッドゲージのあなた、中々つあだ」

ジーク「ご無事で何よりです」

危ない危ない、ルプスレギナ、後でゆっくり話そうね。

マックス「すまねえ、助けてもらつて悪いがおれ、行かなきゃいけねえんだ。話はあと：おつと」

マックスと言う人は走り出そうとして転んだ。やはりずっと屋根と言う名の重りの下にいたんだ。傷は治つても体力はそうはいかない。

彼、マックス・タイソンは村人が襲われているのに気づくと、真つ先にそばにいた妻子に森の中に逃げるように言つたらしい。

しかし、騎士に回り込まれ奥さんはその兵隊に全力で体当たりし、息子さんを逃がした。残念ながら奥さんは捕まつて、犯された後殺されたらしい。

全く、どこの時代にもいるよねそう言うやつ。もし出会つたら八つ裂きにしてやる。

それにしてもあちこちにある死体を見ても大して驚かない。感じるものは有るけど明らかにリアルにいた時とは違う。人間のまま転移していればこの光景に卒倒してた、というより生きていけなかつた。今頭に來てるのは連中が村人に対してやった行為であつて、殺人その者じゃない。

そのうちある程度残っている人間としての残滓が消えてしまつたらどうなつてしまうんだろうとネガティブなことを考えてしまう。

マックス「そうだ、助けてもらって厚かましいが頼みがある。今生き残ったやつは村長の家にいるんだが森の中に逃げたやつが何人かいる。連れてきてほしい。頼む、俺の息子もいるんだ」

ジーク「了解した。モンガー殿、我とルカが探索してみる。モンガー殿はレギナと共に人が人の治療に当たってくれ。ああ、ルクルツト殿。野伏であるあなたも手伝ってくれると嬉しいのだが」

ルクル「リョーカイ。今度はルカちゃんにいい所見せるぜ」

ルカ「…それは楽しみです」

こうして私とルカとルクルツトさんは森の中に探索に乗り出した。今とはかく動こう。暗いこと考えてたら足が震えて前に進まない。

幸いルカが索敵したらすぐ発見できたが、ウルフハウンド（犬型のモンスター、LV3）に襲われていた。

急いで駆けつけると一人の少年が木の棒を振り回してウルフハウンドと対峙している。

視認した時ウルフハウンドは少年に飛び掛かり噛みつこうとし、少年は木の棒を水平にして噛ませた。木の棒がバリバリと音を立てて壊れる直前、ルカの一閃が間に合った。

ハアハアと息を切らしながら呆然とこちらを見てルカが出した手を取って立ち上がった。

???「ハアハア：あ、ありがとう。あ、あの、あなた達は一体」

ルカ「そこはこの方が説明します」

ジーク「大丈夫か少年、我は冒険者ジーク。そして仲間のルカとルクルツト殿だ。君はスフォル村の子供で良いか？」

マーカス「あ、ああ。おいらはマーカス・タイソンと言うんだ。後ろの子供や爺さん婆さんもスフォル村の住人だ」

マーカス君（12）の視線の先を見るとそこには小学生くらいの男子1名、女子3名、老人の男女1名づつが震えながら縮こまっていた。

ジーク「各々方、もう大丈夫です。おお申し遅れた。我はジークムンドと申す者でまだ駆け出しですが冒険者をやっている者である薬師の依頼でこの村に立ち寄りさせていただいた者であります」

それを聞いた子供や老人たちは安堵した。やはりインファイア君

は森の周辺の村では顔見知りであり一定の信頼は得ているみたいだ。だとすればンファイア君と縁を持つことは我々にとってもプラスになるはずだ。

森から戻った後、私は比較的まとまな形で残っている中央の大きな家へ行ってみた。するとやはり家には【漆黒の剣】の他初めて見る顔が4人いた。30代の男が一人、後は3〜40代の女性だ。ん、見た所生き残っているのは同世代のようだが何故だ？何か理由があるのだろうか。

その人達からも話を聞いたが皆同じ内容だった。さらに恐ろしいことに一か月程前からこの森から離れたスレイン法国に近い村でも同じようなことがあり生き残った村人がわずかに残った食料を手に5日もかけてエ・ランテルの都市長に知らせに行ったらしい。近々王国騎士団が派遣されるとか。

そしてスフォル村の生存者の一人が「よし、次は明日朝5時にカルネ村に出発だ。最後の詰めに入るぞ」と兵士が行っていたのを聞いた人の台詞にンファイア氏の顔色が変わった。

ンファイ「冒険者の皆さんお願いします。今すぐカルネ村に出発してもられませんか！」

ンファイア氏のこのセリフには皆が驚いた。何故なら夜は活発化するモンスターが多い為夜の行動は非常に危険だからだ。更にンファイア氏を除く全員が十数kmの距離を歩きつぱなしでここまで来たのだ。最低5時間は睡眠を取らないと明日の行動に支障が出る。

だから当初この村で一泊し、明日の昼過ぎに目的地のカルネ村に着く予定だったのだ。

だから皆この意見に反対した。

ペテル「待って下さい。もう夕日が沈み始めてます。松明を使っても周囲の把握は困難です。これじゃあモンスターに襲われた時対処が難しくなります」

ニニヤ「一応視界を昼間の様に視認できる〔暗視IIナイトビジョン〕は使えますけど効果は5分程です。この魔法を全員にかけていたら10分で私の魔力は尽きてしまいます」



ルクル「それに馬車引いてる馬だつてそろそろ限界だ。今日はもう休ませねーと途中でぶつ倒れちまうよ」

ダイン「それが自殺行為であることはエ・ランテルとカルネ村を何度も往復しているンファイア氏なら承知しているはずである」

ンファイ「解つてます。でもどんな危険が待っているかというと明日の朝までに行かなくちゃいけないんです」

ンファイアさんの目はマジだね。強い意志を感じるな。

ルクル「なあンファイアさん。ひよつとして村に恋人でもいんの？」

ンファイ「いえ…僕が片思いしているだけです。僕にとって一番大切な人です」

やはり恋人がらみか…。

そうこうしているうちにモモンガさんがンファイアさんの前に出た。

モンガ「ンファイアさん。この村とカルネ村の間に休憩適した場所がありますか？」

ンファイ「此処から3時間ほど歩いた所に森から適度に離れていて見晴らしがよく川も近くにあるのでモンスターの襲撃にも備えられる場所があります」

モンガ「なるほど…ジーク、ルカ、レギナ、ちよつと来てくれ。皆さんは其処で待機してください」

モモンガさんは私達を外に連れ出し小声で話し始めた。

ジーク「モンガー殿、ンファイア氏の要請を受けるおつもりか？」  
モンガ「ええ、我々の実力を示す、いいチャンスだと思いませんか？」

ルカ「モンガーさん、ジークムンドさん、発言宜しいですか？我々は食事睡眠不要のマジックアイテムを所持しておりますが、モンガーさんとレギナさんは明かりがあるうとなかろうと視界に問題は有りません。しかしンファイア氏自身と馬は夜間行軍に耐えられないでしょう」

レギナ「私からもいいつつか？もしあの人間に食事睡眠不要のマ

ジックアイテムを貸し出した場合、セバス様から聞いたこの世界の技術水準からして後々問題になってくる可能性があります」

モンガ「ああそれは問題ない。ジークが自走式馬車を作るから」

ルカ「よろしいのですか？その様な者が作れる技術があると知れば後々問題になるのでは…」

モンガ「大丈夫だ。旅先の錬金術師から貰ったものだから作り方など知らないと言ひ張ればいい」

モモンガさんはその根拠を教えてくれた。

ジーク「なるほど…確かにただのもらい物で技術的なことは何もわからないと言ひ張ればそれ以上追及されないかもしれない。それに私もこのような非道を平気でやるものは非常に好かぬ。一体どんな理由があつてこんなことをするのか問いただきたい」

モンガ「決まりだな。ルカ達もいいな、何を聞かれてももらい物で技術的なことは解らんと押し通せ」

ルカ「かしこまりました。御方々のお気持ちに応えられるよう最善を尽くしましょう」

私は誰も見てないところで「伝言メッセージ」を発動し、アルベドに隠密能力に長けるか透明化の能力を持つものを10体ほど送ってほしいと頼んだ後、自走式馬車と馬型ゴーレムの製作に入った。モモンガさんは再び村長宅に戻るとンファイレア氏に提案した。

モンガ「ンファイレアさん、私達の馬車でお送りいたします。実は魔力で動くゴーレム式の馬車を持っているのでまずその休憩場所まで進み、そこでわずかでも睡眠を取れば明日の朝には間に合うでしょう」

ペテル「本気ですかモンガーさん、3時間後なら間違いなく闇夜の中進むことになりますよ」

ルクル「そうだけ、夜の行動がどれだけ危険か旅の経験が一度でもあればわかるはずだ」

ダイン「しかしモンガー氏、問題は他にもある。襲撃したのが帝国軍なら我々はその場所へ向かうわけにはいかぬのである」

モンガ「それは何故ですか？」

ダイン「冒険者組合は基本的に国家間の争いに介入するのは厳禁なのである。何故なら王国と帝国は4年前から毎年争ってるがそれに応じたら今後冒険者は無償で戦争の道具にされてしまうのである。しかも熟練の冒険者は百人力の戦力、そうなるとより大勢の死傷者が出るのである」

ニニヤ「さらに熟練の冒険者を戦争で大勢失ったら各都市はモンスタ―への対処が出来ないのです。だから戦争に限らず冒険者組合は国家間のもめごとには介入しないことを基本方針にしており、それを破れば冒険者資格を剥奪するように規則を作ってるんです」

モンガ「大丈夫ですよ。我々は偶然村に通りかかり騒動に巻き込まれたと言えば誰もがやむを得ないと納得してくれます。それに帝国兵の格好をした山賊と言う線もありますしね」

ジーク「モンガー殿、用意できましたぞ」  
「どうやらジャストタイムングのようだったわね。」

全員外に出ると周囲が夕日で赤くなっている所に「永続光Ⅱコンティニユアル・ライト」で昼間のような状況になってる馬車があった。それはこの世界の水準ではすさまじいものだった。

まず馬は砂と同じ橙色で目から光を放っている。荷車の方は藍色を基調としあちこちに金細工が施された上高価な「永続光」が施されたランタンも前と後ろに計4つ付いている。上級貴族のものと思えない作りこみだ。車輪も太く特殊な材質が使われており悪路も進めそうだ。

ニニヤ「な、なんか凄いのが出てきましたね…」

ダイン「しかもそこかしこに魔法が施されているのであるな」

ンファイ「凄い…。馬型のゴーレムは噂には聞いていましたが見るのは初めてです」

噂？なるほどゴーレムを魔法で生み出す技術は有るみたいね。どの程度か確認する必要があるわね。セバスにはゴーレムの技術について調べるように言っとこい。

モンガ「とにかく急ぎましょう。マジックアイテムとはいえ永続的ではなく魔力の補給も必要なためンファイレーアさんが言った場所で、

休憩を入れる必要がありますがこれをさえば休憩所で5時間寝て、夜明け前に出発すれば明日の早朝にはカルネ村に着きます」

【漆黒の剣】の皆さんには生存者をエ・ランテルまで連れて行ってもらい、自分たちがカルネ村に先行することを伝え、私とモンガー、ルカ、レギナは一足先にカルネ村に向かった。

## 第17話 初依頼〜王国編☒

3月26日午後8時ごろ スフォル村とカルネ村の間の中間地点

馬車は時速30km程で飛ばし2時間程でスフォル村〜カルネ村間の見通しの良い川沿いに到着しそこで予定通り魔力の補給という名目で6時間程休憩することになった。腕時計の目覚ましには午前2時半にセットしておいた（これもマジックアイテムでこれは自作と説明、これは追求されてもこの世界では時間は2時間で一刻、行動は半刻単位（一時間）で行うため欲しがる者がほとんどいないから問題ない）。一応馬型ゴーレムの最高時速は50kmなのだがそれだと3時間程でカルネ村に到着してしまうため30kmで走行した。

ンファイ「ルカさんとジークムンドさんは休まなくてよろしいのですか？」

ジーク「然り、我とルカは『スタミナポジション』とミントハーブが有るので警戒に支障はございませぬ」

ンファイ「先程の強さと言い、用意周到さといいやっぱり皆さんは一流の冒険者ですね」

ジーク「申し訳ないがンファイレア殿、今少しでも休んでおかなければ明日の朝には倒れてしまいます。我は魔力の補給と周囲の警戒に専念します故お休みください。カルネ村で待つ思い人の為にも」

ンファイ「は、はい。それじゃあ休ませてもらいます。魔力の補給よろしくお願いいたします」

モンガ「ジークとルカに任せておけば問題は有りません。それじゃあ私とレギナもジークと少し話したら休ませていただきます。レギナ、睡眠時間が少なくて悪いが話が終わり次第馬車の中で休んでおけ」

レギナ「リョーカイつす」

ンファイレア氏が馬車の中で仮眠をとる為に入った後、私とモモンガさんとハルカとルプスレギナは一度外の薪の火を囲むように座った。

モンガ「これから村に到着してからやることを伝える。ルプスレギ

ナとハルカも注意して聞くように」

モモンガさんは口調と二人の呼び名をナザリックにいた時のものに戻した。これから話すことはギルド【アインズ・ウール・ゴウン】の計画にとつて重要なことという示唆だ。

モンガ「まずお前たちが一番気になっていていることを解決しておく。特にルプスレギナはずっと気にしてそうだからな」

レギナ「はい、何故最高時速ですぐにカルネ村に行かないのかというのが気になっております」

何気に私も気になってるのよねー。出発前に途中で止まってくれって言われた時はンファイア君の体力が持たないからと思っただけど自走式馬車ならその心配は薄いよね。少し位の寝不足なら恋人の為に我慢できるでしょうし。モモンガさんなら：せつかくだから村人に恩を売りたいとかそんな感じかな。

モモ「闇信刃さんならどう思いますか、というかこの状況をどう利用しますか？」

闇「アルベドと少し相談したのですが傾合いを見計い村人を助け恩を売る為であるかな。ハルカ、お主はどうだ？」

ハルカ「私も同意見です。やはりすぐに向かわなかったのは村人に恩を売る為ですね」

闇「付け加えるならンファイア氏に恋人の救出に手を貸しつつ村人を助ける。という所だ。しかしこの計画には穴がある。村人の犠牲が0では誰も恩人だと思ってくれぬという事だ」

モモ「正解です。この計画の肝はどのタイミングで助けるかってことだが：。ハルカとルプスレギナの意見は？」

ルプー「自分としては虐殺がある程度眺めてからっすかね。個人的には村が炎に包まれる所まで見たいっすけど」

ハルカ「私はあらかじめ隠密能力に長けた僕に村の周囲を監視させ、騎士たちが村を襲う準備をしている段階で、先ずンファイアの恋人と思われる女性にンファイアの口から『帝国騎士の格好をした集団が村を襲う』という話をして貰う。そしてンファイアとその恋人、或いはその家族を保護と称して安全な場所に連れていく。その後

謎の騎士が村人を虐殺し始めた所をタイミングを計り、村人の見ている前で謎の騎士団を我々が討伐する。ですかね」

闇「見事だハルカ、流石式式炎雷さんとホワイトブリムさんと私の最高傑作だな」

ハルカ「勿体ないお言葉にございます」

闇「しかしこの計画には二つ難点がある。一つは我々はンファイアア氏と共に村人を助けに来たというスタンスを取らなければならぬ為、今いるメンバーの中から監視に割く人員が無いという事だ。そのため、アルベドに『八枝刀の暗殺蟲』エイトエッジ・アサシン』を始めとした隠密能力に長けた僕を最低十数体村を囲み監視する体制に潜ませてある」

ハルカ「モモンガ様、ナザリックの警備を手薄にせずに村の監視をすればというなら戦力と言う意味で『八枝刀の暗殺蟲』は2体までにして後は伴蔵とシャドウデーモンを数体つつと言うのはどうかと具申いたします」

モモ「確かにLV80の『八枝刀の暗殺蟲』は現在外で活動しているアウラとデミウルゴスの支援に15体中2体を、やまいこさんたちにも2体つつ派遣している。当然私達にもだ。現にハルカには見えるだろう。その岩陰につかず離れず付いてきている。もちろんシャドウデーモンも外で活動しているプレイヤー、NPC問わず一休つつ影に潜ませてる。ナザリックにいる『八枝刀の暗殺蟲』は後5体。それが丁度良いな。ルプスレギナ、すぐ「伝言」でアルベドにそうするよう要請してくれ」

ルプー「直ちに」

モンガ「続けていいか？もう一つの懸念は襲撃者のレベルが我々の想定を超えていた場合、かなり面倒になるという事だ。ドワーフ族の情報でも帝国軍兵士は冒険者でいう所の銀等級並の強さと聞くが、將軍や親衛隊クラスになると最低でも金等級以上だという。重ねて言うが国家に所属してなくても、或いは山賊と言う悪党にも突出した個人が存在しうる可能性を考慮し最悪の状況に対処する手段も考えておけ」

ジーク「我からもよろしいか？もし、村々を襲う連中の中に冒険者組合で聞いた難度150以上、つまりLV50以上の敵がいた場合、様子見もかねてンフィーレアとその恋人の2人のみを連れて転移魔法でナザリツクに撤退する。もちろんその際には「睡眠Ⅱスリープ」で二人とも眠ってもらおう。何か異論は？」

モモ「私は異存ない、二人は？」

ルプー+ハルカ「異論などであろうはずがございません」

こうして私達の『人の恋路を利用して成り上がり』作戦は始動した。

3月27日午前3時45分 カルネ村入り口

6時間の休憩が終わり、魔力の補給が終わった（嘘）馬車は大体予定通りの時間にカルネ村に着いた。辺りはまだ暗いがそれでも東の地平線からわずかに光が差し始めていた。私とモモンガさんは馬車を下りてすぐさま思い人の家へ駆け出したンフィーレア氏の護衛は他の2人に任せ、ンフィーレア氏と反対方向に行き、丁度いい林が有ったので人目が無いことを確認し、「伝言」でアルベドに現在カルネ村に配置している僕の数と配置位置を聞いた。

配置した僕は15体。一番近くで陣取っていた八枝刀の暗殺蟲とシャドウデーモンが不可視化の魔法をかけたまま近づいてきた。恐らくアルベドにの命令だろう。

他の僕も間隔をあげ、15体中12体が森や屋根、岩陰などに潜んで内側と外側を監視していた。

モモ「そうだ、恐らく今日の5時頃、この村を襲う集団の居場所は掴んであるか？」

八枝刀の暗殺蟲（以後、暗殺蟲）「はい、ここから一里（約2km）程の川沿いでキャンプを張っていました。残りの3体が現在監視中です。勿論発見されたという報告も入っておりません。後、襲撃者の監視に回している八枝刀の暗殺蟲のスキルで調べましたが、LV50以上の者はいないそうです。もちろんこの世界特有のタレントというスキルは判別できないため、もしいた場合、戦局が傾く場合があります



す」

闇「未知の敵に対する警戒はしているつもりだが、警戒しすぎては身動きが取れなくなる。今は少しでもこの世界の情報が欲しい時、少々のリスクは覚悟して挑まねばならぬ。もしもの時は諸君らを盾にする可能性も出てくる。許せ」

暗殺蟲「お気になさらずに、むしろ御方々の盾となつて死ねるなら本望でございます」

モモ「では私と闇信刃さんは予定通りンファイアレアの所へ向かう。彼が見ている前で敵を倒さなければ我々が村人を救つたと解らなくなるからな。お前たちは絶対に気取られるなよ」

モモンガと闇信刃と八枝刀の暗殺蟲が話し合っている頃、ンファイアレアは長年恋心を抱いている女性エンリがいるエモット家に大急ぎで向かっていた。朝日に気づいた鶏の鳴き声とンファイアレアのドアを叩く音は同時だった。

ンファイ「エンリ、おじさん、おばさん、ネムちゃん、だれか返事をしてくれ！」

ンファイレアは矢継ぎ早にドアを叩く。今の彼は冷静さを欠いているせいで今の時刻も眼中になかった。冷静に考えれば午前6時まで後2時間は有る。命がかかっているにしても村人全員に知らせる準備をするには十分な時間だが今の彼はそんなことは眼中になかった。

5分程して一人の女性が目をこすりながら出てきた。

エンリの母ネリー(以後ネリー)「あらンファイア君おはよう。でもこんな朝早くに大声を出すと迷惑よ。村にはまだ寝てる人がたくさん…」

ンファイ「あ、すいません、ネリーおばさん。今すぐエンリ…いえ、家族全員を起こしてください。大至急村人全員にお知らせしたいことがあるんです！」

ネリー「ちよ、ちよつと待ってンファイ君。説明して頂戴」

ンファイ「時間が有りません。とにかく皆を起こしてください。それ

から説明します」

ネリーはンファイアレアの鬼気迫る態度に何かを感じたのかすぐにンファイアレアを家に招き入れた。その時、ンファイアレアとは別の人間が通り過ぎた感覚に襲われた。しかしその姿は一切見えず突如襲った得体の知れない何かにまだ眠っていた思考が一気に覚醒した。

ンファイアレアは家に入ると直ぐにエンリとネムがいる部屋に駆け寄った。そして二人が無事でいることに安堵した。

エンリ「ウーん、あ、ンファイアレア、おはよ〜」

ネム「ウーん、だれ〜？もーあさ〜？」

目の前で寝ていた姉妹は眠そうな表情で起き上がってきた。

ンファイ「こんなに朝早くからごめん。すぐ台所の桶で顔を洗って」

レギナ「急いだほうがいいですよ」

ンファイ+エンリ+ネム「「うひゃあ」」

突然の声に驚き後ろを見ると青を基調とした法衣を着た美少女がそこにいた。

レギナ「いい反応ごちそうさまです。へえ〜かわいいっすね」

ンファイ「れ、レギナさん、驚かせないでくださいよ」

レギナ「うっしっし、三人ともいい反応っすよ」

エンリ「きれい」

ネム「わあー綺麗な人〜」

レギナ「うっしっし、ドーモっす」

ンファイアレアはエンリの無事を確認しいくらか冷静さを取り戻し、その結果襲撃までまだ時間があることを思い出し、顔を洗ってきた方が話が早いだろうと考えた。

ルカ「ンファイアレアさん、あまり急いでいかないでください。私達はあなたの護衛としてここに居るのです。せめてどこに行くのかひとと言言っていただかねばあなたを守る事が出来ません」

突然玄関口からンファイアレアを呼び出す声があった。

ネリー「あらいらっしやい。ンファイア君のお友達？その仮面はエ・ランテルの流行りかしら？」

ルカ「いえ、私は単なる冒険者です。ンファイア氏に雇われ、重

要な情報を持ってここに来ました。失礼かもしれませんがご家族の方を集めていただけませんか」

ンファイ「す、すみません。気が動転してて…」

ンファイレーアは途中で寄ったスフォル村で見聞きしたことを克明に語った。そして生き残った人が襲撃者たちが次はこの村を襲うということも。

話を聞く内にエンリもその両親もみるうちに顔が青くなった。彼女たちはンファイレーアが質の悪い冗談を言う子じゃないと知っているし、初めて会う冒険者たちもスフォル村で見聞きしたことを事細かに話してくれたことで信頼性が増した。

エイムズ（エンリの父、以後エイム）「分かった。私は村長にこのことを知らせてくる。ンファイ君は母さん達と一緒に村人たちにこのことを知らせてほしい」

ンファイ「分かりました。レギナさん達もお願いします」

レギナ「あ、あたしはンファイちゃんと一緒に行くっす」

ルカ「私もお断りします」

それを聞いたエモット家の4人はキョトンとした後怒りの目を向けた。とんでもない事を知らせに来てくれた張本人が協力を拒んだのだ。怒りたくもなるだろう。

エイム「・・・確かにあなた方は村の人間ではない。しかし何か理由があるなら聞かせてくれないか」

二人は数秒間互いを見ると理由を説明した。

ルカ「まず第一に私達は余所者なので村人の説得が非常に難しいという点です。あなた方はこの村を襲うものがいるという知らせを持ってきたのがンファイレーア氏ではなく怪しげな仮面をつけた余所者だったら信用しますか？むしろ襲撃者の仲間と疑いたくなるのではありませんか」

エモット家の人もンファイレーアも「確かに」という表情をして頷いた。

ルカ「第二に私達はあくまでもンファイレーア・バレアレさんの護衛として雇われました。もちろん依頼者が命じられれば可能な限り要

望に応じるつもりですが私達が最優先すべきはンファイレーア・バレアレ氏の安全の確保であって村人全員を守ることではありません。私達のリーダーもいざという時はンファイレーア氏とエモット家の皆さんだけを連れて逃げるつもりです」

最もな理由と理路整然とした言い回しにエモット家もンファイレーアも反論できなかつた。確かに長年一緒に暮らしてきた村人ならともかく余所者の言葉を鵜呑みにする人は少ないだろう。もう一つの理由についても護衛として雇われてここに来た以上、護衛対象の安全を最優先すべきは当然だろう。

これでは埒が明かないと感じたンファイレーアは妥協案を出した。

ンファイ「事情は良く分かりました。それではルカさんとレギナさんは私と一緒に来てください。とにかく今やるべきは急いでこのことを村中に知らせることです。あつとその前にモンガーさんとジークムンドさんは今どこに」

レギナ「モンガーさんとジークムンドさんなら村の周囲を見回っているつすよ。此処を襲撃しようとしている奴らの偵察隊が村の近くにいるかもしれないし、後は地形の把握つすかね」

エイム「それじゃあ村中に知らせ終わったら村長の家に集合してくれ」

こうしてンファイレーアはエモット家といったん別れ、ルカとレギナを連れて村中を回った。思い人はという一人、母と妹と一緒に回っているらしい。

ルカとレギナは村人全員に知らせ終わった後「伝言」で主人に中央にある大きめの家に来てほしいと伝えた。

3月27日 午前4時25分 カルネ村村長宅前中央広場付近

カルネ村は居住区直径約400m程で麦や野菜を栽培している畑は約120ha。決して広くは無い為、全村人(128人)に伝え終わるまで20分程度で終わった。現在私モモンガとハルカ、ルプスレギナの三人は2か所ある村の入り口に様子を見に行つた2人を除き

村長宅の前に集まっていた。因みに闇信刃さんは周囲の探索に残っている。

皆顔を真っ青にしていた。ンファイレア曰くひと月以上前に近隣の村が襲われているのを行商人などから聞いて知っている人もいたらしい。

村人A「一体どうなってるんだ！」

村人B「この村を襲う集団がいるって本当なの？うちの子はまだ4歳よ、遠くへは逃げ切られないわ！」

中央広場付近は軽いパニック状態だった。村長がまとまって行動する為宥めているが皆落ち着きを取り戻すのは難しいようだ。

その時突然轟音が響く。「ハッ」という気合と殺気が入り混じった発声が村人の心臓に衝撃を与え体を硬直させた。

声の主はンファイレア雇った冒険者、モンガーとジークムンドだった。

レギナ「あーあ、せっかく面白かったのに」

不穏なレギナはジークムンドのひとにらみで黙った。

モンガ「黙って聞いてれば随分と自分勝手なこと言っているな、今の状況をほんとに理解しているのか」

村人A「あ、あんた達は・・・」

モンガ「冒険者だ、まあそんなことよりどうするかだ。怖いのは解るが今現在の状況が自分勝手なことをしていられる状況なのか？」

村人C「あ、あんたこそわかつてるのか、もうすぐ帝国騎士の格好をした何者かがここを襲うかもしれないんだぞ。よそ者は引っ込んでろ」

モンガ「ならお聞きしますが、あなた方にはその連中に対し対抗手段があるのですか？」

中央広場に沈黙が下りる。それは自分たちはもし山賊のような襲撃者が来たら対抗手段がないと言っているのだ。ルカに測ってもらったが子供たちはマークスを除いてLV1。大人たちもLV2。一人狩人のヨランと言う男が野伏2、ハンター2のLV6だった。2km先の襲撃者と思しき者はLV4〜7。例えば人数で上回っていよう

と正面からぶつかればまず勝てないだろう。

モンガ「続けて質問しましょう。もし逃げるとして全員間違いなく逃げ切れる保証があるのですか？逃げている途中で追いつかれたりしたらどうするのです？私達はランクこそ銅等級と低いですが戦闘能力は一般人より高いですよ。それはバレアレ氏が証言してくれます。彼は実際私達の戦闘能力を見て雇う事を決めたのですから」

ンファイレアの名を口にしたのは効果があつた。皆顔を合わせ聞く姿勢を取った。その目からはある程度、信頼を感じることが出来た。

モンガ「とにかく行動です。時間が有りません。村長、逃げるか闘うか今すぐ決を採ってください。後何人かは水を入れられる容器に水を入れて持ってきてください。水さえあれば一日くらいは食べなくても体に異常は出ないでしょうから」

ジーク「我からもよろしいですか？私達は一応闘う手段を持っておりますがその騎士の格好をした何者かが何人でこの村を襲うのかは分かりませぬ。10人くらいでしたら問題ありませぬが、100人もいれば我ら4人ではまず守り切れませぬ。その辺りを考慮の上決めていただきたい」

勿論これはブラフだ。実際の人数は62人。戦闘能力もある程度把握している。

村が出した答えは“逃げる”だった。村人たちは一度自宅へ帰り水と最低限の貴重品を持ってトブの大森林へ逃げることにした。ンファイレアもエンリと共に自宅へ戻り、わずかな蓄えである銀貨1枚と銅貨10枚を入れた袋を持って近くの森に逃げようとした。

その時、東にある村の入り口から蹄の音が聞こえてきた。ンファイレアとエモット家の人は冷や汗を流しながら、しかし逃げる足を止めずそつちを見た。

モモンガも闇信刃もルカも「いよいよだな。」と身構える。一人だけ薄ら笑いを浮かべているルプスレギナは気づかないふりをして。

## 第18話 初依頼〜王国編⑤

3月27日 午前4時50頃 カルネ村付近

スレイン王国第9軍副隊長ロンデス・デイ・クランプは軍馬に乗りながら自国が信仰する6大神に祈りを捧げていた。

彼は自分たちが正しいことをしているとは思えないからだ。

自分たちが上官である闇の神官長に命じられたことはリ・エステイーゼ王国所屬の王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの抹殺。しかし実際にやるのはスレイン王国が誇る特殊部隊、『陽光聖典』であり、ロンドスの役目はその下拵え、王国戦士長を呼び出すための撒き餌を作ること。

スレイン王国は人類至上主義を掲げ日々亜人やモンスターと闘っている。今回の任務も当然人類救済の為の布石だ。

しかし、今回の任務は六大神官長が説いている『人間種の救済』に本当に結びついてるのか疑念を抱かざるを得ない。

確かにリ・エステイーゼ王国は腐敗している。人類支配権の中でも特に肥沃な土地に住んでおり、建国当初は誰もがリ・エステイーゼ王国が人類の救済と発展を促すと信じられてきた。

しかし、建国から100年以上が過ぎた頃、優秀な兵士や冒険者を数多く輩出した副作用なのかこの国は少しずつ腐敗し始め、25年程前から「八本指」という裏社会の組織が台頭し始め、この国の腐敗を加速させ、更には著しい発展を遂げた帝国やわが祖国スレイン王国にまで麻薬を流し、多くの民を苦しめているという体たらく。

そして2年前、六大神官長はついにリ・エステイーゼ王国に見切りをつけ、帝国に併合させようと画策し始めた。

その手始めに腐敗が進んでると思われる貴族、それも伯爵家以上の上級貴族を懐柔し始めた。

次にバハルス帝国皇帝とコンタクトを取り、麻薬の流通を徹底的に取り締まり、リ・エステイーゼ王国との戦争を促した。

そして今回、去年の戦争で反抗作戦で帝国に一撃を入れ、帝国軍正規兵に600の損害を出した王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの暗殺

である。周辺国家最強と呼び声高い彼が失脚すればリ・エステイーゼ王国の軍事力は一気に低下し、3年後には帝国が全面攻勢に出て併合と相成る。そうなるはずだ。

しかし、我々が今やっている撒き餌作りはスレイン王国と国境を接しているリ・エステイーゼ王国の王族領、エ・ランテル近隣の、それもスレイン王国寄りの村々を襲い、わざと数人残しその生き残りがエ・ランテルに知らせるようにし、懐柔した貴族どもを動かして王国戦士長に軽装の状態で本来100名で組むはずの討伐隊を現地協力者を含め55名まで削って率いさせ誘いだす作戦だ。その為に多くの無辜の民を犠牲にした。王国戦士長一人を殺害するために。これも人間種全体の繁栄のためだと必死に言い訳し神に許しを請いながら。

??? 「隊長、カルネ村が見えてきました」

部下の一人の声にロンデスは大きくため息をつくど雑念を取り払い走り続けた。目的地であるカルネ村が見えてきた。これ以上この作戦の意義を考えたら足が前に進まない。今考えるべきは、箔付の為にこの作戦に参加している資産家のボンボンの隊長をどう手綱を取りながら作戦を上手く遂行するか。それだけ考えるようにした。

ロンデス「よし、予定通り部隊を二つに分け、西と東の入り口から突入する。ベリユース隊長は私と一緒に西の入り口へ、東口はマイルズ副長に任せる」

3月27日 午前4時58分 カルネ村東入り口

蹄の音が近づいてくる。私(闇信刃)は作戦を思い出しながら村の入り口を睨んでいた。現在ソフィーレア君の護衛は私とモモンガさん、そしてルプーに「二重延長化・完全不可視化Ⅱツインエクステンドマジック・パーフェクトアンノウアブル」をかけて貰ったわが娘ハルカちゃん。

ルプーは村を一通り見回ったモモンガさんが村には入り口が二か所あり、自分だったら部隊を二つに分けて襲撃するという意見を聞き



彼女に「完全不可視化Ⅱパーフェクト・アンノウアブル」を使って西口を見張るよう命じた。まあ確かにそれには私も同意見かな。

彼女一人で大丈夫かなと思ったけどモモンガさんの提案が魅力的なので受けた。それはルプスレギナはカルマ値がー200の為、所謂残虐行為が好きな性格なのだ。(ヒーラーなのにおかしいよねー)何よりも【漆黒の剣】や町の人との会話で彼女がもしかしたら命令よりも欲望を優先するのではないかという疑惑が生まれたのだ。

そこでルプスレギナにある命令をして自分の欲望より命令を優先できるか、確かめようという試みだ。

ルプスレギナに命じたのは2つ。一つ目は「完全不可視化」を使い、西口へ潜み、最低10人位が殺されてから襲撃者たちを倒すこと、その際、最低3人は捕虜として捉えること。二つ目は村人は最初に犠牲になる何人かを残し可能な限り助けること。もちろん最初に犠牲になる数人は仕方がないが間違っても村人が半分以下にならないようにしろ、村の生き残りが半数以下になったら任務は失敗だと思えと言い含めた。理由は犠牲が出てからでなければ助けられても感謝する人間は非常に少ないからだ。そして生き残りが少なすぎてもお礼が期待できないためだ。感謝して貰う人数は出来るだけ多く作りたい。話を戻すけどそんな訳で西口はルプスレギナ一人に任せて私達は東口から見えた襲撃者に対処している。

蹄の音が次第に大きくなりやがて鎧を着て馬に乗った兵士が姿を現した。昨日マークって人が言った通りの格好ね。鉄、もしくは鋼でできた鎧とロングソード。リアルにいた時の歴史書で見た古代く中世に使われた鎧に似てる。ホントに此処の文明は中世レベルなんだなー。

私はエモット家の人はモモンガさんに、ンフィーレア君のことはルカに任せて向かってきた帝国兵の格好をした何者かに聞いたのだ。ジークムンド(以後ジーク)「お待ち願いたい。我はジークムンドと申す者。貴公らは何故このような所にそのような格好で来られたのかお聞かせ・・・！」

全て言い終わらぬうちに騎乗した兵士の一人がロングソードを私

に振るってきた。私はその剣を最小限の動きで躲すと軽く跳躍し騎乗している兵士に向かつて胴体を横なぎに切った。

ジーク「・・・願いたいが無理か」

他の騎馬兵達は一瞬たじろくがすぐに「やりやがったな」というお決まりの台詞と共にこちらに再び攻めかかってきた。ちなみに私は馬が好きなので二人目は切りかかってきた拍子に頭上に飛び頭を真つ二つにした。着地した瞬間を狙いもう一人が袈裟懸けに切りつけてきたがそれは腕に取り付けたスモールシールドで弾き鎧の脇から剣を突き出した。剣はまるで豆腐に箸を突っ込むように大した抵抗もなく鎧ごと兵士を貫いた。

私はその兵士をの腕を掴んで後ろから続く騎馬兵にぶん投げてやった。上手く馬を避けてあたった。さて、3く4人は殺さず捕縛しなきやね。後、敵さんに習って私も騎馬戦と行きますか。

幸いその馬は聖騎士のスキル「威圧」が効いて私に従ってくれた。

結果は重畳と言っていると思う。ンファイレア君とエモット家の人はもちろん村人にも被害を出さなかった。途中で、標的を村人に変え私への対抗手段にしようとしてエモット家の人に襲い掛かったがモモンガさんの一閃で事なきを得た。25人ほど切ってから敵が撤退の笛を吹いた。私はすかさずルカに「麻痺IIパラライズ」で残りを捕縛しろと命じて私自身は剣で峰内とかで二人ほど気絶させて捕らえた。結果的に東口では5人捕縛できました。ンファイレア君にも彼と片思いの人を守るシーンを見て貰えたとし、一応だいじょうぶだね盟主？。

それにしてもこの世界の強者のレベルがまだわからないんだよね。ユグドラシルプレイヤーの中には防御力を捨てて攻撃力を極限まで高めている奴もいたから(式式炎雷さんとか)まだまだ油断できない。もしかしたらルプスレギナが担当している西口方面にレベルや低くても、攻撃力、防御力に特化した奴がいるかもしれない。

ユグドラシル時代、その油断が元で何度煮え湯を飲まされたか知れない。こっちは片付いたからモモンガさんにこちらは任せて様子を

見に行こうかしら。

3月27日午前7時20分 カルネ村倉庫

ロンデス・デイ・クランプは地面に寝そべりながら沈黙考していた。

どうしてこうなった。いや、最初からおかしかったのだ。村に突入してから不意におかしなことに気づき止まった。村が閑散としているのだ。部下たちに周囲の探索を命じたら、村人が十人単位で森の中に逃げようとしていたのだ。おかしい、此方が到着する前に逃げるなんて・・・こちらの襲撃を知っていた。それ以外考えられない。

しかし、村人が逃げ切る前に我々は間に合ったようだ。全員でなくとも最低3分の1は殺さなければ今回の計画が失敗に終わるかもしれないからだ。

3月27日 午前5時 カルネ村西入り口

ベリユース「なんだこの村は、誰もおらんではないか？おいロンデス、どういうことだ？」

ロンデス「分かりませんが、恐らくこちらの襲撃を何らかの形で知りえて逃亡したのでしょう。どこから情報が漏れたか分かりませんが・・・ん、ベリユース隊長、あちらに逃げ遅れた村人がいます。あちらに向かいますよ」

ベリユース「おっ見つけたか、おい行くぞのろまども、あの集団を全力で追えつ、俺の手柄の為に？」

部下たち「「はっ」「」」

ベリユース「おいつ探索している奴は集まれ、あー、後若い女は殺さずにとらえろよ、爺と婆は殺せ、忘れるな」

ロンデスも部下たちもこの何度も変わらぬ台詞にうんざりしながらもこれも仕事だと割り切り剣を抜いて逃げ遅れた村人の背後を襲った。

私達の最初の失敗は逃げる村人に気を取られて後続の兵達が突然落馬した事に気付かなかった事だろう。

次に異変に気付いたのは逃げ遅れた村人を10人ほど切った時だった。ガキン、ドシャツという音で私(ロンデス)は振り向いた。理由はここ数日に聞きなれた村人が倒れる音と違ってたから。何と云うか金属鎧が何か別の金属で殴られ地面に落ちた音に似ていたから部下の一人が転んだのかとそう思ったからだ。

そしてそれは聞き違いじゃなかった。私の視界には頭を潰された部下が横たわっていた。

誰の仕業だ。自分が村人を見つけた時反対側に別の村人がいたのか。それに鉄兜を被った兵士の頭を潰して姿を消した。魔法か?、流石にそれは無いだろう。村人の中に白金等級以上の元冒険者がいたというならありえなくはないが……。と考えている内に続けてもう一人がゴシヤツ、ンーリヤアという音と共に落馬した。

ロンデスは馬から降りて倒れた兵士の元へ駆け寄った。見ると腹に鎧を貫いて開けたような穴があった。穴の周囲もへこんでいることから棘の付いたメイスのようなものと推測できた。

それよりどこから攻撃している?。部下の一人がいきなり吹っ飛んだ時何も見えなかった。それに金属音に交じって女の声が出た:これはまさか……。

ゴキン。再び金属の衝突音がした。そしてその攻撃で確信する。

ベリユース「な、何が起こっている。敵が見えない。おいつお前ら俺の周りを固めろ?、俺を守れ?」

ロンデス「隊長?、敵は恐らく不可視化の魔法を使っております。

敵は魔法詠唱者です?」

ベリユース「ならどうすればいいんだ」

ロンデス「分かりませ……。いや、円形の陣を組むんです。それなら敵の攻撃が誰かに当たればその者の目の前に敵がいるという事ですか?、そこに集中攻撃をかければ……」

ベリユース「よ、よし、お前らつ全員集まれ、俺と副長を中心に円形の陣系を組むんだつ、いいかつ、何よりも俺を守れ、それが最優先だ」

周りの部下たちは舌打ち、或いは殺気交じりな「隊長のお前が前に

出るよ」という視線を向けながら一方が隊長に、もう一方が副長の元に10人づつ集まり陣形を組んだ。生き残っているのは22名。すでに8名がやられていた。

もうこれで隙は無い。一人二人やられても確実に敵は補足できる。これが二つ目の過ちだった。相手がマジックキャストでなければ正解だったのだが…。

ポウツと言う音がした方向に視線を向けると大きめの蠟燭の炎が現れ、ベリユース率いる一団に放たれた。

第3位階魔法「火球IIファイヤーボール」ならロンデスも知っているし、反応して躲すことが出来る。しかし内包する魔力が低い魔法詠唱者でもこんな小さな物にはならない。内包する魔力や熟練度で火球の大きさが変わるのを知っているがこんなに小さくはならない。

どういうことか分からない。ベリユース隊長率いる兵士達も同様だったようでベリユースは3歩下がったが前の兵士4人がそっちへ向けて防御を厚くしたが後の者はこちらに向かう蠟燭の火を黙ってみている。

その火は兵士の盾に着火した瞬間、その兵士を中心に直径10〜12m位の炎の柱となって前で固まっていた兵士達を焼き尽くした。

円陣はベリユース隊長を中心として兵たちは3m程間隔をあけて組んでいたので全滅は免れたが一撃で4人が即死、2人が重傷を負った。

ベリユース「うわあああつ」

ベリユース隊長は悲鳴を上げながら逃げた村人と同じ方向に走り始めた。直感的に村人と一緒にいたほうが安全だと踏んだのだろう。

しかし、「ぐぎゃつ」という間抜けな音と共にドサリと地面に倒れた。

レギナ「につしつ。いくいリアクションっすね〜」

美しい声をした次の瞬間、ケガをした二人に肩を貸した数人を囲むように3つの魔法陣が現れ火球が生まれ、残り6人に放たれた。

ロンデスが逃げろと声を上げる間もなく3つの「火球IIファイヤー

ボール」が着弾し、最低の隊長ベリユースを守っていた6人は業火に焼かれた。

兵士A「いやだ、いやだ」

兵士B「神よ…お助け下さい」

ロンデス「落ち着けー？、撤退の笛を吹け。バラバラに逃げれば何人かは助かる。いけっ」

スレイン法国だい9軍の兵士たちは今回の様に少数で行動する時も隊長、副長、そして連絡係は作戦成功時と失敗時用に使う合図の笛を用意していた。副長の檄に神にすがっていた兵士は意識を取り戻し、笛を持っていた兵士が作戦失敗用の笛を吹いた。これで東口から村を襲っていた者たちにも作戦の失敗が伝わったはずだ。

それを確認してから皆がばらばらに逃げようとした時不意に周りを取り囲んでいた兵士たちが3人、一斉に倒れ始めた。

恐らく魔法だろう。第1位階魔法「眠り」スリプ」か。ロンデスはやばいと敵の目を誤魔化すため東口へ向けて逃げようとしたらその方向に一人の男がいた。

この非常事態に相手を確認する余裕など有るはずが無く、その男に向かって剣を振るった。

しかし、剣閃はその男には当たらなかった。突如全身に悪寒と電流のような衝撃を受け、わずかに意識を保ったまま崩れ落ちた。この衝撃にはロンデスには覚えがあった。

殺気だ。それも一般人やそこらの兵士や将軍が出せるものじゃない。漆黒聖典第一席次の者だ。

以前稽古に付き合わされた時味わった悪寒と衝撃。その瞬間動けなくなりその場にへたり込んだ。意識を手放せれば楽だったのに…。

3月27日 午前7時35分 カルネ村飼葉保管用倉庫

私は捕虜となった兵士20名を「道具創造IIグレーターアイテム」で作った手錠と鎖を着けて、念のためもう一度全員に「眠り」をかけた倉庫に押し込み、ルプスレギナとハルカを労っていた。

ジーク「よくやったなルカ、レギナ、捕虜を20名も捕まえるとは  
私の予想以上だ」

モンガ「俺からも礼を言う。作戦は大成功と言っていい」  
ルカ+レギナ「ありがとうございます」

あの後、エモット家の人からも涙ながらに感謝された。襲撃者の捕虜も取れたし結果は上々ね。後は薬草採取をしてエ・ランテルへ帰還した時、私達を宣伝して貰えるように頼めば今回の依頼は大成功。

村人たちは現在墓地に殺された10人の遺体を埋めに行ってる。殺された人の家族は敵を売ってくれてありがとうと言ってくれた。

襲撃者たちに何人が殺させたのはやはり正解だった。こうして恩を売っておけば後で何かと役に立つ。

でも再確認になるけど村人たちが目の前で殺されているのを見ると過去の体験が蘇り、虐殺行為をしたやつを殺したくなるけど、死体自体は見ても何も感じない。人間の残滓が無くなった時私達はどんなってしてしまうのだろうか？

さてと、そのことで悩んでも仕方ない。治し方が解らない以上なるようになる、としか言えないし出来ない。今はそれより襲撃者たちの尋問をしよっと。

尋問の結果様々なことが判明して、現在村長宅で私とモンガさん、ンファイレア君と村長さんを交えて相談会が開かれた。

議題は襲撃者たちの正体と尋問の途中で何人かの兵士が血を吐いて死んでしまったことだ。

モンガ「しかしどう解釈すべきですかね……。バハルス帝国の騎士たちではなくスレイン法国軍第9部隊、か」

ジーク「バハルス帝国の鎧を着ていたのは帝国軍の仕業に見せかけるための偽装……か。そして目的は王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの抹殺」

ンファイ「……本当にすみませんでした。まさかこんな大事に巻き込んでしまうことになるなんて」

モンガ「いえ、あなたに罪は有りません、ンファイレアさん」

ジーク「作用。例え偶然村に通るかかったただけだとしても、それだけの為に無辜の民を虐殺するような輩は、例え組合のルールに反しても我は介入していた。奴ら・・・悪道と外道をはき違えやがって・・・」

モンガ「ジーク、殺気が漏れてるぞ、ここにはただの村人もいる、お前ほどの奴が本気の殺気を向けたら女子供は死にかねんぞ？」

ジーク「すまぬモンガー殿、連中の行為にいら立ちを隠せなかった」

どうやら私達は3か国の陰謀にまきこまれてしまったよう巻き込まれてしまったようね。正直国に目を着けられることは避けたいんだけど。

ジーク「モンガー殿、ンファイア殿、今回一番積極的に介入した自分が言っても説得力が無いが、国がらみの事件となると一介の、それも最低ランクの冒険者の手におえる事案ではありますまい。敵が彼らの他に法国の特殊部隊が来ているのも確認できました。彼らの目的である王国戦士長が来る前に我々とンファイア氏とエモット家の皆で逃げるという手もあるがいかがか？」

ンファイ「待つて下さい、この村を見捨てるって言うんですか？」

そんな時不意にモンガーが左手で自分のこめかみを叩いた。「伝言」を使ってくれと言う合図である。

モンガ「待つてくれジーク、エモット家の人がこの提案を受け入れる可能性は低い。それに敵の別動隊が口封じに出る可能性もある。そして最大の懸念が敵の別動隊が我々を監視していた場合だ。その場合我々の存在はどの道法国に伝わる。何より薬草採取も終わっていない以上初めての依頼が失敗だったなどと言う風評が立つては今後の仕事に差し支えるしな」

私は「伝言」で話しながらンファイア氏や村長に悟られないよう2、3分悩んでる振りをした。

※ここからは「伝言」で悩んでる振りしながら話していた内容です。

モモ「闇信刃さん、確かに撤退は正解だと思います。コネクション作りも出来ていない今日立つことをして権力者に睨まれるわけにはいきませんから。でも今回、私はあえてここに残りスレイン法国の別動隊と闘うべきと判断します」



闇「その理由は如何に？」

モモ「一つ目は今撤退して村が滅ぼされた場合、せつかく苦勞して培ったンファイアという貴重なタレント持ちとの縁が切れてしまふ可能性が高いです。そうなるとエ・ランテルの権力者の一人である彼の祖母とのコネクションも失います。それにエンリ・エモットとその家族だけを村から連れ出すにも説得できる可能性は低いでしょう。それに何故エモット家だけなんだと村人たちが激怒して一緒に連れて行けという可能性の方が高いでしょう？、どう考えても」

闇「確かに・・・」

モモ「二つ目はスレイン法国の別動隊が村を滅ぼし、私達はその場にいたという事が後になってばれたらその悪評が我々の今後の仕事に悪影響を及ぼす可能性が有ります。」

闇「組合から回される仕事にも制限がかけられるかもしれないませぬな」

モモ「最後にスレイン法国の別動隊は特殊部隊として扱われているからそいつらと王国戦士長とか言うやつが闘う所を『遠隔視の鏡』で見たいのです」

闇「：読めました。この世界のレベルを凶る気ですな」

モモ「はいっ、ドワーフ族の味方をした際この世界のモンスターの中では強者の部類に入るフロストドラゴンと闘いましたが、まだ人間の強者とは一度も闘っておりませんしその戦いを見たこともありません。これって後々やばいと思うんですね」

闇「盟主の慧眼お見事。そういたそう。では「伝言」を切ります」  
※以上です。話を戻します。

ジーク「うーん、ではンファイア氏、こういうのはどうだろうか？。もしこの国の警察：失礼、貴族なり役人なりに今日の事を聞かれた場合、襲撃者たちからは何も聞けなかった。闘った相手はどこのだれかは解らない。そう伝えていただきたい。でなくばこの国はもちろん周辺国家の権力者から目を着けられる」

ンファイ「分かりました。彼らの正体については何も知らない。我々は薬草採取に訪れた村でたまたま襲われたので撃退した。村長もよ

ろしいですね?」

村長「分かりました。役人が来たらそう伝えるよう私からも村人を説得しましょう」

ジーク「次の議題ですが、尋問の最中捕虜の兵士たちがいきなり血を吐いて死んでしまった理由について心当たりはありますか?」

村長「いえ、私に思い当たることは何も・・・」

ンファイ「あれは自害したのではないのですか?尋問していた相手に目立った外傷は有りませんでしたから」

モンガ「死ぬ直前、何か口の前に魔法陣が浮かび上がるのを見ました。私は魔法には詳しい方だと思っておりますが・・・この世界特有の魔法なのでしょうか?」

ンファイ「この世界特有・・・?」

モンガ「あ、ゴフンゴフン、失礼、スレイン法国で独自に派生した魔法なのではと・・・例えば追い詰められた時苦痛を感じずに死ぬる魔法とか：私は知りませんでした」

ジーク「我もそのような魔法に心当たりはありませんがモンガー殿の意見は間違っていると考える」

モンガ「その理由は?」

ジーク「もし自決用の魔法が存在しているのなら、何故捕虜にされた時点で使わなかったのか、仮に尋問している最中、これだけは話してはいけないという核心的な部分に触れた質問をしたから自殺を選択した場合だが、それだとタイミングが不自然すぎる」

ンファイ「タイミング?」

ジーク「如何にも。先程行った二人の尋問を思い出して頂きたい」  
く回想く

モンガ「その別動隊とは?」

兵士「す、スレイン法国の特殊部隊『陽光聖典』です。特殊部隊『六色聖典』の内の一つです」

モンガ「どういう部隊なんだ?」

兵士「は、はい。陽光聖典は第3位階の魔法詠唱者で構成されたエリー、トト・・・うぐっ」

その兵士は陽光聖典の概要を説明していた最中突然口元に見覚えのない魔法陣が浮かび上がったのよね。私は勿論、盟主も驚いてた。魔法に関しては盟主の方が遥かに詳しいと思っただけどやっぱり盟主も知らない魔法だったんだね。

それから直ぐにその兵士は血を吐いて倒れた。魔法陣が発動してから僅か数秒でだ。即死系の魔法だろうか？、自殺？でもそれなら何故質問に答えているタイミングで？。

く回想二人目く

モンガ「その六色聖典の中で最強の部隊は？」

兵士2「特筆すべきは漆黒聖典です。漆黒聖典はスレイン王国の中でも貴族、平民問わず才能ある人材が集められ、隊員の中には第5位階の使い手までいるとか、中でも漆黒聖典の隊長は陽光聖典全員でかかっても・・・う、うぐ・・・がああっ」

二人目の兵士も説明している最中に突然口元に魔法陣が現れたと思えば急に苦しみだし、死を迎えた。両者とも3つ目の質問に答えている最中だった。

く回想終了く

ジーク「以上の状況から少なくとも自殺ではありえませんが。自殺なら質問に答える前にしているはずですから」

結局尋問はこれで打ち切りになっちゃった。これ以上続けたら自分で下を噛み切る奴が出てくると思うし、全員殺してしまったらこれから来るでしょう王国の軍勢と交渉できなくなっちゃおうし。

3月27日 午後2時半 カルネ村東口前

私達は村長宅で話をまとめた後、エモット家の家が見える位置でしゅういに村人がいないことを確認し、チーム全員で話し合った。

モモ「という事で、スレイン王国の特殊部隊とリ・エステイゼ王国の軍隊の衝突を見学し、王国軍が負けそうになったら加勢するとう方針となった。お前たちに相談せずに決めてすまなかった」

ハルカ「いえ、至高の…我らのリーダーがお決めになったことなら

間違いはありますまい。我らは喜んで」

ルプー「私も問題ないっすよ」

闇「何か質問があれば聞くが・・・待て、盟主、どうしたシャドウデーモン・・・。よし分かった。盟主、八肢刀の暗殺蟲がこちらに向かつてくる人間の集団を確認したそうさ。数は42、しかも先程の襲撃者たちとは明らかに装備が違うそうです」

モモ「いよいよ特殊部隊とやらのお出ましか」

闇「いえ違いますな。恐らくリ・エステイーズ王国軍でしょう。しかもどういうわけか【漆黒の剣】のメンバーも同行してるそうです」  
モモ「では王国の軍勢で確定だな。むしろ他に考えられん」。しかし42名だと・・・中世時代の軍隊にしては少なすぎるな・・・。その時代は討伐隊と言えば最低でも100人単位で行動していたはずだが・・・」  
話が終わった後、見張り台にいた中年が「た、大変だー」と言いながら村長宅へ駆け足で向かっていった。

3月27日 午後2時55分 カルネ村中央広場

私と盟主とルプスレギナは村長にせがまれて村の中央で素知らぬ顔をしながら王国の軍勢を待った。それを知らせに来た村長が捨てられた子犬のような眼をしていたのはおっさんとはいえちよつと辛かったね。言葉に出してなくても何を言いたいのかわかりでした。純真な目で潤まれながら迫られるとつらいね。

ちなみにインフィー君とエンリちゃんとそのご家族は村長宅の傍にある穀物用の倉庫に避難してもらってます。念のためハルカと八肢刀の暗殺蟲が一体同じ倉庫に待機してもらってるのでだいじょうぶだよな。・・・多分。

やがて砂埃を上げながら馬に乗った集団が広場に駆けつけてきた。確かに装備は先程の帝国の者とは違う。基本的には同じ『複数重ねがけ革鎧Ⅱハードレザーアーマー』だが何人かは動きやすいよう独自の改造をしてある。まるで傭兵集団だ。

ペテル「あつモンガーさん、ジークムンドさん」

ペテルが馬から降りて手を振って歩いてきた。ルクルット、ダイ  
ン、ニニヤも一緒だ。

モンガ「これは皆さん、どうしてここに、それにそちらの方々は一  
体……」

ジーク「見るからに傭兵団とお見受けするが」

ペテル「こちらは王国の精鋭部隊、王国戦士隊の方々です」

戦士隊？……この時代国王直属の部隊と言えば騎士団と言うはず  
だが……。

ガゼフ「お初にお目にかかる。私は王国戦士長ガゼフ・ストロノー  
フ。王のご下命を受けこの辺りの村を荒らしまわっている帝国騎士  
たちを討伐するために村々を回っているものである。この村の村長  
は何処に」

村長「は、はい。私でございます」

ガゼフ「この村に帝国騎士の格好をした賊が来なかったか？」

村長「ええ、確かにその様な者に襲撃され村人が10人以上殺され  
ました。ですがこの方たちに助けて頂いたのです」

ガゼフ「その者たちは何者だ？」

村長「この方々は……」

モンガ「ご紹介には及びません。初めまして王国戦士長殿。私はし  
がないエ・ランテルの冒険者でモンガーと申すものです。後ろに控え  
ますのはパーティーメンバーのジークムンドとルカです」

ガゼフ「この村を救っていただき感謝の言葉もない。ある程度の事  
情はこちらにいる【漆黒の剣】の方々にお聞きしましたが宜しければ  
詳しい経緯を聞かせていただけませんか？」

モンガ「分かりました。ジーク、レギナ、お前たちはペテルさん達  
と話していてくれ。私は戦士長殿に事情を説明しているから。失礼  
しました。私達はエ・ランテルでンファイレア氏から【漆黒の剣】の  
方々と一緒に護衛と薬草採取の依頼を受けまして……」

私とレギナは他の【漆黒の剣】のメンバーから質問攻めにあってい  
た。皆驚いたり呆れたり世話しなかつたな。

ルクル「レギナちゃん。元気してたー？あなたのルクルット・ボ

ルブが会いに来ましたよー」

レギナ「ドーモつす。相変わらずのダメっぷりで嬉しいつすよ」

ルクル「くーっ、レギナちゃん相変わらずキビシー?」

ダイン「何はともあれ無事で何よりである」

ニニヤ「ホント、ゴーレムが動かす馬車で夜道を進むなんて聞いたときは驚きましたよ。再会できてほっとしてます」

ジーク「陳謝いたす」

ニニヤ「それでンファイアさんは、私達の依頼人は無事なんですか?他の村人は無事だったのですか?」

ジーク「それについても報告があります」

私はこの村に来てからスレイン王国の兵士達との闘ったことまでを話した。しかし、ンファイア君との約束で、スレイン王国が関わっていることなどは上手くぼかした。

ペテル「そうですね。エモット家の人たちが無事だったことは僥倖でしたがその賊の正体は解らずじまいなんですな」

ダイン「しかし、話す前に自害したというのは気になるのであるな……ルクル「俺もだ。もしたただの山賊の類なら捕らえられたら情報と引き換えに命乞いとかするはずだが……」

ニニヤ「それに帝国騎士の装備を全員がしているというのも気になります……仮に帝国の仕業だとしてもおかしいですよ。そもそも立地的に帝国が辺境の村を襲うメリットは無いはずですよ」

ジーク「それはどういうことですか?」

ニニヤ「はい、リ・エステイーズ王国とバルス帝国は4年前から毎年の9月から10月にかけて戦争をしています。ですがたとえ王国側にダメージを与えることが目的だとしてもこんな辺境の村を落とすメリットがどうしても思いつきません」

ルクル「でもニニヤよー、実際に帝国の騎士たちはこうして襲って来てるんだぜ。国がらみの事件ならなんで無益な事すんだよ?。今の皇帝は聡明な人物って聞け。現に帝国は今の皇帝になってから繁栄しているだろ?。」

ニニヤ「そうなんですよね……。毎年の戦争を有利に導くためじゃな

いとすると・・・ん？戦略ってことは誰かを誘ってる・・・？いや、まさか：でもそれ以外可能性が：」

へえー。ニニヤ君って中々鋭いね。流石にスレイン法国が絡んでいるとは想像できないみたいだけど。

ニニヤ「不味い・・・相当不味いですよこの事件？。ジークさん、それに皆聞いてください。今すぐンファイレアさんを連れてここから離れましょう」

ペテル「どうしたんだ急に？」

ニニヤ「これは恐らく罠です。この襲撃事件は其処にいる王国戦士長を誘い出すためだったんですよ」

ジーク「待つていただきたい。その事なのですが・・・」

私は彼の言葉を制し、ンファイー君と話し合ったことを伝えた。

ペテル「そうですか・・・。バレアレさんが残ると・・・」

ダイン「別動隊が来ると予測される以上、そして子供や年寄りがいる以上、街道を通つていては直ぐに追いつかれてしまう。ならトブの大森林に避難する方が確かに生き残る確率は上がるのであるな」

ニニヤ「でもモンガーさん達はいいのですか？冒険者は基本的に国事に関わることはご法度なのですが・・・」

ジーク「それは大丈夫です。敵にとつてこの作戦は言わば暗殺・・・。公に出来ない戦いです。関わったところで我々を責められませんよ。冒険者組合に訴え出たらそれは王国戦士長殿の暗殺を認めるのと同じ。戦争以外の手段で王国の要人を貶めたなんて知れたら政治的にも外交的にも大打撃です。その心配はありません」

こうして相談の結果、【漆黒の剣】のメンバーも本来の目的である薬草採取がてら数日トブの大森林に避難するという方向で落ち着いた。

そして、モンガーさんと話があるとその場を離れてから間もなく姿を消した八枝刀の暗殺蟲からこの村に向かつてくる一団があるとの報告が入る。人数は36名。恐らくスレイン法国の特殊部隊『陽光聖典』だろう。

モモンガさんとハルカにもその事を伝え、打ち合わせの結果ガゼフ・ストロノーフを囮に使う事を決め、装備品の見直しを始めた。

そして30分後、王国戦士隊の一人が凶報を知らせに来た。  
王国戦士隊1「戦士長。複数の人影を確認。村を覆う形で接近しつ  
つあります」

さあ、Let's party?